斎木学園騒動記（夏騒動編）

雨ふらし。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斎木学園騒動記（夏騒動編）

【Ｎコード】

Ｎ６８４４Ｅ

【作者名】

雨ふらし。

【あらすじ】

今年の夏は異常だった。なぜなら、『彼女』が夏を生み出せなかったからだ。行方不明の『彼女』を求め、学園怪盗と、魔法使いの生徒会長と、精霊界の使者が、生徒会室で出会うとき、物語が動き出す。

プロローグ

はじめまして！！

この斎木学園は奇人変人の集まる学園であります。

転校転入が異常に多く。ひとくせもふたくせもあるような学生が、個性を武器に日々暮らしております。

個性の強いヤツらが集まると、どうしても騒動が発生します。

そう、この学園では、日常的に大小様々なトラブルが起こっています。

今回のトラブルは、『夏』。

『夏』という季節に関わる、事件です。

これを読んで、あなたの夏が、思い出多きものになれば幸いです。

では、のんびりお楽しみくださいませ。

ACT・1『中庭にて』

ACT・1

今日も暑い一日だった。

湿度の高い、じめついた空気が肌にへばりついてくるようだ。
うっとうしい日々が続いている。
そういえばこの一、二ケ月は、からりと晴れた青空というものを目にしていない。
常に薄雲が空を覆っていて、朝、出掛ける際には必ず雨具を手にしていなければならないという生活である。

今朝のニュースでは、気象庁がついに梅雨明け宣言をしない旨を発表していた。梅雨明けしないまま、そろそろ秋雨前線がやって来そうだというのである。
この異常気象について、ニュースキャスターはしきりにエルニーニョがどうのとか、その反動でラニーニョがどうのとか、曖昧なコメントをぶつぶつとつぶやいていた。

天気は悪いが、とにかく暑い。
しかも、南国の島国のように、陽気さのある暑さではないのだ。
こういった暑さは、不快なだけであった。

八月に入ってからは、ずっと毎日がこの調子のため、世間的にもおかしな雰囲気が漂ってきていた。
ささいな事でケンカをして、相手に重傷を負わす事件。
夜泣きがうるさいという理由で、我が子を親がカッとなって殺す

事件。
突発的にヒステリー状態になり、意味をなさない事を口走り、路上で発狂するサラリーマン。
普段、特別問題を抱えていなかったはずのおとなしい高校生が、ある晩急に自殺を図ったり……。
ひまつぶしのためだけに、無抵抗の小動物をなぶり殺す子供たちの増加……。

夏らしい夏が来ないだけで、人々の心も歪み始めているようだった。

ふと、街角で足を止めて、道行く人々の顔を見てみる。
すると気づくはずだ、その顔には明るく開放的な表情は一つもないことに。
うつむきかげんで、暗い目をした人々がぞろぞろと列をなして歩いていく。
誰も空を見上げようとする者がいない。

そこには、見ただけで思わず笑みがこぼれてくるような青空も、全身を焼き尽くしそうな燃えさかる太陽も、夏を象徴する入道雲もないからだ。
あるのは重々しい鈍色をした雲。

……もう、八月も終わろうとしている。
本当に、今年の夏は異常なのであった。

☆　☆　☆

頭上の梢の中で、セミがかすれた声で鳴いている。
普通であれば、それを見上げるには目を細め、まぶしい木もれ日

に対抗しなければならないはずだ。
が、こんなぐずついた天気ではその必要もない。
重く湿った空気が、全身にぬるぬるした汗を吹き出させている。
今日もさっぱりしない一日であった。

世の中の全てが、よどんだ雰囲気に包まれて、だらだらしているように思われる程である。
だがしかし、そんなじめついた空気を吹き飛ばすかのような、パワーに満ちている存在があった。
元気のないセミの声を聞きながら、学園の中庭の一角で黙々と木刀の素振りをしている少女がそうである。

長い髪をまとめるのと、汗止めの役目を兼ねたハチマキを締め、きちんと白い袴を着込んでいる。

りん、とした表情。
真っ直ぐ伸びた姿勢。
斎木学園一といわれる女剣士、島村弥生であった。

すっ、と木刀が頭上へ持ち上がる。
ひゅっ、と打ち下ろされる。
また、木刀が持ち上がる。
ひゅっ、と打ち下ろされる。

何の変哲もない素振りだが、しかし、それだけの単調な動きの中に、たまらない緊張感が秘められている。
この不快な蒸し暑さの中で、彼女の周囲だけは空気の質が変化している。そんな雰囲気をまとっているようである。
ゆったりとした動きの中から、びりっとした気迫が伝わってくるのだ。

少し離れた所、ちょうど木の枝によって日影になっている芝生の上に、きちんと正座をしてその姿を見つめている少女がいた。
セミロングの髪を、横で一ケ所結び、くりっとした大きな瞳で、静かに弥生の動きを眺めている。

童顔のせいか、ぽわっとしたイメージのこの娘も、弥生とはまた違うタイプの涼しげな雰囲気を持っている。
蒸し暑さに不快そうな様子も見せず、きょとんとした表情のまま弥生の素振りに見とれていた。

ひゅっ。
ひときわキレのいい音をさせ、素振りが終わったらしい。
刀を鞘に収める動作をして、ふっ、と弥生の全身に満ちていた緊張がほどけていく。
ふう、と一つ息をつくと、厳しい表情で前方の空間を見つめていた弥生は、にっ、とさわやかな笑顔を浮かべて振り返った。

「ありがと和美ちゃん、もうお終いよ」
「お疲れさま、はい」
そういって少女、相沢和美は弥生にタオルを手渡した。
素振りの最中には気が満ちているためか、ほとんど汗をかかないのに、動きを止めた途端に全身に吹き出してくるのだ。

「あ、ありがと」
ごしごしと、男っぽく顔をこすると、タイミングよく和美がスポーツドリンクを出してくれた。
のどもカラカラだ。
「うわあ、サンキュ」

「ど―いたしまして」
タオルを頭にかぶって、弥生は和美の隣に腰を下ろした。ごくごくと喉を鳴らして、スポーツドリンクを飲む。
「ぷはあっ、この一杯がもうサイコーよね」
心底うまそうにつぶやく弥生の横顔を、くすくす笑いながら和美は見ている。

渇きも癒えて、気持ちが落ちついた弥生はタオルで顔をごしごしやりながら、
「ホント、いつもつきあわせちゃって悪いわね」
と片目をつぶった。
ぷるぷると、和美は顔を振る。
「いいんですよ、夏休みっていったって別にすることないんですから」
「こおら、いい若いもんがそんなことでいいのかあ？夏休みはもう明日で終わっちゃうんだぞぉ」
ぐりぐりと、弥生が肘で和美をつつく。

「そうですよねえ、もう夏休みが終わっちゃうんですよね」
しみじみと和美はつぶやいた。

夏休み終了、二日前。
今日と、明日とでもう新学期が始まってしまうのだ。
思わずため息がもれてしまう。

学生にとって、夏とは「夏休み」を意味しているだろう。
この長い休みが終わるということは、いくら暑さが残っていようとも、夏が去っていってしまうということなのだ。
様々な思い出がたっぷりつまっている、約一ケ月間のかけがえのない時間……

それが残りわずかというのを認識した時、彼らはふと寂しさを覚える。
それはいわば、祭りの後の虚脱感と同じ気持ちであった。
「逆につき合ってもらっちゃってるの、あたしの方ですよね。弥生さん、結局一度も里帰りしなかったじゃないですか」
「あー、いいのいいの、家に帰ったってうざったいだけだからね」
手をぶらぶらさせて、弥生が笑う。
和美が真剣に申し訳無さそうな顔をしたものだから、わざと口調も明るいものになる。
それに気づいてか、和美も暗い表情になるのをこらえて笑みを浮かべてみせた。

この斎木学園は全寮制である。

長い休みになると、ほぼ全員が実家に帰るため、寮内に残るのは特殊な事情の持ち主だ。
例えば、この相沢和美はある事情のため帰る家がない。その上、一学期の途中に転入してきたばかりなので、ロクな友達もできないまま、夏休みに突入してしまった。
弥生が実家に帰らず、寮に残っていなかったら、ポツンと独りぼっちのつまらない夏になっていたことだろう。

だが、そうはいっても和美に気をつかって居残っているというだけでもなかった。
「あいつが帰ってきたら、まっ先に殴りつけてやりたいもんね」
少し前にも、こんな会話をした時、ぽつりと弥生は言ったのだ。
……行方不明の「あいつ」が帰ってくるのを待っている。

それには、この「斎木学園」で待ち続ける事が必要なのだった。
「お兄ちゃん、どうしてるのかな……」
「そうねえ」
ごろん、と弥生は芝生の上に大の字になった。
灰色の、重苦しい空を見上げ、ため息をつく。

「どーも、休み前に大騒ぎしすぎたせいか、今年の夏ってパッとしなかったような気がするのよね……盛り上がらなかったっていうか気分的にこう……」

その感覚が、弥生はうまく言葉にできないらしい。

「お兄ちゃんいなかったからですか？　あたしも、なにか大事なものが欠けてたような感じがするんですよ」
和美も同じような気持ちらしい。
弥生の真似をして芝生に寝ころがり、空を見る。

「ねえ和美ちゃん、最近青空って見た覚えある？」
何気なく、弥生がつぶやく。
「いえ……なんだかいつも雨の心配をしてた気がします」
すぐ横に置かれたバッグの中にも、折り畳みガサが入っているのだ。

「そうよねえ、ったくヘンな夏だったわ、というより……」
ちら、と和美と視線が合う。

「『今年は夏が来なかった』って感じ？」

目で和美もうなずいた。
はあ～あ、と弥生がまた大きくため息をもらす。

若い娘が、昼間っからため息ばかりついて、じめじめした会話をするのもサマにならない。

何か、景気のいい話はないものかと考えを巡らして、弥生が口を開く。

「そだ、この間の美術館のドロボウ騒ぎ、あれってどうなってるのかしらね？　和美ちゃん、もう一回聞かせてくれない」

「ええ～、やなこと思い出させないで下さいよぉ。それでなくても現場にいたってだけで、おまわりさんにさんざん事情聴取されたんですから～」

とほほ、と和美が情けない顔になった。

「いいじゃないの、新学期の学校新聞にさっそく載せるんだから、和美ちゃんの証言のおかげで犯人像が絞り込まれるかもしれないじゃない？」

「え～ん、せっかく騒ぎが落ちついてきたのに蒸し返さないで下さいよぉ」

「いいえ、大衆は知る権利があるのよ、さあ現場に居合わせた者の生々しい声を私に聞かせてちょうだい！」

「何度も話して聞かせたじゃないですか！　もう」

ぷくっ、とほっぺたをふくらませて和美は話しはじめた。

☆　☆　☆

二人が話をしていたのは、この日より少し前に起こった『美術品盗難事件』についてである。

たまたま、和美がその時美術館にいたため、大騒ぎになる様子を実際にその目で見たという訳なのであった。そして、その盗難の手口も少々変わっており、この夏休み中の忘れられない出来事の一つとなったのだった。

その日、和美は美術のレポートの為、一人で美術館に来ていた。何でもいいから美術館に展示されている作品をもとに、感想を書いてこいという宿題なのである。

今の時期、何が展示中であるのかも知らないまま出掛けてきたのだが、特設展示部門はルネサンスものであり、なかなか見応えのある絵画が揃っていたのでラッキーであった。

もともと油絵などを鑑賞するのは好きである。

入場客のまばらな館内で、まず半日は時間を潰せると和美は思っていた。

手にしたパンフレットの解説を読みながら、じっくりと、繊細かつ荘厳に描かれた作品を眺めていく。

と、

和美は一枚の絵の前で立ち止まった。

そこには、一枚の祭壇画が展示されていた。その絵に和美は興味を持ったのだ。

『イーゼンハイムの祭壇画』

パンフレットにはそう示されていた。

しかし、実際に彼女が目を奪われたのは、その作品の一部であるキリストを描いた部分であった。

それは、『キリスト磔刑図』と呼ばれるものである。

「……」

和美は肌寒さを感じた。冷房の涼しさとは別のものである。

そこに描かれたキリストは、あまりにも凄惨であった。

通常イエスを描く場合、必ず描き手の、聖なる存在に対する畏敬と崇拝の気持ちが込められているものである。しかし、この絵には不思議に思えるほどそういった感情が抜け落ちていた。

茨の冠を被せられ、十字架上で力尽きているその姿。

土色で、断末魔の苦しみを留め半ば口を開いているその表情。

既に死後硬直を起こし、半ば腐り始めている壮絶な屍として、凶暴なまでのリアリティをもって描き込まれている。

普通の祭壇画に描かれる、美しいまでの聖性とは程遠い、謎めいた絵であった。

和美は、パンフの説明に目を落とした。この絵はいかなる画家の手によるものだろうか。

……グリューネヴァルト。

ドイツ・ルネッサンスの画家であった。ただし、この名前は通称であって、本名はマティスであったことが今世紀になってようやく判明した。

というのも、サンドラールという文人が「ドイツ建築家・彫刻家・画家列伝」という本を編んだ時に、間違ってグリューネヴァルトの名で収録してしまい、なまじ名著であったためにそのまま名前が定着してしまったというのである。

言い換えれば、それほど当の画家の影が薄く、足跡がつかめない

せいであった。作品は残しても、人物を探るための手がかりが、きれいさっぱり見当たらないのである。

まるで、画家の存在を示すものは描かれた作品だけであると、無言で主張しているかのごとく……。

さらに、和美の手にしたパンフの中では彼を評して、「かすかな聖性の痕跡までものぞき去るという偏執にとりつかれた男」と述べられていた。

たしかに、口から流れ出すよだれや粘った血の状態までも、執拗かつ残忍に描き出すこの画家の目は、ひたすら闇を見つめているかのようであった。

吸い込まれるように、和美はその絵に見入っていた。

その時、

不意に背後から無遠慮な鼻歌が聞こえてきて、和美の意識が現実に引き戻された。

はっとして振り向くと、『よろこびの歌』をハミングしながら通り過ぎていく男がいた。

丸いサングラスで隠してはいるが、その奥にある鋭い眼光と、頬に刻まれた刃物傷を和美は見て取った。

自分を見つめる和美の視線に気づいて、男はふてぶてしい笑みを口元に浮かべ、にやにやしながら去っていった。

その後ろ姿が、まるでたっぷりと食事をした後の猫科の獣のように満足気で、しなやかな歩き方だと和美は思った。

そういえば、小わきに何か箱の様なものを抱えていたみたいだっ

たが、何だか判らなかった。
別に気に留める事もなく再び絵の方へ向き直った途端。
ジリリリリリリリリリッ……！
けたたましい非常ベルの音が館内に響きわたったので、和美は飛び上がって驚いた。
辺りを見回すと、真っ青になった警備員がぞろぞろ出てきて、慌ただしく走っていく。
「ちょっと、ドロボウだってさ」
「何か展示されてたヤツが盗まれたらしいよ」
ざわめく客たちの間で、そんなささやき声が聞こえてくる。
「どうやら宝石箱の一つがやられたようですよ」
「まさか……」
思わず和美は口の中でつぶやいていた。
『箱』。
そう、先ほど悠々と目の前を歩き去っていたあの男こそ、展示物を白昼堂々盗み出したドロボウだったのである。
およそ、盗むという行為の、薄暗いイメージを一切持っていない盗人だった。
☆　☆　☆
「と、いうのがその時の一部始終です。あーもう、何回おまわりさんに同じ事を話したかなあ」

その日以来、弥生にだって何回も繰り返し聞かせた話である。
同じことをしつこく口にしなければならないので、和美もいい加減うんざりしていた。

「でも、その犯人はまだ捕まっていない訳でしょ。警察としては少しでも手がかりになることが欲しいんじゃない？」
「手がかりって……、たくさんあると思うんですけど……」

その点が不思議なのであった。
男は人の見ている前で、堂々とガラスケースを開き（この時警報は鳴らなかった）、何気ない仕種で当たり前のように宝石箱を抱えて、走ることさえせずに歩いてその場から立ち去ったのである。
館内は空いていたとはいえ客がいたのだから、当然、目撃者は一人や二人ではなかった。
展示物を守る警備員も配置されていた。
にも関わらずこのドロボウを取り逃がし、今日に至るまで未だ逮捕できないでいるのであった。

「ミステリー、よね」
にやっ、と笑いながら弥生が言ったので、思わず和美が身を固くする。
こんな目つきをする時の弥生は、ロクなことを考えていないという事が和美にも判っているのだ。

「この話を学校新聞で取り上げて、しかも、それが犯人逮捕のきっかけになったりしたら、うれしいわよねえ……」
そう言いながら、ちらりと横目で和美を見る。

それを見た途端、和美の全身に冷や汗が吹き出てきていた。
夏休み前にこの目つきで睨まれた後、新聞作りの手伝いのため二

日ほど徹夜状態で働かされたという苦い思い出があるのだ。
新聞作っている間、弥生は異常な体力を発揮し、完成するまでぶっつづけで原稿を書き続ける。それこそ一睡もせずに。
そして他人も平気だと思ってるから、同じペースで作業をさせられるからたまらない。
また、この人は何か無茶な事を言い出すのではないだろうか……
ドキドキしながら、弥生と目が合わないように横を向く。

と、
その時だった。

ざあっ、と突風が吹き抜けていき、ふと空気の質が変わった様な気がした。
頭上で鳴いていたセミの声が消える。

何か、
何か不思議な気配によって、その時学園内の空気が支配されていた。
「？」
それは少女たちには、胸の中でもやもやするものとして感じられた。無意識のうちに、芝生の上に身を起こす。

「……静かね……」
頬を指で掻きながら、弥生がぼんやりと周囲を見回す。
そして、目を細めた。
和美も弥生が見つめる方向に顔を向ける。

校門のところ、そこに誰かが立っていた。遠すぎるのと、角度のせいで顔は見えない。だが……、
「まさか……」

弥生は思わずつぶやき、和美は胸が高鳴るのを感じた。
その背格好から、彼女たちが待ち続けていた者のように見えたのだ。
「帰ってきたの！」
次の瞬間、二人は思わず走りだしていた。

校門のところに立っているのは、若い男だった。
少年と言っていい。

肩にナップザックを無造作に引っかけている。
片手をジーンズの尻ポケットに突っ込み、もう片方の手で頭をばりばり掻きながら、斎木学園の全景をゆっくり見渡しているようだった。

ふと、すっと手を伸ばす。
伸ばした手のひらで、自分の目の前の空間の感触でも確かめるようにして、また頭をばりばりと掻く。
「ま、いつ来てもすげえ所だな、ここは」
ふん、と鼻を鳴らしてつぶやいた。

と、
こちらに向かって、ものすごい勢いで駆け寄ってくる二人組の少女に少年は気が付いた。
「あん？　何だ？」
怪訝そうに、少年が片眉を上げる。そうしてる間にも……

「お兄ちゃん！」
小柄な方が、叫びざまミサイルのように飛びついてきた。
「一郎っ！」
少し遅れて、白い袴姿の方も突っ込んで来た。

「どあっ！」
思わぬ強襲に、少年が叫び声をあげる。
その瞬間、少年の首に抱きつこうとした和美の身体が大きく宙に浮いていた。

「え？」
と見るや、ふわりと羽毛が舞い落ちるように優しくしりもちをつかされていた。

「お前ら、何のつもりだよ？」
少年が今の一瞬、飛びかかった和美の身体を、鮮やかな空気投げで後方へ放り捨てたのだが、あまりの早業に、和美自身は何が起こったのか理解できていない。
目をぱちくりさせて、固まってしまった。
それに、今の少年の声は……

「あ、あれ？　ゴメン、人違いだったわ」
想像していた人物ではない事に気づいた弥生が、慌てて謝る。
「和美ちゃん、こいつ一郎じゃないわ……」
はっとして、しりもちをついたまま和美は顔を上げた。
少年を見上げる。

とたんに、彼女の瞳に失望の色が浮かんだ。

「何か知らねえが、誰かとオレはそんなに似てるのかい？」
少年は、そんな和美に手を差し伸べてきた。
手を取って立たす、なんてことはせずに、むんずと襟をわしづかみにして、和美の身体を子猫のように持ち上げた。
やり方がいちいち荒っぽい。

確かに、落ち着いて見れば体格が似ているだけで、少女たちが待っているあの男とはだいぶ顔だちが違っていた。
髪型も違うし、目付きもここまで鋭くない。おまけに右の頬に浮かんでいるのは刃物傷ではないか。

強いて言えば、にっ、と唇の端を吊り上げる笑い方。そのふてぶてしい表情が似ているといえば似ている。
少年は片方の眉を上げた。

「何だよ、誰かと思えば弥生じゃねえか。このオレを見忘れたかのかよ？」
言われて、弥生はようやく気がついた。

「あら、あんた乱丸……御咲乱丸？　ひっさしぶりねえ！」
この少年は弥生の知り合いだったものか、ぱっと彼女の表情が明るくなる。と、表情はそのまま、弥生の木刀が予告もなしに少年の頭上に振り下ろされた。

「でえっ！」
悲鳴をあげつつ、少年はあわてて真剣白刃どりで受け止めた。
「こ、このおてんば……、久しぶりだってのにいきなり何しやがる……」

「ほほほ、これは失礼、ちょっと手がすべったみたい」
「ざけんなこのブス、何か恨みでもあるのかよ」
「あ～ら、あんた、まさか恨まれてないなんて思ってないわよねえ……？」

ほほほ、と弥生が笑う。

へへへ、と乱丸が笑う。

木刀を押す力と、押さえる力とで二人の腕がぶるぶる震えていながら、互いの顔は引きつった笑みを浮かべているという、妙な光景であった。

「あの～」

おずおずと和美が声をかけると、それを合図に二人の身体が、ばっと飛びすさって距離を取った。

どちらもどれだけの力を込めていたものか、今のわずかな押し合いだけで、ぜいぜいと息を切らしている。

「ったく、相変わらずロクな事しねェな。ジャジャ馬め」

「ごあいさつね、あんたこそどーせロクな用事で来たわけじゃないクセに」

「あの～」

道端でケンカをする野良猫のように、鼻の頭に皺をよせてにらみ合う二人に、再び和美が声をかけた。

「二人とも、お知り合いですか？」

「まあね」

と、二人同時に答える。

むっ、とまた互いににらみ合って、ようやく興奮がおさまったのか、弥生が木刀を下ろした。

それでも、少年は油断なく三歩後退し、間を充分取ってからファイティングポーズを解く。

片手で髪の乱れを直しつつ、和美に笑いかけた。

「初めまして、オレの名は御咲乱丸だ、よろしく」
「あ、どうも、相沢和美といいます」
ぺこり、と頭を下げる。

さらに、すっと乱丸が手を伸ばしてきたので、和美も握手に応じようとした時、
「ちょっと待った」
木刀を片手で突き出しながら、弥生がそれを遮った。

「和美ちゃん、あんまりこいつに近づいちゃだめよ」
「何だてめえ、まだケンカ売る気か？」
くわっ、と牙をむく乱丸を、弥生は横目でじろりとにらみ、

「あんたも相変わらずね、そのクセいい加減直しなさいよ」
と言う。その言葉には、半ばあきれているような感じが含まれていた。

「？」
きょとんとした表情で、和美が乱丸の顔を見つめる。

それに気づいて、乱丸はバツが悪そうに指で鼻の頭を掻いた。
「何だ、バレてたのかよ。弥生、腕を上げたな」
「おせじはいいから、さっさと返しなさいよ」
木刀を肩に担ぎ、空いている左手を突き出す。
その手の上に、乱丸は胸ポケットから手帳を取り出し乗せた。

「まったく、手クセの悪さは全然変わらないんだから……」
ぶつぶつ言いながら、弥生は受け取ったその手帳を、そのまま和美に差し出す。
「はい、これ和美ちゃんのでしょ？」

「え……？」
手にして初めて和美は目をむいた。
確かにこれは和美の生徒手帳だ、しかし何でこれが乱丸のポケットに入っているのか？
「多分、さっき放り投げられた時ね、あの一瞬にすりとったんだと思うわ」
あっさりと弥生が言う。
当の乱丸は、口笛を吹きながら横を向いて、聞こえないふりをしている。
「それより恐ろしいのは、すりとった手帳の中身にほとんど目を通しているのよ、こいつは」
とんでもないことを弥生は言った。
「まさか」
和美はまずそう思った。あのわずかな一瞬に手帳をすり取るだけでも神業なのに、一体いつ手帳の中に目を通すヒマがあったというのか？
和美は乱丸の顔を見た。
ニヤニヤしている。
そして和美にそっと近づき、耳元に口を寄せ何事かぼそぼそつぶやいてウインクした。
また、和美の目が驚きに見開かれた。
今、乱丸が和美に告げたのは手帳に書かれた内容だったのだ。
出席番号、血液型、生年月日……

得意そうに、乱丸は和美のびっくりした顔を見ている。
「ま、いきなりつっかけてきた奴の正体を手っとり早く調べるためだったんだがな」
弥生がふん、と鼻を鳴らす。

「ホント、油断もスキもあったもんじゃないわ、判ったでしょ和美ちゃん？　この大ドロボウに近づいたが最後、すれ違いざまに下着だって抜き取られちゃうからね。絶対そばに寄らないこと」
「え？　そんな事……、もしかして弥生さん、やられた事があるんですか？」
思わず声を高くした和美に、弥生は口を閉じてしまった。
心持ち顔が赤くなっている、それが答えだろう。

乱丸に視線をやりながら、我知らず和美はワンピースの胸元を押さえていた。

「こらこらこら弥生ィ、てめえの偏った紹介のせいでオレの人格が疑われてるじゃねえか！」
「なぁーに言ってんのよ、ドロボウをドロボウと言ってどこが悪いっていうの？」
その弥生の言葉に、乱丸は「やれやれ」と肩をすくめて、ため息をつき、
「判ってねえなあ」
とつぶやく。

「何かっこつけてんの、いい？　和美ちゃん、この男はね、もともと斎木学園の生徒だったのよ。でも『学園のルパン三世』とアダ名されるほど手クセが悪くてね、去年ついに退学させられちゃったと

いうろくでなしなのよ」

「はあ……ドロボウさん、ですか」

珍しいものを見るように、和美は乱丸を見つめた。

そして、ぱちくり、とまばたきする。

“……鋭い目つき、頬の刃物傷、不敵な笑み、の、ドロボウ？”

何で今まで気づかなかったのか！

サングラスをかけていたとはいえ、こいつが美術館の宝石箱盗難の犯人ではないか！

ぽかん、と口を開く。確かに弥生の言うとおり、この男はドロボウらしい。しかし、和美には乱丸が悪い男には思えなかった。

「『学園怪盗』と本人は呼ばれたかったんだけどな」

悪びれず、乱丸は片目をつぶってみせる。

「オレの盗みは『芸術』だぜ。　絶対盗めそうもないもの、金額や一般大衆の価値観では計れない貴重なもの、何よりこの……」

どん、と力強く、乱丸は自分の胸を叩いた。

「このオレの魂が認めたものしかターゲットにしないってのがオレのポリシーな訳よ、判るかい？　『ドロボウ』なんて下世話な表現でオレの哲学を形容しないでもらいてェな」

力説する乱丸を、弥生は小馬鹿にするようなジト目でにらんでいた。

「何か言いたげだな、弥生？」

それに気づいた乱丸が、横目でにらみ返す。

「べえつにいい」
乱丸から視線を外し、斜め上方の空間をぼんやり見ながら、とぼけた口調で弥生は答えた。
「ただね、『女生徒百人切り』とか言って、休み時間に廊下を歩いてた女のコのブラを見境なしにすりまくった例の事件も、あんたの芸術やら哲学の一部なんだなと思って……ちょっと、どこ行くのよ？」
そっと、忍び足でその場から離れようとする乱丸の襟を、弥生ががっちり捕まえる。
「お前な、つまらんことをいつまでも覚えてるとハゲるぞ」
その声は、先ほどの力説を行ったものと比べると、いくぶん小さくなっていた。

ぷっ。

思わず和美は吹き出していた。
こらえきれずに、笑い声がもれてしまう。

決して、人の物を盗む事を容認する訳ではないが、この御咲乱丸という男、悪いヤツではなさそうだ。たしかに手クセは悪いのだろうが、『人間』は悪くなさそうである。でなければ、弥生がこんなに気楽な接し方をするはずがない。

それに、先ほど自分の盗みを『芸術』と言い切った彼の目。その瞳に一瞬きらめいた光を、和美は印象深く覚えていた。

無邪気に、壮大なスケールの夢を見つめる瞳。

例えば小さな男の子が、青いでっかい空を見上げる時の両目にたたえた光。それに近いものをこの少年から感じ取ったのだった。
何か大きな夢を持っていることを感じさせる男だが、弥生が言うには『下着ドロボウ』にすぎないという。
そのギャップが妙に面白くて、和美は笑うのをやめる事ができなかった。

「ちょっと和美ちゃん、大丈夫？」
「ご、ごめんなさい。だって、おかしくて……」
心配になって覗き込む弥生に、うっすら浮かんだ涙を拭いながら和美が答える。

「見なさい、あんたのせいで和美ちゃんがおかしくなっちゃったじゃない。そもそも、学校やめたあんたが、何で今になってノコノコ現れたのよ？」
その言葉に、乱丸は何かを思い出したように手のひらに拳を打ちつけた。

「そうだ、オレはてめえと漫才するために来たわけじゃねえんだった」
つぶやいて、ふっと校舎を見上げる。
「今日は、蘭堂京平に会うために来たんだよ」
ばりばりと、頭を掻く。

ぴく、と弥生の片方の眉がつり上がった。

聞き慣れない名前を出されて、和美が弥生の顔を見る。
「弥生さん、京平さん……って？」
「この学園の生徒会長よ、……乱丸、あんた一体何を……」
弥生の問い掛けには答えず、すでに乱丸は歩き出していた。

「また、後でな」
振り向きもせず手だけ振ってみせ、乱丸は校舎の中に入っていった。
その背を見送った弥生の顔に、かすかな緊張が見られる。
和美もそれを感じ取っていた。

「ねえ弥生さん、その蘭堂さんでしたっけ？　私たちの生徒会長って、どんな人なんですか？」
和美はこの学園に転入してまだ日が浅い、生徒会長のフルネームも、今初めて耳にしたのだ。

一体、この奇人変人ぞろいの斎木学園における生徒会長とはどんな人物なのか？　少なからず興味をそそる人物だ。

弥生の唇が動く。
「生徒会長……蘭堂京平はね、『魔法を使う』と言われているわ…」
そう言った弥生の頬を、ぬるい汗が一筋、流れ落ちていった。

ＡＣＴ・２『生徒会室』

ＡＣＴ・２

古い、大きな柱時計の音が、静かな室内に響いている。

――――生徒会室。

備えられている応接用のソファに沈むように座った乱丸が、高々と足を組み、ゆっくりと室内を見回している。

床の絨毯も、乱丸が今座っているソファセットも、壁に作り付けの本棚も、生徒会長が使用する巨大で重厚な会長机も、この学園創立とともに歴史を経てきたものらしく、どれも古ぼけている。

そのせいだろうか、もしくは暗めの照明のせいだろうか。妙に寒寒しさを感じる部屋であった。

冷房を入れてもいないのに、外の蒸し暑さがこの中まで侵入してこないのだった。

部屋の中をひととおり眺めおわった乱丸は、視線をばかでかい会長机に座る男に戻す。

生徒会長、蘭堂京平が机に両肘をついて、そこに座っていた。

冷たさすら感じさせる美しい顔。その紅い唇に柔らかな微笑を浮かべて、乱丸の顔を見つめている。

視線が合った。

「生徒会長ってのはいい身分だなあ京平、こんな部屋を一つあてがってもらえてよ」

また、ぐるりと首を巡らせて、部屋を一瞥する。

「ええ、お客さんも多いものでね、応対するのにとても重宝してますよ」
低めの、落ちついた声で京平が答える。
「そりゃ、結構」
ぶっきらぼうに言った乱丸の目が、壁にかけられた一枚の絵に向けられた。

それは奇妙な油絵であった。
荒々しいタッチで『扉』が描かれており、他には何も描かれていない。

シンプルと言うにしても単純すぎる。わざわざ豪華な額縁に入れて飾る程の作品でもないと思うのだが、そこはこの部屋の主の趣味なのだろう。

「お前のことだ、さぞかし変わった客が多いだろうよ」
「ええ、君もその中の一人ですけどね」
クスッと京平が鼻を鳴らしたので、乱丸も苦笑する。

「相変わらず、だな、お前もこの学校も、……敷地内に一歩入っただけで全身がびりびりしたぜ。これだけ『あっち側』に近い場所、世界中探し回ったってそうそうあるもんじゃねえよな、ホント」
「この学園の創立者も、それを知ってわざわざこの場所を選定したのですよ。ですから、この学園内には『あちら側』の空気が少しずつ流れています。面白い生徒が集まってきたり、面白い事が次々に起こるのもそのためでしょう」
口元に微笑を絶やさず、京平はつぶやく。
「そして、今また君によって、新しい事件がこの学園に持ち込まれ

てきたという訳ですよね」
それを聞いて、情け無さそうに乱丸はばりばりと頭を掻いた。
「ちぇ、やっぱりお見通しかよ、たまらねえなあ」
「当たり前ですよ、よほどの厄介事でもないかぎり、君がボクを頼ってくることなどないじゃありませんか」
愉快そうに、京平はくすくす笑う。
「相変わらず、突拍子もないものを盗んでいるんですか？」
「人聞きの悪い。が、確かに『盗み』こそ我が人生、さ」
乱丸は傍らのザックの中から古めかしい宝石箱を取り出して、憮然とした表情で京平に見せた。
ほお、と京平がため息をもらした。
「それはまた珍しい物を手に入れましたね」
「だろ？　お前に鑑定してもらおうと思って持ってきたんだが、答えを聞くまでもねえよな」
「ええ」と、京平は頷いた。「それは『マリーの箱』ですよ」
「やっぱホンモノか」
ふん、と鼻を鳴らして、手にしたアンティークをじろじろ見つめる。
「確か十二年ほど前に、イギリスでオークションにかけられた後、二、三人の好事家の元を渡り歩いて行方不明になっていたはずですが、どこで見つけたのですか？」
「持ち主を次々に破滅させながら、な。なあに、そういった呪われた経緯を知らねえ無知なヤツの所にあったからよ、そいつの為にもオレが引き取って、封印してやろうと思ってな」

「確かに、その箱には最初の持ち主であるマリーの強い念が込められてますからね。これ以上不幸な人を増やさない為にも、そろそろ封印した方がいいかもしれないですね」
京平もそう言ったので、乱丸はうむうむと頷いた。

「では、ボクが責任を持って呪いを解いて、不幸なマリーの魂を開放してあげましょう」
すっ、と立ち上がり、京平が乱丸の方へ歩きだそうとした時、
「いやいやいや、お前には鑑定だけしてもらえばいいんだよ。封印までしてもらっちゃ悪ィからよ」
急に声を高くして、乱丸が遮った。そのまま、箱をザックにしまおうとしている。

京平の片眉が上がり、声のトーンがはっきりと低くなった。
「乱丸君、何を慌てているのです？」
「あん？　別に慌ててなんかいねえよ」
そそくさと、乱丸は箱をザックに入れてしまうと、無言で自分を睨んでいる京平に向き直る。

「判った、白状する」
こほん、とわざとらしい咳払いをして、乱丸は話し始めた。
「実は、今日オレがここに来た本当の目的はな、『恋の悩み』についてお前に相談にのってもらおうとしてなんだよ」

「ほう、『恋』ですか」
興味をそそられたらしく、京平の目がきらりと光る。
「くわしく聞こうじゃありませんか」
再び彼は席に座り、両肘を机について乱丸をじっと見つめた。

「ああ、一目惚れってヤツだな……」

そう言って、照れくさそうに乱丸は頭を掻いた。

「一ヵ月ほど前の事だ、『そいつ』を見かけたのは……。見た瞬間にこう胸が高鳴ったんだよな、で、さっそく声をかけようとしたんだが、その途端、オレの話を聞こうともせずに、そいつはどっかへ消えちまったのさ。後を追ったが見失っちまってよ、それきりだ。どこの誰かもまるで判らねえ」

「一ヶ月も探して名前すら判らない？　乱丸君ともあろう人が？」

乱丸はうなずいた。

はっきり言って、この『御咲乱丸』はこと盗みに関しては天才の部類に入る。およそ彼が本気で狙ったもので、盗めなかった物は過去において一つもないのだ。『学園怪盗』と自称し、盗みを芸術と言い切る言葉は、その実力に裏付けされたものである。

また、芸術的な盗みを可能にするために必要な、多くの特技も彼は身につけている。

例えば、情報を集める能力である。

偶然道ですれ違った、見知らぬ人間の事であっても、たちどころに名前、住所に始まり生まれた病院に至るまで調べ尽くす事が彼には可能なのであった。

このようなすさまじい能力も、もっと世の中のためになるように生かせばよいと思うのだが、彼の興味の全ては『盗み』に集約されていく。たとえ数えきれない特技を有していても、それは怪盗としてしか生かされないのだ。

盗みこそ、彼が『御咲乱丸』であるための存在理由であると言っていいだろう。

恐らく口にはしないが、その女の子に声をかけた時にすら彼が思

っていたことは、彼女の心を『盗む』ことであったに違いない。
そういう男なのだ。
「この一ヵ月、オレは全力でそいつの事を調べまくった。しかし、どこにもそんなヤツは存在しないのさ。住所やら戸籍やらも存在しないし……痕跡すら見つけることができなかった。そこで思い当たった訳よ、もしかすると……」
うかがうように、乱丸は京平の顔を見る。
京平は意味ありげに、にこにこしていた。
「やはり、そうなのか？」
ぽつり、と乱丸がたずねると、京平は頷いた。
「ええ、その娘は普通の人間ではありませんね。君の予想通り『あちら側』の住人ですよ」
それを聞いて、乱丸は「かーあっ」と叫んで片手で頭をくしゃくしゃにした。
「そうだろうなあ！　あれだけの娘はこの世のもんじゃねえよ」
「くすっ……恋する人は皆、相手の事をそう評価しますけどね」
そう言って笑う京平に、乱丸は牙を剥いて食ってかかる。
「そんなんじゃねえよ、あいつは！」
「その反応が、全くパターン通りという気がしますけどね」
ごほん、と咳払いして、乱丸は京平から目をそらした。
「そ、それはともかく、じゃお前なら判るんだろ？　そいつの居場所を教えてくれねえか？」
「おやおや、それがたとえ天国や地獄でも、今すぐ飛んでいってし

まいそうな勢いですね。ですが……」
興奮を抑えられない子供を見守るような優しい目つきで、京平はしばらく乱丸の顔を見て、そして首を横に振った。

「残念ながら、その娘の居場所はボクにも視えません」
「何だとお？　天下に比類なき大魔道士のお前がか？」
乱丸は目を丸く見開いた。
「視るのは、ボクの専門外なもんで」
すまなそうに言う京平に、乱丸はがっくり肩を落とした。

「そんな……、『あっち側』の住人の事で頼れるのは、親友のお前だけだったのによ、トホホ……」
しょんぼりと俯いてしまった乱丸を、穏やかな表情で見ていた京平だったが、この時、不意にその雰囲気を変化させていった。
「乱丸君、君はボクにウソをついていますね？」

穏やかな口調であったが、氷の冷たさがその言葉の中に含まれている。
俯いている乱丸は、京平と目を合わせないように、そのままのポーズで身を固くした。
「ぎく。……何のことだ？　オレはお前の事を本当に親友だと思っているぞ」
そんな乱丸の言葉には答えず、京平は続けた。

「君、その娘がいなくなった本当の理由を、知っているでしょう」
「はて……」
とぼける乱丸の顔に汗が流れる。
「乱丸君、ボクの目は節穴ではありませんよ」
口調も表情もそのままだが、京平の身の回りにまとっている雰囲気が、じわりと変化していく。

それに伴って、部屋の温度までひんやりしてきたようだ。
「ボクにウソをついて、ボクの『力』を利用しようとするのは止めなさい」
「……」
乱丸は黙ってしまった。どこか窓の外で、カラスの鳴き声が聞こえる。
生徒会室が、突然魔界に紛れ込んでしまったようであった。
――――蘭堂京平。斎木学園の生徒会長であり、稀代の魔法使いであると言われている。
見たものはいないが、無限の力を持つ男などと尾鰭のついたウワサが伝えられているだけで、彼を本気で怒らせたらどうなるのか知るものはいない。ただ、誰であろうと彼の前に立つとき、少なからず恐怖を感じることは間違いない。
自分を見つめる黒い瞳そのままの、暗い闇の世界へ連れ去られてしまいそうな気分になるのだ。普通の人間なら、ここでもう彼に敵対しようなどとは考えなくなる。
奇人揃いのこの学園の頂点に立つ男は、やはり桁違いの魔人なのである。
「……」
部屋が重苦しい空気で満たされたその時、不意にドアがノックされた。
ぎょっ、として乱丸が顔を上げた。戸惑っているように眉をひそめる。
コン、コン。
また、ノックの音が響いた。

「おい、京平？」
「実は、君がここへ来る前に、もう一人お客さんが来てましてね。そちらで待っていていただいたのですよ」
「だって、お前……」
明らかに、乱丸は困惑していた。
なぜなら、ノックの音は壁に掛けられた『扉の絵』から響いてきたからである。
「もう、入ってよろしいですか？」
声まで聞こえてきた。
「ええ、お待たせしました。あなたが探していた男もようやく来ましたよ」
平然と、京平が答える。
一体、彼は何と話をしているのだろうか？　この扉は油絵であって、その向こうには廊下も、隠し部屋も何も無いはずなのに。
そう考えているうちに、絵の扉が開いて、黒いスーツケースを持った男が姿を現した。そのあり得ない空間から来たのは、黒縁のメガネにきれいにクシの入った髪、という品のいい紳士であった。
「初めまして」
口をぽかんと開けている乱丸に対して、丁寧に頭を下げる。
「私、夏見と申します」
そう言って、一枚の名刺を乱丸に差し出した。

それを一目見て、乱丸は京平の顔を見た。
「まさか……」
京平は頷いた。
「そう、この人は『あちら側』の住人であり、君の探している娘にも深い関わりを持つ方ですよ」
言われて、改めて乱丸はあり得ない世界からの訪問者に視線を戻した。
夏見と名乗った紳士は、軽く咳払いをした。そして、真っ直ぐ人指し指を乱丸に突きつける。
「ずばり、端的に言いましょう。御咲乱丸さん、あなたには責任を取ってもらわねばなりません。あなたがあの時『彼女』によけいなちょっかいを出したために、大変な事になっているのですよ！」
ぴしり、と夏見は言い放った。
ちらり、と乱丸は視線を外して、指先につまんだ名刺に目を落とす。
一枚の紙片に書かれた肩書、『シーズン・マネージャー』。
その活字に見入ったまま、乱丸はしばらく黙り込んでしまった。
それを見て、京平が助け船を出す。
「乱丸君、君は確かに『あちら側』の存在を知り、覗いてきた事もある現代では数少ない人間の一人です。ですが、『あちら側』の常識やルールについてはまるで無知だったようですね。君は知らず知らずのうちに『こちら側』にまで重大な影響をもたらす『あちら側』の現象を狂わせてしまったのですよ。いや……それとも、知っていてあえて……ですか？」

京平の言葉を聞くうちに、隠していた悪さが段々明るみになっていく時の悪ガキのように、乱丸は縮こまっていった。
頭上からは、背筋を伸ばして直立不動の夏目が見下ろしている。
ちらっ、とその顔を見上げて、乱丸はため息をついた。

「チックショウ、全部バレてるのかよ。……はっきり言って今回の『盗み』は完全に失敗だったからなあ、誰にも知られずにこっそり後始末をしようと思ってたのによ」
「観念しなさい」

「それにしても、どうしてオレの仕業だってことが判ったんだ？盗みをしくじった事よりそっちの方が不思議だぜ」
ぶつぶつ言いながら、乱丸ははたと気づいた。じろり、と京平をにらみつける。

「てめえ、チクッたな」
ふふ、と微笑んで京平は目を細めた。
「壁に耳あり障子に目あり……悪い事というのは誰かが見てるものですよ」

「ぬかせ、『あちら側』と『こちら側』の境目で起こった事を覗き見るなんて芸当、てめえの魔眼ぐらいにしかできねえよ」

「それを言うなら、その場所にたどり着き『あちら側』の住人にちょっかいをかける事のできるドロボウは、この世に君ぐらいしかいませんよ」
言い返されて、くわっ、と牙を剥いた乱丸の頭上で、夏見が咳払いをする。

「オホン、失礼、今は私との話を優先していただけませんか？」
情けない顔をして、乱丸は軽く肩をすくめた。

「悪い悪い、で、あんたオレにどう責任を取れってんだ？　金でも払えってのかい？」
夏見は人指し指をこめかみに当てて、首を振った。
「そんな紙切れなど何の意味も持ちません。あなたのせいで『彼女』が行方不明になったのですから、探し出し、本来いるべき場所へ連れ戻してあげるのが、この場合の償いの仕方でしょうね」

うんうん、と京平も頷いている。
ばりばりと、乱丸は荒っぽく頭を掻いた。
「あのなあ、あんたずっと『扉』の向こうにいたんだろ？　何でおれが今日この蘭堂京平の所へ来たのか聞いてなかったのか？　この一ヵ月まるで手がかりが掴めなかったから、最後の手段としてこの魔法使いを頼って来たんじゃねえか。その京平にも見つける事ができねえってんなら、もうオレには打つ手がねえんだよ」
悪さを叱られているうちに、開き直って不貞腐れた子供のように乱丸は口をとがらせた。

「それでも探し出してもらわなければなりません。もう時間が無いのです、あの娘があの娘でいられる時間が……」
乱丸の責任を追求しながら、夏見の語尾は震えていた。

「そりゃ、どういう意味だ？　まさか『彼女』は不治の病にかかっていて、残りわずかな命であるなんて言うんじゃねえだろうな」
茶化すような口調で乱丸が言う。それに対して、
「当たらずとも遠からず、といったところですね」
真顔で、夏見は答えた。

ついで、京平が口を開く。
「乱丸君、生物には全て寿命というものがあるでしょう。人間であれば大体七十から八十年ぐらい、亀なんかは百年以上生きるものもいるようですね。逆に、虫などは大抵春に生まれ、冬になる頃には死んでしまう……。ただ、虫の中にはその一生のうち、いくつかの自分の姿を持つことになるものがいます」

「要するに卵、幼虫、サナギ、成虫ってわけだろ、一体何が言いてえんだよ？」
「そのうち、イモ虫を例に挙げれば、イモ虫はイモ虫のまま死んでしまうのは本望ではない、ということですよ」

「ああ……」
曖昧な返事を、乱丸は口の中でした。京平は急に何を言い出したのか、と思っているのだ。
「それは、つまり……」
夏見の顔を見る。

「『彼女』は、これから何かに変わるんだが、それは本来いるべき場所でないとできない事で、しかも時間が限られていると？　それを逃すと彼女はもう……」
「そうです、そのまま消滅してしまうのです」
ぽつりと、夏見は言った。

「せっかく生を受けたというのに、寿命を全うする前に自分が存在していた証を何にも残せない事の切なさ、無念さが理解してもらえますか？」
口調は静かだが、謎の紳士の瞳は、真っ直ぐ乱丸を射抜いた。
すると、それを受けて乱丸の眼の奥にも、強い光が宿った。

「ああ」と、力強く頷く。「判るぜ」

ぶつ切りのような言い方だったが、感情がこもっていた。まるで腹の底から、熱い塊を吐き出したかのようであった。

二人の間に共通するものを、その瞬間、お互いに感じ取ったものか、乱丸はにっ、と笑みを浮かべた。

「自分が自分であるために、他の誰にも出来ねえ事をやらなきゃ、生まれてきた価値がないってもんだぜ」

――――レゾンデートル。

恐らく、この御咲乱丸にとっては、『盗む』こと、しかも『芸術的に盗む』ことが、彼を彼たらしめる証なのだろう。

「ちなみに、あんたはどうだい？　自分の存在の証をしっかり示しながら生きてるのかい？」

今度は、乱丸の瞳が夏見を貫く番であった。

すると、

「私は『シーズン・マネージャー』です。この仕事に誇りを持って生きております」

堂々と、目をそらさずに即答した。

ひゅう、と乱丸口笛を吹く。

「いいねえ、命懸けれる仕事を持ってる男、シビレるぜ」

……けどな、と乱丸は京平に視線を送った。

「『シーズン・マネージャー』って要するにどんな仕事で、このお

っさんとあの娘の関係は、何なんだ？」
京平が意外そうに目を見開いた。
「おやおや、そんな事も知らなかったんですか？　それでよく『こちら側』と『あちら側』の壁を乗り越えて、あの娘に接触する事ができましたね……それじゃ、もしかして君、あの娘が何なのかすら知らないんじゃありませんか？」
「おーよ、知らねえ」
あっさり乱丸は答えたので、がくっ、と夏見の膝の力が抜けた。
「そんな顔するなよ、オレがあの場所にいたのは偶然だったのさ、『あちら側』の知り合いに会いに行く途中で、たまたま見かけたのがあいつだった。キレイだったなあ……そう思ったからつい、ナンパしようと思って……よ。ありゃあ、精霊か何かだったのか？」
「そうです、『彼女』は、季節を象徴する精霊だそうですよ」
さすがに、京平の声にもあきれている雰囲気がこもっている。
「風は吹き、雨は降り、夏は暑く、空は青く、花は咲く……自然というものは、本当に美しく素晴らしいものです。ですが、それを構成しているものは、我々の目に見えるものだけではなく『あちら側』のものも関わっているという事を知らねばなりません」
――――『シーズン・マネージャー』。
名刺に記されたその肩書は、どのような職業か。
答えは読んで字の如し、である。
例えば、日本には『四季』というものがある。
毎年、春夏秋冬の四つの季節が順にサイクルしていくのだが、その時、一度として同じ季節は訪れない。

つまり、去年と、今年と、来年とでは、同じ季節ではあっても、全く別の『季節』が来るのだ。
春はその年の春、夏はその年の夏、秋も、冬も、その年のワンシーズンだけで消えてしまい、ある年の季節が再び訪れる事はない。
次の年、いや次の季節にバトンタッチする時までの、短い寿命な訳である。

それは、我々人間から見ればとてもわずかで、あまりにも儚いように見える。

だが限られた時間の中で、しっかりと、確実にその存在をアピールし、存在していた証を残していくのだ。

例えば、人々の中に、思い出としていつまでも存在し続ける。
「あの春の日の陽射し……」「あの年の、あの夏はこうだった」
「あの秋の夕焼け、二人で見たっけ」「あの冬は大雪でねえ……」

人によってその姿は違えども、目に見えない『季節』が思い出になることで、形を得たり、永遠の命を得る。
いつまでも色褪せることのない、きらめきを手に入れるのだ。

そうなるべく、それぞれの季節を見守る存在がある。

季節が、この世に存在しているわずかな間に、どのように振る舞ってもらうかをプロデュースする存在が、彼ら『シーズン・マネージャー』なのである。

「『彼女』たちは、長い長い間、出番を待っているのです」

夏見は『季節』たちを『彼女』と呼ぶ。

それは『こちら側』の世界で言えば、芸能界でデビューを目指しメジャーになる夢を持つアイドルと、それをバックアップする芸能マネージャーの関係そのままであった。
“『季節』が完全にその存在を示すこと”
それが成し遂げられるのを見守る事が、『シーズン・マネージャー』の存在理由である。

「一つの季節に対して、その季節候補というのはそれこそ無数に存在しています。『春』候補、『夏』候補、『秋』候補、『冬』候補……
『こちら側』のアイドルと似ていますが、根本的に違う点が一つあります。それは、アイドルは職業の一つであり、他の職も選べる環境の中で目指すものですが、季節候補は違います。彼女らは、生まれた時すでに季節になるしかない事を決定されているのです。
ちょうど、セミの幼虫はセミにしかなれないのと同じように……。その上、望めばすぐ季節としてデビューできるかといえば、そうではありません。選ばれるのは無数の候補の中から一人だけ、一年に一人ずつ、世の中に出ることが許されるだけです。それまで彼女たちは何もできません。無数の季節候補たちは、それぞれの控室とでもいった所で、呼ばれるのをただ待つだけなのです。自分が呼ばれるのは次かもしれないし、その次かもしれない、もしくは数万年先の事かもしれない……。それでも待ちます、生まれてきて、自分にできることはたった一つしかないことを彼女たちは知っているからです。『季節』という一定の時間、もしくは空間を生み出すこと。自分の命と引換えに、その使命を成し遂げる事が、彼女らの生まれてきた意味なのです。それだけのことに、凝縮された想いを注ぎ、全身全霊を込めるからこそ、世に現れた『季節』はどれも輝いているのですよ」

真剣さを込めて、熱く夏見は語った。切実な気持ちがひしひしと

伝わってくるのが判る。
それを聞きながら、京平は立ち上がり、目を細めて窓の外を眺めた。

「全く、君はいつも無茶をしますね、よりによって『夏』という季節を盗もうとするなんて……」
乱丸、無言で頭をばりばり掻いた。
夏見が言葉を続ける。

「全く、とんでもない事をしてくれたものです。彼女たちはとてもナイーブなんですよ。あの時、突然あなたにさらわれそうになり、ずいぶんショックを受けたのでしょう。本来行くべき場所から逃げ出し、一体自分が何者なのかすら忘れて、あやふやな存在となってさまよっているはずです」

「そうか、だから京平にも視えねえのか」
ぽん、と乱丸が手を打ち鳴らす。
それを夏見がじろりとにらみつけたので、乱丸は肩をすくめた。
夏見は、落ちてきたメガネをずり上げながら言った。

「とにかく時間がありません。責任を取ってあなたが彼女を連れ戻して下さい。……ほんのわずかな時間でもよいのです。彼女が『夏』を生み出す事ができれば、彼女の存在が意味あるものになるのですから……。長い長い間待ち続けて得た、二度と手に入らない貴重なチャンスをムダにさせないであげて下さい」

目元にうっすらと涙をためて、彼は乱丸に訴えた。

ＡＣＴ・３『再び、中庭』

ＡＣＴ・３

「まいったなあ」
絵の『扉』を通って、夏見が部屋から出ていったのを確認して、ずるずると乱丸はソファに沈み込んでいった。
窓際に立った京平が、笑いながらその様子を見ている。

「笑い事じゃねえよ京平、助けてくれよ」
青色のネコ型ロボットにおねだりをするメガネの少年のように、乱丸は情けない声を出す。しかし、
「だめです、自分の不始末は自分で処理して下さい」
表情は優しいものの、京平の返事はきっぱりしていた。

「冷てえなあ」
ばりばりと、乱丸、頭を掻く。
「いっその事、外国へでもしばらく逃げちまおうかな」
妙案が浮かんだとでも言いたげに、乱丸はニヤリと笑ったが京平はため息をついた。

「もしかして、こんな事態になる事を予想して、逃亡資金調達のために『マリーの箱』を盗んできましたね？」
「バレたか？　こんな呪いのかかった不気味な代物でも欲しがる物好きは結構いるもんでなあ」
わっはっは、と笑う乱丸に、京平の視線は冷たかった。

「余計なこと言ってる間に、彼女を探し出す努力をした方がいいと思いますよ。もし、時間内に彼女を本来の場所に連れ戻す事に失敗

した場合、夏見さんが君に与えるペナルティがどんなものか知っていますか？」
「……ああ」
と、不貞腐れた顔で乱丸は頷いた。

「『あちら側』での刑罰の噂は聞いてるぜ、つまり『影』にされちまうってんだろ？」
そう言って、ばりばり頭を掻く。
京平は頷いた。

「その通りです。処罰されることが決定したら、もうどこにも隠れる場所はありませんよ。例え、日本から遠く離れたとしてもムダです。『あちら側』の住人が本気になればどれほどの力を持つか……それぐらいは君でも知っているでしょう？」
「まーな」
乱丸は気のない返事をするだけだ。

――――影にされてしまう。

つまりそれは、二度と陽の光を見ることのない場所へ、引きずり込まれてしまう事である。
『こちら側』と『あちら側』のどちらにも属さない曖昧な空間。『混沌』とでもいった空間に、幽閉されることになるのだ。
そうなったら、その人間の持つ個性、パーソナリティーといったものは全て奪われてしまう。
すると、どうなるか？

自分を自分たらしめているものが消え、自己と他者の境界が曖昧になっていく。当然肉体は影の中に溶け去り、自分が自分でなくなり、『全て』の一部となり、存在というものが意味をなさなくなっ

てしまう。
しかし、恐ろしいことに、そんな状態になってしまって尚、意識だけは消えないのだ。
影という全体の一部に成り果てても、自我だけは残される。
『永遠の牢獄』という名で呼ばれる刑罰であった。
そこに囚われた者は、もはや何者でも無くなってしまったのに、残った自我だけで、『自分は何者なのか』という問いを繰り返し続ける事になるのだという。それこそ、永遠に。

「冗談じゃねえ」
ぶるっ、と乱丸は身震いした。

「そうなりたくなかったら、一刻も早く彼女を見つけ出す事です。大丈夫、『神威の乱丸』の凄さを良く知った上で、ボクも話しているのですから。自信を持ちなさい、君が本気になればこの世で見つけ出し、手に入れられない物などありはしませんよ」
にっこり笑って、京平は乱丸を見つめた。
が、
褒めてはいるけれど、今のセリフを要約すると、『自分でやれ』という訳である。
どうしても、この魔法使いは、乱丸を手助けするつもりはないらしい。

「やれやれ、友達がいのねえヤツだな」
そんな気配を感じ取ったのか、ため息をつきながら乱丸はソファから立ち上がった。
「やる気になりましたか？」
「自信があろーがなかろーが、やるしかねえじゃねえか。オレはま

だまだ自分の人生に未練たっぷりなんだよ。山ほどやりてえ事があるのに、この若さでイッちまいたくねえからな」
鼻の頭にしわを寄せて、乱丸は牙を剥いて見せる。

「ボクも影ながら応援してますよ」
静かに微笑む京平に、
「そりゃまた、頼もしいこって」
と、言い捨てて、乱丸は背を向けた。
その手がドアノブにかけられた時、

「あ、乱丸君、ちょっと待ちなさい」
「？」
そう言って、京平は片手に持った品を乱丸に見せた。

――――『マリーの箱』。

いつの間に、乱丸のザックの中から京平の手の中へ移動していたのだろうか、学園怪盗を目の前にしての鮮やかなマジックだった。

「これは、やはりボクが預かります。これ以上不幸な人が増えるのを見過ごす訳にはいきませんからね」
空っぽのザックを片手で振り回して、「へえへえ」と乱丸は承知した。

「おや、ずいぶん素直ですね。今回盗みを失敗した事といい、どこか調子でも悪いのですか？」
眉をひそめた京平を、じろりと、乱丸はにらんだ。

「言い訳するつもりはねえけどよ、彼女に手を出そうとした時、邪魔が入ったんだよ」

「邪魔？」
「つまり、オレ以外の何者かが、あの場にいたってこった」
「……なぜ、それを夏見さんに言わなかったのです？　あの方は、全て君がやった事だと思い込んでいますよ」
ふん、と乱丸は鼻を鳴らした。

「別に関係ねえからさ、どっちみち、失敗のまま終わらせるつもりはねえし、あのおっさんに言われるまでもなく彼女は手に入れるつもりだったんだからな」
それは乱丸の、ドロボウとしてのプライドだろうか。一度失敗しても、ライバルがいたとしても、己の信念に従い、欲する物を手に入れる……。
彼の目には、強い光が輝いていた。

「それじゃーな」
短く別れを告げると、背中越しに手を振って、今度こそ乱丸は生徒会室から出ていった。
彼の背中が、閉じられたドアの向こうに消えたとき、美しい顔をした魔法使いは、微笑を浮かべて窓の外に顔を向け、どんよりと曇った空を無言で見上げた。

☆　☆　☆

「あ、出てきましたよ」
玄関から出てくる乱丸の姿に、和美が気づいた。
「はいはい、今は練習中よ、集中して！　よそ見なんかしない！」
ぴしゃり、と言い放った弥生の声に、和美がびくっ、と身をすくませる。
乱丸が京平と会っていた間に、何がどうしたものか、和美が弥生のコーチにより、木刀の素振りを行っているようである。

しかも、乱丸が出てくるまでにどれだけシゴかれたものか、半べそ状態になりながら、和美は木刀を振っている。
それを見た乱丸が、片眉を上げて弥生をにらむ。

「このくそ暑いのにシゴきかよ？　後輩いじめとは暗い奴だなあ」
「失礼ね、“ヒマだから剣道教えて下さい”って頼まれてやってるのよ」
きーっ！　と弥生が目をつり上げた。素振りをしている和美が、苦笑して頷く。

「ホントか？　弥生にチャンバラを教わろうなんて自殺行為だぜ、物好きだなあ」
心底あきれた、というような口調で乱丸がつぶやくので、より一層弥生の目がつり上がっていく。
「うっさいわねえ、あんたもう帰るんでしょ？　あ、和美ちゃんはそのまま素振り続けてていいわよ」
「ひ～ん」
小さく悲鳴をあげながら、和美は木刀を振りつづけるので、乱丸は憐れむような目つきでそれを見ていた。

「どーせ、またあやしげな物を狙って、会長に説教でもされたんでしょう」
「うるせえ」
ぎょっとして、乱丸はへらず口でやり返す事ができなかった。
図星をついた手応えを感じた弥生は、ここぞとばかりに追い打ちをかける。

「いい加減、そんな胡散臭い稼業は足を洗って、カタギになったらどう？」
「ばか言っちゃいけねえ」

その言葉を聞いて、乱丸の目がきらめいた。

「まだまだやめらんねーぜ、こんな面白えコト、スリル、サスペンス、ロマン……人生に必要なモノを全て兼ね備えてる最高の職業だぜ？　判んねーかなあ」

肩をすくめて、「やれやれ」というジェスチャーをしてみせる。いかにも馬鹿にしている態度がありありだったので、弥生のほっぺたがぷうっ、とふくれた。

「あったまくるわね、いつもいつも人をバカにして！」

「へえ？　頭にきただ？　だからどうしたってんだよ」

ニヤニヤしながら、乱丸が挑発する。

それを聞いて、弥生がキレた。

「このぉ、いちいちムカつくわねえ、こーなったら勝負よ！　その曲がった根性を叩き直してあげるわ！」

そう叫ぶや、素振りを続ける和美から木刀をひったくり、弥生は上段に構えた。

この少女の特徴だが、木刀を構えるとより一層迫力が増し、その全身から、むっと殺気がほとばしる。弥生の身から立ち昇るオーラが、陽炎のようにゆらめくのが、目に見えるようだった。

「おーおー、凄えすげえ、やっぱ腕を上げたな、てめえ」

口調はおどけているが、乱丸の目つきもまた、変化していった。じわり、と乱丸の内部に、気が満ちていくのが感じられる。

臨戦態勢に入ったのだ。

「あの……」

和美は声をかけようとして、言葉を飲み込んだ。

にらみ合う二人の構えは実に対照的なのを、彼女は見て取った。
木刀を頭上に振りかざし、ずっしりと大きな構えを取り、周囲に闘気を放出している弥生。
それに対し、自然な姿で立っているだけの乱丸。
しかし、ひっそりとその内側にエネルギーを充填し、爆発させる瞬間に備えているのだった。

まさしくこれは、陽の弥生と陰の乱丸のせめぎ合いである。どちらが優れているとは言えない。各々の個性に合った戦闘方法にすぎないからだ。

二人の間の緊張感により、ぴん、と空気が張り詰めていくのが、息をひそめて見守る和美にも感じられた。
ごく、と和美ののどが動く。
と、

「いざ！」

先に仕掛けたのは弥生だった。
ためらいのみじんも無い強烈な一撃を、上段から真っ直ぐ振り下ろしていく。
陽の技。
飾り気の無い、シンプルで豪快な技だ。
当たるものを粉々に打ち砕く、威力の物凄さが目に見えて判りやすい一撃である。
だが、

「きゃっ！」
見ていた和美が、口の中で悲鳴を上げる。

弥生の木刀が乱丸に当たったと見えた瞬間、吹き飛ばされたのは弥生自身の方であったのだ。

「くうぅ」

地面に腰をしたたかに打ちつけて、弥生は呻いた。すぐには立ち上がれない。

「勝負あり、だな」

見上げると、右手の掌で、何かを押し出すようなポーズを取った乱丸が、得意気にウインクしている。

陰の技。

豪快で威力の判りやすい弥生の技に比べ、乱丸のそれは、一見何をしたのか判らない、見えにくい一撃である。

ほとんど動きもなく、外見からは威力などないように見えるが、そのダメージの深さは、受けた者にしか判らない。

今の攻防も、和美になどいくら目を凝らしていても、何が起こったのかまるで理解できなかったに違いない。

弥生の木刀が頭上に降ってきた時、乱丸がしたのは、一歩前に出て、ひょいっと掌を弥生の腹に当てただけである。

まるで、知人の肩を叩くような感じのその動作によって、弥生は派手に吹き飛ばされていたのであった。

「今のは……、一体？」

目をぱちくりさせて、和美がつぶやく。

にっ、と笑いながら乱丸は振り向いた。

「覚えときな、今のは『神威』って技だ」

「か・む・い？」

「古武術の奥義の一つよ」
腹を押さえながら、弥生が立ち上がってきた。
「あ、大丈夫ですか弥生さん？」
慌てて和美が駆け寄る。
「タフだなあ弥生、充分手加減したけどよ。今のは見た目は地味でも、想像以上のダメージがあったはずだぜ」
「確かにね、死ぬかと思ったわよ、かよわい乙女にまさか神威を食らわすとは思ってなかったわ、この人でなし」
べー、と弥生は負けた腹いせに舌を出す。
「ぬかせ、てめえの一撃だって冗談じゃねえぜ。本気でオレの頭、狙ってきやがって、それなりの反撃をしただけだ、思い知ったか」
「うっさいわねえ、あんたがあれぐらいで死ぬもんですか、あ～、くやしい！」
後で和美が聞いた話によると、乱丸は古流の必殺武術も身につけているそうである。
『神威』とは、その中に伝わる最高の奥義であるらしい。
伝説によると、戦国時代にこの古武術の使い手が神威で打った相手は、ヨロイはそのままで、内臓だけが爆発したように背中から飛び出したという、とてつもない技である。
そんな人間ばなれした技であるため、マスターできる人間は限られており、それゆえ、体得できた乱丸は、『神威の乱丸』と呼ばれて、武術界でもわりと名の知れた男なのだそうだ。
「盗みやっててて、荒っぽい事になった時に便利だぜ。武器の一つも身につけていない時だって、誰にも負けねえからな」
そう言って、乱丸はえらそうにふんぞり返ってみせた。

「はは」と、和美は困ったように笑ってみせる。
ここで、やっぱり盗みに思考がつながっているのが、いかにも乱丸らしい。

「誰にも負けないですって？」
急に、弥生の声が高くなる。
「ウソおっしゃい、文兄ちゃんがつけたその顔の傷、……立派な負けの証拠を忘れたの？」
びっ、と人指し指を突きつけられて、乱丸はばりばりと頭を掻いた。

「あちゃー」
“あちゃー”じゃないわよ、あたしの文兄ちゃんを差し置いて、負けなし宣言をしたら承知しないわよ！」

「あ、あたしの文兄ちゃん？」

突然、いつもと違う様子で取り乱す弥生にびっくりして、和美も唖然としてしまう。

「何だてめえ、まだあいつの事あきらめてねえのかよ？」
「当たり前じゃない！　あたしに剣術を教えてくれたのは『文兄ちゃん』よ、あの人を超えて、長年の夢をかなえるのよ！」
ぐっ、と拳を握って、弥生は熱く語った。

「けどよ」
乱丸は、困ったような顔つきであごを指先で掻きながら言った。
「少しは上達したようだが、まだまだ、だな。オレに勝てねえようじゃ、あの安芸文太郎の足元にも及ばねえぜ？」
その名をはっきり口に出されて、弥生の顔が真っ赤になった。

「うっさいわねえ！　判ってるわよ、そんな事！」
ぷうっ、とほっぺたをふくらませて、そっぽを向いてしまう。
「弥生さん、弥生さん？」
つんつん、と、袴の袖を和美が引く。

「あの……安芸文太郎さんって、何か特別な人なんですか？」
そう言った途端、

「そーなのよ、まさしくその通り！」
つん、と横を向いていた弥生の顔が、食いつきそうな迫力でこちらに向き直った。
「あたしの知る中で、あの人ほど完璧に剣を扱う人はいないわね。そう、心・技・体全て揃った言うことなしの人よ！　今は武者修行の旅に出てて居場所は判んないけど、あの人に勝つことで、剣術教えてくれた恩に報いようと思っているの！」

憧れのアイドルのどこが好きかを熱弁するミーハーな少女のように、目をぎらつかせながら一気にまくしたてる。

「あの、もしかしてその人の事好……」
「やだもー和美ちゃん、そんな事ないってえ！」

和美の言葉を最後まで聞かずに、弥生は真っ赤になりながら彼女の背中を張り飛ばした。
骨がへし折れそうな張り手を食らい、声も出せずにのたうつ和美の向こうで、

「何だ、文太郎の居場所知らねーのかよ。それじゃ、肝心の腕だめしは一体どうやってるんだ？」

と、乱丸が聞く。
エキサイトしまくった弥生は、ぜいぜいと息を切らしつつ、
「最初はあたしの方からあちこち探したけどね、一人の人間を見つけるのには、やっぱ世の中広すぎてあきらめたわ。今じゃひたすら姿を現すのを待ってるってだけね。その代わり、いつ来てもいいように常に鍛練は続けて……ってどうしたの、あんた？」
弥生の眉が、いぶかしげに寄った。
乱丸が、弥生の話の途中で、突然固まってしまったのである。
その口はぽかん、と開き、目は何か遠くを見ているようだった。
目の前で手をひらひらさせても反応がない。

「？」
弥生と和美は、顔を見合わせた。
すると、乱丸の身体がぶるぶるっと震えだし、

「そぉか、その手があったかよ、そいつはいいや！」
突然大声を出し、ぱん、と手を打ち鳴らした。
「ちょっと、何なのよ一体」
なぜか燃えている様子の乱丸の顔を、弥生が覗き込む。
にっ、と乱丸はふてぶてしく笑った。

「なーに、ひらめいたのさ。……おい、もう一度京平ん所へ行く。二人とも一緒に来てくれねえか」
そう言うが早いか、すでに乱丸は玄関に歩き出している。

「はあ？」
何を言っているのか理解できない少女二人は、一度顔を見合せ、慌てて乱丸の後を追った。

☆　☆　☆

――――生徒会室。

ばかでかい会長卓に座った蘭堂京平が、机に両肘をついてこちらを見ている。

「と、いう訳で、この箱を借りてくぜ」

ニヤニヤしながら、乱丸は京平の目の前に置かれた小さな宝石箱を指さした。

『マリーの箱』と二人が呼んでいたものだ。

「“と、いう訳”と言われても何の事だか……」

そう言って、美しい生徒会長は軽く眉をしかめた。

その苦笑した顔がまた、ぞくぞくするような妖しい魅力を秘めていて、乱丸の後ろに立っていた弥生と和美は、思わず頬を赤く染めていた。

感受性の強い少女だったら、京平にウインクでもされれば、失神してしまうかもしれない。

乱丸の後について生徒会室に入るには入ったが、その魔的な美しさに少女二人はどぎまぎしてしまい、まともに京平の顔を見つめる事ができなかった。気の強い弥生ですら、内気な少女のように、そわそわしている。

意識して視線を美形の生徒会長から外し、室内の様子を珍しげに眺め、キョロキョロしていた。

「まあ、これはもともと君が盗んできた品物ですからね、自由に使ってよいのではないですか？」

少女たちが自分に対して示す態度を、京平はまるで気にしていな

いらしかった。それどころか、さらっとヤバい話を口にするので、乱丸は咳払いをしてごまかした。
「ま、まあ確かにそうだけどよ。このテのものはお前に預かってもらってるのが、一番安心だからなあ」
「他にも、君から預かっているこのテの品物がありますが、そちらは持ち出さなくてもよいのですか？」

「とりあえず、うまくいけばこれだけで用は足りるだろうさ」
何かよほどいいアイディアが浮かんでいるらしく、乱丸は得意そうに鼻の穴をふくらませている。
だが、一体何のアイディアなのか。

「それに乱丸君、この箱を働かす方法をご存じなんですか？」
そう聞く京平に、にっ、と笑みを浮かべた乱丸は背後を指で指し示した。
所在なさげに立っている弥生と和美が、きょとん、とこちらを見た。

「なるほど、手回しがいいですね」
「だろ？」
何か、二人にしか判らない秘密を、京平と乱丸は目と目で確認し合ったようであった。
「何を男同志でごちゃごちゃ言ってんのよ、やーらしいわねえ」
何事か京平と乱丸が企んでいるらしいという事を、弥生が敏感に感じ取る。

「あたしら、用がないならもう帰るわよ」
すると、乱丸は箱を手のひらの上に乗せて、振り向いた。
「まーまー、そう手間は取らせねえからよ」
そう言って、二人によく見えるように、箱を目の高さまで持ち上

げる。

「箱……」

思わず、和美が判りきった事をつぶやいた。

「そう、箱」

うんうんと乱丸、大げさに頷く。

「何のつもりよ？　まさか浦島太郎みたいに、白いケムリがもわっと出るんじゃないでしょうね？」

「さあどうだろうなあ、二人とも、よおくこの箱を見つめてみな」

興味をそそる乱丸の口調であった。

何が起こるのか、軽い期待をしながら、弥生と和美はじっと箱を見た。

ヨーロッパ……中世ぐらいの品だろうか？　周りに施された装飾が古めかしく、しかも謎めいた形を表しているが派手さはない。

宝石箱のようだが、今、乱丸が持っている感じでは、中身は空っぽなのだろう。

「ところでお前ら、今、夏休みだよな？」

不意に、乱丸はとんちんかんな質問をした。

「思い出はいっぱい作ったか？」

この問いに、二人は顔を見合わせた。

「まあ、そりゃ一応ね」

「ええ、あたしも……きゃっ！」

弥生と和美がそう言った途端、思いがけない早さで乱丸が箱のフタを開けたので、一瞬二人は悲鳴をあげた。

「ビンゴ」
乱丸は、箱を開けたそのポーズで小さくつぶやき、会長卓の向こうで京平が薄く笑みを浮かべた。

「何だっていうのよ乱丸、びっくりさせないでよ！」
胸を手で押さえながら、弥生が口をとがらせる。
だが、本当にびっくりするのはこの後だった。
「や、弥生さん！」
和美が震える声で、弥生の頭上を指さした。
その指し示すものを見て、弥生はぽかん、と口を開く。

「うわあっ、何よこれっ！」
見ると、弥生のつむじの辺りから、湯気のような綿菓子のような白いもやもやしたものがにじみ出てきていた。
「やっ、あたしも！」
和美の頭からも、同じものが出てきている。
きゃあきゃあと、二人がパニックになっているうちに、ピンポン玉ぐらいの大きさになったそれは、ふわふわと空中を漂い、乱丸が手にした箱の中にすうっと吸い込まれていった。

「よし、ご協力感謝」
すかさずフタを閉め、乱丸は二人に片目をつぶってみせた。

「はあ？」
すぐに京平に向き直り、

「どうだ、うまいもんだろ？」
これまたウインクするのに対して、京平が軽く拍手をしていた。

「その箱をそこまで使いこなせるんだったら大丈夫、きっと君の考

えている事はうまくいきますよ。それにしても、よくこういった方法を思いつきますね」
「まーな、オレが欲しいと思うものは、常に常識を超えたシロモノだからな、既成概念にとらわれず、柔軟な発想をする事ができなけりゃとても盗めねえもんばっかりさ。また、それを盗む過程で、面白いモンを見たり普通じゃできない体験をしたりする。それこそ、最高の快感だぜ、生きてるって実感できる……。オレは、その目的を達成するためなら、どんな事でもするつもりだぜ」
熱く語る乱丸に対して、
「そのバイタリティ、うらやましいことです」
ぽつり、と京平はつぶやいた。それはどこか、長い年月を生きてきた老人を思わせるような口調だった。
「ちょっと、あんたたち！」
ダン！　と弥生は手にした木刀の先を、強く床に突きつけた。
「さっきから何をごちゃごちゃ言ってるのよ、今の妙な現象も含めて、納得のいく説明をしてほしいものだわね。まさか……」
もはや気後れすることなく、京平の顔を真っ直ぐ見つめる。
「あたしたちに変な魔法をかけたんじゃないでしょうね、会長？」
自分で言った言葉で、改めてぞっとしたものか、弥生の顔が強張っている。
和美も怯えてしまい、両手で胸の前を押さえていた。
頭の中に、京平は魔法使いだという弥生の言葉がぐるぐる回っている。
訳も判らないうちに呪いをかけられ、カエルにでも変身させられてはたまったもんじゃない。涼しげな微笑を浮かべた彼の表情が、なまじ美形であるだけに、とてつもなく恐ろしい存在であるように

思えてきた。

「二人とも、そんな顔をしないで下さいよ。そんなにボクは恐い男ですか？」

みるみる内に青くなっていく少女たちに、京平は優しく声をかけた。クスッと小さく笑うその表情は、冷たさを感じさせない、むしろ見るものを安心させる暖かさを持っていた。

それだけで、ぴりぴりしていた弥生と和美の全身から、ふっ、と力が抜ける。

それこそ、魔法のようであった。

「大丈夫ですよ、ボクは自分の欲望のために、この学園の者を傷つけることは絶対にしませんから」

穏やかな口調で言いながら、一瞬視線を手元に落とし、

「その代わり、君達に害なすものには、容赦なく罰を与えますけどね」

と、つぶやく。

こんな時、わずかだが魔人としての素顔がのぞき、この男が人外の者である事を、人は感じ取るのである。

人を魅了する笑みの中に、一瞬垣間見せる闇の顔。

奇人変人揃いのこの斎木学園中で、最も謎めいた男でもある。

「そうは言っても、誤解を与えて不安にさせてしまった事は謝らねばなりませんね、申し訳ありません」

きちんと頭を下げて、京平は二人に詫びた。

「い、いや、何もしてなきゃいいわよ……って、じゃあ今の『もやもや』は乱丸の仕業ね」

ぎん、と殺気すら込めて弥生は、にやにやしている乱丸に目を向けた。
「いやあ、弥生の怯えた顔なんて珍しいモン見れて、ラッキーだぜ……わわっ！」
その瞬間、問答無用で襲ってきた木刀の横殴りの一撃が、首を引っ込めた乱丸の頭上をかすめていく。
すぐさま翻って面打ちに来たのを、乱丸は床にひっくり返って、足の裏で受け止めた。

「イテーッ！　殴りゃいいってもんじゃねえだろ、このバカ女！」
「おほほほ、いい加減、あんたという存在が目障りになってきたわよ」
ぎりぎりと、木刀と足で押し合いになって固まってる二人を横目に、恐る恐る和美が京平にたずねる。

「……生徒会長さん、つまり、さっきの『もやもや』は何だったんですか？」
弥生と乱丸のケンカを、子猫のじゃれあいを見るような目つきで眺めていた京平、ふ、と片眉をあげて、

「あれはですね、簡単に言うと、お二人の『夏の思い出』をほんの少し乱丸君が盗んだのですよ」
「え？　ええ？」
この美形の生徒会長は、あっさりと、和美の理解を超える事を口にした。

「別に身体や精神面に害はありませんから、心配しなくてもいいですよ」
箱を開ける前に、乱丸が二人に夏の思い出の事について話しかけたが、その時にすり取ったのだという。

「で、でも、そんな事できるわけないじゃありませんか」
思わず声が高くなる。が、京平は静かにつぶやいた。
「乱丸君ならできるんですよ、たとえ形のない概念のようなものであってもね」
その会話を聞いていたものか、乱丸はこちらを向いて、にっ、と歯を見せた。
「言ったろ？　オレの盗む対象は、常に常識を超えたシロモノなんだよ」
弥生が押しつけてくる木刀に耐えながらも、誇らしげに言う。
「はあ、でも何のために？」
改めて、常識外れな男であることを認識し直して、もう一度和美は京平に聞いた。
「乱丸君は、これから形のないものを盗まなければならないんですが、それには道具が必要なのです。それが、あの手に持っている箱なんですが、あの箱の機能を発揮させるために中に入れるエサというか、触媒が必要だったんですよ」
「はあ……」
説明されても、よく判らない。
箱に夏の思い出をつめて……一体何をやろうとしているのか？
その時、「だーっ！」と叫んで、乱丸が弥生の木刀をはねのけていた。
「ったく、こんなことして遊んでる時間はねえんだよ。エサの仕込みはできた、後は仕掛けなきゃあな」

がばっ、と立ち上がる。

「それなら、学園裏手にある森の、あの木の辺りが良いと思いますよ」

そっと京平がアドバイスする。

「そうか、サンキュ、お前らも協力ありがとうよ」

乱丸は手短にそれだけ言うと、もう振り向きもせず、足早に部屋を出ていってしまった。まるで、つむじ風のような退出の仕方である。

ぽつん、と三人が取り残された。

「ちょっと、何よあいつ……」

木刀を肩に担いで、弥生が呆然とする。

「もしかして、あたしたちから『夏の思い出』をすり取ったから、もう必要ないってことじゃないですか……」

こちらも呆気に取られている和美がつぶやく。

「あっきれた、あたしらそれだけのために付き合わされたっての？しかも用が済んだら知らん振りって……どう思う！　会長？」

きーっ、と目をつり上げっぱなしの弥生、今度は京平に食ってかかる。

「確かに、ちょっと自己中心的すぎますね」

京平は、考えこむように、少し首を傾ける。

「そうだ、二人とも乱丸君の後を追って、彼が手に入れようとしているものを見せてもらうといいですよ。きっと面白いものが見れるはずですから。それで、失礼な点はかんべんしてあげてくれませんか？」

京平にそう言われて、弥生と和美は顔を見合わせた。

「そうねえ、何だか乱丸に頭の中のもの、勝手にいじくられたみたいだし……、それを使って何をしようってのか、最後まで見せてもらう権利ぐらいあるかもね」

「ええ、そうですね」

和美も同じ気持ちであった。

二人の目が、好奇心に輝く。

その様子を見て、京平は会長卓に肘をついた姿勢で、穏やかな笑みを浮かべていた。

ＡＣＴ・４『学園裏の森』

ＡＣＴ・４

斎木学園の裏手には、ちょっとした森が広がっている。
町と、山とを隔てる形で広がっているその森の一角を開拓して、この学園が創立されたのだ。

不思議な森であった。

もともとこの学園の創立者が、星の位置やら、方位学や地相やら様々な悪条件にあることを承知で選んだのだから、その周りを囲むこの森も、少なからずまともな場所であるはずもない。
面積で言えば、さほど広くないにも関わらず、たまに道に迷って遭難する人が出るという、一種のオカルトゾーンである。
その他にも、夜、人気がないのに光が見えたとか、絶滅したはずの日本オオカミの遠吠えを聞いたとか、あやしい話題のネタは尽きない。
学園創立以降は何の開発もされていないため、ほとんど手つかずの自然が残っている事から、そんな噂が出るのかもしれないが、現代の日本で絶滅しつつある、原始のままの森であるという点では、とても貴重な場所であると言えよう。

その中の、獣道のような道ともいえない道を、ずんずん乱丸が歩いていく。

「ちょっと、もう少しゆっくり歩きなさいよ」
その後を、よたよたと弥生と和美がついていく。
袴とスカート姿の二人である、こんな道は当然歩きづらい。

「うるせえな、ついて来なけりゃいいだろうが」
ぶつぶつ言いながらも、それでも彼なりにスローペースで歩いているらしかった。
静寂に包まれていた森が、三人の少年少女の出現で、急ににぎやかになっていた。
原始の森の持つ緑のエネルギーと、十代の彼らのエネルギーが互いに感応し合っているのだろうか。三人の若さが周囲の木々にまで刺激を与えて、葉ずれのざわめきを増やしているような気さえするほどであった。

歩きながら、乱丸と弥生が一言ふた言やりとりする。
湿った足場のため、滑ったりつまずいたりする度に和美が小さく悲鳴をあげる。
高いところで木の枝がこすれ、ざわめく。

まるで三人の様子を見て、森の木が笑い声をあげているようだ。

この辺まで森に入り込めば、もう町の音は聞こえない。
そろそろ、人が普通生活している空間とは切り離された、別世界のような独特の雰囲気が流れ始めてきた。

「弥生さん、あたしこの森にこんなに入り込んだの初めてです」
慣れない森の中の道に、悪戦苦闘しながら汗びっしょりの和美がつぶやく。
「そうねえ、あたしもこんな所まで来たことないわ。乱丸、あんた自殺志願者じゃあるまいし、一体どこまで行くつもりよ？」
弥生も、一旦足を止めて袴の袖で顔の汗を拭った。
片手で箱を持ち、片手で頭をばりばり掻きながら、乱丸が振り向く。

「あのなあ、勝手について来てて、ぶつぶつ小言を言ってんじゃねえ。オレは観光ガイドじゃねえんだぞ」
こめかみに、青スジが浮いている。
「今からオレは、自分の命に関わるような大仕事をやろうとしてるんだ、期限つきのな。のろのろしてるヒマはねえんだよ！」
そう言って、くわっと牙を剥いてみせ、再び乱丸はずんずん歩きだした。

弥生は、ふん、と鼻を鳴らし、
「だからって、説明もなしに人の頭ん中いじられたんじゃたまんないのよ。何をしようとしてるのか、しっかり見届けさせてもらうからね」
と、弥生も早足で乱丸の後を追い始めたので、和美は「ひー」と言いながらあわててついていく。

そこからさらに深く森の中に分け入っていき、ようやく乱丸は立ち止まった。

「おい、着いたぜ」
ほとんど汗もかかず、乱丸は平然としているが、後ろの二人は蒸し暑さに全身汗だくだ。八月末の、ジャングルみたいな森の中を歩いてきたのだから、これが当然だろう。
ひいひい言いながら、顔を上げる。
すると、そこにはぽっかりと不思議な空間が広がっていた。

「うわあ……」
「すごい」
思わず少女たちはため息をついた。

そこに、一本の巨木がどっしりと根を張っているのだった。
道なき道がそこで途切れて、円形の広場になっている。まるで、その巨木に遠慮するかのように、周りの木が場所を空けている。
そんな感じの空き地であった。
立派な木である。

太くて、大きい。

一体、樹齢何年を経れば、これだけ大きな木が育つのか、弥生と和美には想像もつかなかった。

呆けたように口を開けて、高くそびえる頭上の梢を見上げる。
葉の間から、優しい光がちらちらとこぼれているのを見ているだけで、感動的な気分になる。神々しさのような雰囲気が、この巨木の周囲には存在していた。まるで、別の次元に足を踏み入れたような気になってしまう。

「久しぶりだなあ、『長老』」
乱丸が近づいていき、苔のはりついた幹をぺちぺち叩く。
すると、まるであいさつを返すように、頭上の枝が葉ずれの音をさせる。
目を細めて、乱丸は巨木を見上げた。
「悪ィけど、またひとつ世話になるぜ」
そうつぶやいて、その太い幹の目の高さぐらいの部分にぽっかり空いた『うろ』の中に、『マリーの箱』をそっと置いた。
「これでよし」
満足気に言うと、乱丸は振り向いた。
「“これでよし”って……こんな事で何が起こるっていうのよ？」

鼻歌まじりで巨木から離れる乱丸を追いながら、弥生が口をとがらせる。
「そうですよ、“命に関わる大仕事”ってさっき言ってたじゃないですか、そんなにのんびりしてていいんですか？」
和美も、乱丸の顔を覗き込む。

確かに、“のろのろしてるヒマはねえ”とか言った割りには、ここに至って随分のほほんとした態度である。
二人は乱丸の考えている事、やろうとしている事の予想が全然できずに戸惑った。
円形広場の端まで来たところで、乱丸はおもむろに座り込み、さらにごろん、と横になってしまった。

「まーな、はた目にはのんびりしてるように見えるかもしれねえけどよ、こいつはまぎれもなく真剣な行為だし、オレの命がかかってるってのもウソじゃねえ」
この言葉が本気なのか冗談なのか、言いながら乱丸はあくびなどしている。

「その顔のどこに真剣味があるってのよ」
「ま、そう言うなって、こいつはお前からヒントをもらったんだぜ？」
「はあ？　あたしが？」
びっくりして弥生の片眉が上がる。

「おーよ、オレは今ある獲物を追っかけてる最中なんだけどよ、この広い世の中で、どこにいるのかも判らねえ奴を闇雲に探し回ったって合理的じゃねえし体力のムダってもんだ。第一、絶対見つかるって保証はどこにもねえ。そこで、さっきのお前の話だ、お前は気まぐれなあの安芸文太郎が自分から姿を現すまで待つ、って言って

たよな？　それを聞いてピンときたのさ、探して見つからねえんだったら、向こうから姿を現すように仕向ければいいってな」

これこそグッドアイディア、といわんばかりに、乱丸はにやついている。

弥生は肩をすくめた。その影から和美がおずおずと顔を出す。

「それで、妖しげな箱にあたしたちの頭の中から抜き取った『夏の思い出』を入れて、あの木のうろに置いたっていう一連の行動にはどんな意味があるんです？」

「ああ、ありゃあ要するに獲物をおびき寄せるためのエサさ。待ち伏せを仕掛けるんなら、対象が思わず釣られて顔を出さざるを得ないきっかけが必要だからな。ところでお嬢ちゃん、例えば獣を罠で捕まえるためにはどんな工夫が必要だと思う？」

からかうような口調で、乱丸が和美に問いかける。

和美は、不意の質問にどぎまぎしながら、

「え、えーと、おいしそうなエサが必要なんじゃないでしょうか」

伺うように、思った事を口にしてみた。

だが、その和美の答えに対して、乱丸はチッチッチッと指を振った。

「確かにうまそうなエサは必要だ、匂いに釣られて引き寄せられるからな。けど、警戒心の強い野生の獣は、それだけじゃなかなか罠にかかっちゃくれねえんだな、これが」

えらそうに乱丸は、腕まくらのまま講釈をたれはじめた。

「まず、奴らは匂いに敏感だ。これはオレたち人間が想像する以上に、奴らにとっては重要な目印だ。個体の識別を行うのに、人以外

のほとんどの動物は、視覚よりも嗅覚が優先する。嗅ぎ慣れない匂いなんかは、たとえごちそうだったとしても、奴らは警戒を解かねえのさ、そんな時は当然罠にもかからない。だから、逆に獲物が安心するような匂いを、罠に染み込ませとけばいいってことになる。例えば、そいつ自身の匂いとか、身内の匂いとかだな」

「へえ……」

目をぱちくりしながら、和美は乱丸の話を聞いていた。

弥生は何だか、納得のいかない顔で眉をしかめている。

「で、結局あんたがあの箱を使っておびき寄せたいモノって、何なのよ？」

気の短い弥生にとって、乱丸の回りくどい説明は、未完のまま中断しているミステリー小説のように、消化不良であるらしい。

もっと、単純明快に答えが知りたいのだった。

だが、そんな弥生の性格を知り抜いているのか、乱丸は意地悪くニヤニヤ笑って、

「まあ、とにかく待てよ。首尾よくそいつが姿を現したら、もう少し説明してやるからよ」

そう言って、両手を頭の後ろに組んで、草の上に完全に寝そべって目をつぶってしまった。

「今、お前らに本当の事を話したって、理解できやしねえよ」

ぽつりと、二人に聞こえない大きさで、乱丸はつぶやいた。

と思うや、すぐにすー、すー、と寝息をたて始めたので、弥生と和美は顔を見合わせて、仕方なくその場に座り込んだ。

「まったく、訳判んないヤツねえ」

ふう、と弥生、大きくため息をつく。

全然合点のいかない乱丸の行動と態度に、すっかり呆れ返ってし

まっている。
何だか、乱丸に付き合っていると、とてもバカにされているような気がしてくるのだ。

ただ、それが気に入らないのだったら、昼寝を始めた彼をほっぽって、さっさとこの場を立ち去ることも出来るはずだが、弥生はそれをしそうになかった。

「ま、こいつの周りじゃ、何かしら珍しい物や面白い物が見られるからねえ、ヒマつぶしには丁度いいかもね」
そう言う弥生の顔を、和美はきょとんとして見つめた。そして、ちらっと巨木のうろに置かれた謎の箱を見る。

果して、これから何が起ころうとしているのか？　それを考えると、軽い期待感が和美の中に満ちてくる。

とても退屈だった夏休みの午後が、急にときめきに満ちたものに変化していった。

☆　☆　☆

乱丸が昼寝に入り、弥生と和美も無言になった。
ただ、ぼんやりと巨木と箱を眺めているだけである。

時間だけが、静かに流れていく――――。

と言っても、森の中の静けさというものは、完全な無音状態という訳ではない。弥生と和美も、この沈黙は別に気にならなかった。
むしろ、心地よさを感じている。

風が流れていく音。
どこかで流れるせせらぎの水の音。
ざわめく木の葉。
小鳥のさえずり。
虫の羽音――――。

我々が『静か』と感じている中に、これだけの音が存在しているが、しかし、それらは決して煩わしい雑音とは感じない。

また、空気もいい。

夏後半の、濃い緑色をした植物たちの瑞々しい芳香。そして、それらが生み出す新鮮な酸素。足元には、何十年、何百年と積み重なった腐葉土の、湿りけをを含んだ柔らかな感触と、生々しい土の匂い。

それら全てが渾然一体となって生まれる涼しさが、森の息づかいとなって、訪れる人間を優しく包んでいく。

思わずうっとりした気分になってしまうほどだ。

何か、現代人が忘れているものを、思い出すような感覚が『森』という空間には存在していた。

考えてみてば当然の事かもしれない。

人間は、自然の中に生まれた生物である。本来生物は自然の枠の中で生きるものだけれど、人間は自らが生み出した『文明社会』という“不自然”の中で生きる事を選んだ。

そのことには、元々無理があるのだ。

生物は、自然界のシステムに従ってしか生きられないのに、自然

と切り離された世界に人間は閉じこもろうとしている。それは、生物として孤独な存在に成り果ててしまうことだ。
だが、ひとたび人間の社会を離れて、ここのような場所へ足を踏み入れてみれば、目からウロコが落ちるような印象を受けるのだ。
即ち、『この世は、生命に満ち溢れている』ことの再認識。

群生する木々はもちろん、空気の中にも、植物の胞子などの形で生命が存在する。
また、葉の上に溜まった、たった一滴の水滴や、足元からすくい取った一握りの土の中にすら、無数の微生物が蠢いているのだ。
それら目に見えないちっぽけな生命が、濃密に我が身を包み、自分も自然の中に生きる生命体の一つである、というごく当たり前の事を再認識し、感動する。

それは無意識の感覚だが、本来自分が居るべき場所ということを本能が思い出して、心地よさを感じるのである。

とても長い沈黙は、まだ続いている。

頬を撫でていく風も、穏やかだ。

ふと、腕時計を見ると、『午後三時五分』
一体、どのくらいこうして森の中にいただろうか。

長い、長い午後であった。

そう感じつつも、もっとここでぼんやり過ごしてみたいと思う。

……あふ。

段々と、身体がふわふわしてきた。
だんだんと、時間の感覚が、あいまいになっていく……。
まるで、
自分が、森の空気の一部と化していくような……。
まるで、
身体が、森の空気に溶けてしまいそうな……。
眠……。

と、
その時、
目をつぶっていた乱丸の唇が、にやり、とつり上がった。

「来た」
ぽつりとつぶやき、片目を開ける。
「え……」
いつの間にかうとうとしていた弥生と和美が、はっとして目を覚ます。
それを見て乱丸は、人指し指を口元に持っていき、“静かにしていろ”と目配せした。
二人は、何かとてつもなく張り詰めた気配を乱丸から感じて、息を潜めて身体を緊張させた。
すると、森の中から、あらゆる音が消えていく――――。
あたかも、森自体が息を潜めたかのごとく、真の無音になった。

乱丸たちのいる場所が、不思議なムードに満たされていった。

そして……、

現れたのは、チョウであった。

音もなく、素肌にすら感じないほどのわずかな風に乗るように、一匹のチョウが、ゆっくりと木々の間を舞って来たのだった。

“うわあ……”

二人の少女は、そのあまりにも優雅な色合いに見とれた。

『青』であった。

今まで見た事もないような、完全なる『青』。

あまりの美しさに、形容する言葉が見つからないほどだ。

いや、

そうではない。

見た事がある。

それは例えるなら、海の色、空の色、……地球の色だ。

『根源の青』

最も自然な色であるがゆえに、最も美しい――――。

そんなきらめきを持つ青色だった。

その『青』に彩られた羽根を動かし、ゆっくり、ゆっくり、時間をかけてチョウは飛ぶ。

何かに引きつけられるように、甘い匂いに誘われるように、長老の木へ近寄っていき、そのチョウはやがて『マリーの箱』に辿り着

いた。
箱の表面に舞い降り、羽根をしきりにゆらゆらさせながら、考え込むように歩き回る。
「あっ！」
その時、和美は思わず叫んでいた。
『箱』が急にひとりでに開いて、表面を歩いていたチョウを、その中に取り込んでしまったのだ。
「何、今の！」
弥生も、目をぱちくりさせる。
今の瞬間、箱の中から白い手がにゅっ、と伸びてチョウを捕らえるのを彼女たちは見ていたのだ。
がちゃり、と音をさせて、箱は再び閉じてしまった。
――――冗談のような、ワンシーンだった。
「乱丸、あんた要するにあのチョウが目当てだったって事？」
袴の袖で額の汗を拭いながら、全身の緊張を解いて弥生がため息をつく。
「確かにきれいなチョウだったけど、目の色変えて追いかけ回すほどの価値があるもんなのかしら……」
やや弥生には拍子抜けだったようである。
乱丸の身の回りに起こる“面白い事”というのに、彼女は大分期待していたのだろう。
珍種の、マニアならいくらでも金額を積むような価値を秘めたチョウが現れたとしても、それは弥生の言う面白い事には、値しないらしかった。

気まずいのか、乱丸はそんな弥生の言葉にも、身じろぎひとつしない。

「やれやれ」

弥生はひとりごちながら立ち上がり、背伸びをする。

その時だった。

ざあっ。

森が、ざわめいた。

風ではない。それなのに、木々の葉が音を立てている。

何か！？

そう思った途端――――、

さあああ、と何かがこすれるような音が近づいてきた。

「きゃっ！」

立っていた弥生が頭を抱える。

チョウであった。

さっき箱に捕らえられたのと同じ、青いチョウが、群れをなして集まってきたのだ。

音をたててチョウたちが、ひとつの流れとなって弥生の脇をすり抜けていく。

目標は長老の木だ。それを中心にして、無数のチョウが渦を巻くように舞っている。

それはまるで、つむじ風に巻き上げられた青い花びらのようにも見える。

その光景の、何と幻想的なことか。

出現の唐突さに面食らいはしたものの、落ち着いてみれば、このチョウたちが何ともはかなげな存在である事に、弥生と和美は気づいた。

指先で触れただけでも、淡く消え去ってしまいそうなほど、ぼんやりとしている。

……妖精？

あるイメージが閃いた途端、和美の内部に不思議なエネルギーが流れ込んだ。

はっと目を見開く。それを感じた次の瞬間には、もう言葉が口をついて出てきていた。

「乱丸さん！　このチョウたちは困っています。あの箱に捕らえられた最初の一匹を助けようとしてるんですよ！」

地面に膝をついたまま、和美はチョウの群れを指さした。

「可哀相ですよ、早く出してあげて下さい！」

今度は乱丸が、びっくりしたように目を見開く。

「なんだあ？　お前、こいつらの言葉が判るなんていうんじゃないだろうな？」

そのやり取りを聞いた弥生が、口をはさむ。

「乱丸、初対面だから知らないでしょうけど、この相沢和美ちゃんは超能力者よ、とはいえここんとこ、その力は使えなくなっていたはずだけど……」

「なるほどテレパシーか、それならこいつらと意思が通じ合えても

おかしくはねえな」
ふうん、と乱丸は頷いた。

どういう訳か、この場になって突然ＥＳＰが復活した和美であった。もともと、飛んでるヘリコプターや、襲ってくる戦車すら叩きつぶすほどの能力を持ちながら、その巨大な能力をコントロールできない不安定さがあったため、使えたり使えなかったりというのはこれまでもよく経験している。
いつも、何かの拍子に回復するので、今回もたまたまタイミングが合ったという事なのだろう。

「そんな事は、今はどっちでもいいでしょう？　早く助けてあげて下さいよ！」
精神感応によって、ダイレクトにチョウたちの想いが届くのか、普段はおとなしい彼女の口調が、珍しく強い調子になっている。

だが、
さあああ……、と羽音を響かせているチョウの群れをちらっ、と見てから、乱丸は首を横に振った。

「それはできねえ」
あっさりと言う。
その態度に、今度は弥生がむっとした。

「ちょっと乱丸いいじゃないの、いくら珍しくたってたかがチョウなんだから、今は自然保護が最も重要な時代よ？」
指まで突きつけて説教を始めた弥生に、乱丸は苦笑する。
と、不意に、彼の目が不思議なきらめきを見せた。

「弥生……、お前の言う“面白い事”ってヤツが、今から見れるぜ

少しおとなしくしてろよ」
何か、肉眼では見えないものでも見ているように、乱丸の目の光が強くなる。それと共に、唇が笑いの形にめくれ上がり、たくましい歯をのぞかせていた。

ごく。

その迫力に、弥生も和美も黙り込む。
そして、何かの気配のようなものを背後に感じて、ゆっくり彼女たちは振り向いた。
乱丸の視線も、そちらを見ていたのだ。

「あ……」
和美が小さく声をあげる。
青い光の乱反射のように群れ飛ぶチョウたちの向こうに、静かに一人の少女が立っていたのである。

☆　☆　☆

白い大きな帽子に、白い服……。

少女は無言でこちらを見ていた。

「え……えと……」
弥生が口ごもる。
一体いつからそこにいたのか、少しも近づいてきた気配が感じられなかった。
いや、今こうして見つめていても、本当にそこにいるのか自信がなくなるほど、気配の希薄な少女である。まばたきすれば、次の瞬間にはそこからいなくなってしまいそうな雰囲気を持っている。

にこりともせず、黒い瞳で見つめ、黙ったままだ。
その周囲を舞う、おびただしい数の青いチョウたち。
まるで、シュールなイラストのような光景が、そこに存在していた。

「……」
夢の中から現れたようなその少女は、無言で『箱』を指さした。

ささささささ……。

チョウたちの羽音が高くなる。

「あなた……」
髪を片手で整えながら、弥生がつぶやく。
「そのチョウを助けたいの？」
弥生の問いには答えず、大きな瞳で少女は弥生の目を見返した。

「……？」
全て、無言のままであるため、弥生は少女が機嫌を損ねているのかと思った。
先に気づいたのは和美であった。
「弥生さん、この娘、口が……」
「あ……」
弥生が、はっとして口元に手を持っていった。

テレパシーを使える和美は、意図して他人の心を覗こうとしなくても、自然にある程度の思考は流れ込んできてしまう。
相手が、強くあることを念じていればなおさらである。

今もそうだ。

物静かな雰囲気とは裏腹に、この少女の内部には様々な想いが渦を巻いていた。
我知らず、和美は自分の胸元で両手を握りしめていた。
「アノコヲ、返シテ……」
ひとりでに和美の口が動き、ぽつり、ぽつりと言葉をつむいでいく。
少女から流れ込む思考を、無意識のうちにダイレクトに通訳しているのだ。
「……行カナクチャ……」
「行く？　どこへ？」
思わず、弥生は聞き返した。
すると、少女の瞳の光が初めてゆらめいた。彼女の言葉を、和美の口が代弁する。
「ワカラナイ」
切なく、苦しげな言葉であった。
「……ワカラナイ」
「判らないって、あなた……一体どこから来たの？　名前は？」
迷い子か、と弥生は思った。
この森で道に迷うことは珍しくない。この娘もその一人かと思ったのだ。
だが、
その雰囲気、群れ飛ぶチョウ……ただ者であるはずが、ない。
和美が頭を振った。

「だめ、弥生さん、この娘自分が誰なのか判らないみたいです」
改めて少女の顔を見つめ、片手で胸を押さえる。
「この娘の頭の中には、見た目以上に強い想いが溢れています。何かをおそれ、そして、あせってるみたい」
“……行カナクチャ……”
無表情な少女の周囲で、ささささ、とチョウが音をたてる。
弥生と和美の背後で、のっそりと乱丸が立ち上がったのだ。
ばりばりと頭を掻きながら、にっ、と笑みを浮かべる。
「ようやく会えたな……いや、正直な所、まさかこんなに早く現れるとは思わなかったけどな」
言いながら、指で鼻の頭を掻く。
「乱丸、あんたこの娘の事知ってるの？」
という弥生の問いには答えず、乱丸の目は真っ直ぐ少女を見つめていた。
その視線を、少女はあくまでも表情を変えずに、受け止める。
「ま、考えてみれば、お前らみたいなのが、『こっち側』の世界で行く当てをなくしたら、ここみてえな場所を頼りにやってくるしかねえもんなあ」
弥生と和美には、まるで判らないことを乱丸は言いはじめる。
――――お前らみたいなの？
――――行く当て？
「乱丸……？」
覗き込むような弥生に、ようやく乱丸が反応する。

「そうとも、オレはこいつの事を知っている。また、この『箱』もチョウを捕まえたのも、全てこの娘がここへ姿を現すようにするための仕掛けさ」
ますます判らない。
するとその時、また和美がぴくん、と身体を震わせて、言葉を紡ぎ出した。

「ワタシヲ、知ッテルノ？」
無表情な少女の瞳に、光がゆらめく。それに伴い、チョウ達もざわめく。
乱丸が頷いた。

「オレだけじゃない、お前の正体はこの二人だって知ってるぜ」
びっくりして、弥生と和美は顔を見合わせた。

「え……？」
「乱丸、私知らないわよ、初対面だと思うけど？」
ぶんぶんと首を振って否定する二人に、乱丸は、

「そうじゃねえ、お前ら思い出せねえだけさ、彼女をよく見てみろよ。何か感じないか？」
意味ありげに言う。
弥生と和美は、言われた通り少女をよく見つめた。

白い帽子、白い服の清楚な感じの少女……。

群れ飛ぶ青いチョウ……。

とても、幻想的である。

だが、その光景をほんのわずか視線をずらして、……つまり、見た目の持つ幻想美を取り除いて見てみる。

すると、

――――感じる。

潮風を。あの夏の日の、熱い風を。

――――聞こえる。

緑の中で、やかましく鳴くセミの声。

照りつける灼熱の太陽。抜けるような青空。でっかい、入道雲。

山盛りのかき氷。海、プール、山、キャンプ場……汗、汗、汗。

意識を込めて見つめた途端に、こんこんと二人の内部に溢れてくるものがあった。

弥生と和美は、その瞬間、白い少女の中に大いなるイメージを感じ取ったのであった。

「感じたか、お前ら？」

夢みるような表情で少女を見つめる二人の背後から、乱丸は近づいていった。

二人の肩に、ぽん、と手を乗せる。

「こいつはな……」

乱丸は、二人の耳に息を吹き掛けるような仕種で囁いた。

「『夏』だ」

と。

ACT・5『魔界ヨリ、客、来ル』

ACT・5

しばらくの間、沈黙が続いた。
チョウのかすれるような羽音だけが、森の中に響いている。

「乱丸……」
「何しやがる？」
真剣な表情で、額に手のひらを押し当ててきた弥生に対し、乱丸はこめかみに青スジを立ててたずねた。

「“何しやがる”じゃないでしょーが、あんた自分が何言ってるのか判ってんの？　この迷子が『夏』って……そんな訳ないでしょーが！　あんた、夏って季節なのよ、それぐらい小っちゃな子供だって知ってるわよ」
うんうんと、和美が横であいづちをうつ。が、
その顔が、すうっと青ざめていった。

テレパシーによって、和美は目で見えない内面の事まで感じ取ることができてしまう。今も、白い少女から伝わってくるものから、何かを感じたのだ。

「へっ、どうやらお嬢ちゃんには理解できたみてえだな」
にっと笑みを浮かべて、弥生を横目でにらみつける。
「和美ちゃん……？」
眉をひそめて、弥生は和美の顔を覗き込んだ。
「弥生さん、乱丸さんの言うとおりかもしれませんよ。……このコ普通の人間じゃないみたい……」

「……」
黙り込んで、弥生はささささ、というチョウの羽音を聞いた。
ごくり、と喉を鳴らす。

「じゃあ、このコは一体何なの」
「だから、『夏』だって言ってるだろ」
目にしている現実を受け入れられずに混乱している弥生たちに、頭を掻きながら乱丸は説明を始めた。

まず最初に理解すべきことは、この世の仕組みである。
全て、物事には表と裏がある。例えばコイン一つにしても、表だけでは存在しえない、表裏があるからこそコインとして成立できるのだ。
この世にも表と裏がある。それが、いわゆる『こちら側』と『あちら側』なのである。
判りやすく言えば、異次元というヤツだ。

『こちら側』を人間界。
『あちら側』を精霊界とか神仙界とかいわれるものとして、我々はその存在だけは認識していたはずである。ただ、人は自由に行き来することができなかったため、長い年月の中で忘れ去られていってしまったのだろう。次元を越えるには、精神的な特殊能力が必要だったからだ。
『あちら側』の住人は、こちらの人間よりも少しは行き来が自由にできるようである。それは、こちらの人間が物質文明に依存するあまり、自分の本来持っていた力の幾つかを忘れてしまったのに対し、『あちら側』の住人はあくまでも精神的な存在なので、四次元的な法則に従う次元移動であっても、やり方を知っているためだと言われている。

それでも出入口は限られている。
斎木学園とか、この長老の木の周りや、霊山として知られるいくつかの山、外国で言えばバミューダ海域なんかが『あちら側』との境目が薄い代表的な場所だが、そういった所を選んで、次元の壁をすり抜けて来るらしい。
逆に、『こちら側』から『あちら側』に行ける存在も、限られてはいるものの皆無ではない。昔から、仙人とか魔界などと交流を持った人々の話は世界中に残っている。
その中には、間違って落っこちてしまったという例もある。いわゆる神隠しというヤツである。

余談だが、神隠しには子供が多い。
子供はまだ物質文明に毒されておらず、精神世界に対して抵抗がないため、何かの拍子に次元の隙間をくぐり抜けてしまうのではないだろうか。
大人であれば、絶対越えられない物として認識している次元の壁も、子供には理解の外であるからだ。

純粋な心で、目に見えない大いなるものを捉える事。

それが『あちら側』の存在を理解する第一歩である。

しかしそれは、現代人が忘れつつあることの一つだといえる。
いや、忘れつつあるからこそ再認識するべきなのだ。表裏の関係であることから、『こちら側』と『あちら側』が密接に関わっていることは確かなのだから。
『こちら側』で自然破壊をすれば、『あちら側』にも重大な影響があり、また『あちら側』で何か大きなトラブルが起これば、『こちら側』にも何らかの天変地異が発生する。
我々人間が目にしている以上の事が、実際には巻き起こっている

のである。

「アニミズムって知ってるか？」

不意に乱丸が、弥生と和美に聞く。

「ええと……、確か身の回りのものには、全て霊が住んでいるとかいう思想でしたっけ？」

和美が記憶の片隅から知識を引っ張りだす。

「そうだ、物知りだなお嬢ちゃん」

にっ、と笑って乱丸は説明を再開した。

――――アニミズム。

自然崇拝主義とか言われている思想である。

つまり、人間には身体を生かしている霊魂があり、同じく動物にも植物にもさらには無生物にも……要するに自然現象一般に霊魂や精霊が作用していると考える思想である。

古代の人は、皆この思想を信じていた。それが現代では、自然を構成するものは『物質』のみという見方しかしないようになってしまった。

火が赤々と燃えさかること、木を木として生かすもの、動物を動物たらしめるもの、空を青色に染めるもの、太陽が東から西へ動くこと。それら全てに作用する精霊たちの存在を、意図的に無視しているのである。

だから、人間は自然界の中で孤立し、孤独な存在になりつつあると言える。

「人は自分で自分の首を締めてるんだ、精霊どもと共存しなけりゃ自然界から逆襲食らったって当然なんだぜ。やつらにとっちゃ死活

問題だからなあ」
「精霊……」
弥生と和美は、おとぎ話に夢中になった幼い頃の目つきに戻っている。ただし、今乱丸が語ったのは、夢物語ではない。
「判ったか？　この娘は、いわゆる『夏の化身』だ。まだ疑ってんなら触ってみろよ」
「ん……」
半信半疑の弥生が、勧められるまま少女の方へ一歩踏み出した。
すると、目に見えて少女が身を強張らせた。
途端に、周りのチョウが弥生に向かってまとわりついてくる。
「きゃー！　ごめんごめん、何にもしないわよ。きゃー！」
大声を上げながら、弥生はじたばた逃げ回った。
その時、
「その娘に、手を出さないで下さい！」
もがいている所へ声がかけられ、弥生は真っ青になった。
「しゃ、しゃべったあ！」
「落ち着けよ」
冷静な声で、乱丸がたしなめる。
すると、長老の木の太い幹の向こう側――――死角になっている部分――――から、夏見がふらりと姿を現した。
「うわあ、で、出たあ！」
聞いた方がびっくりするような声で、弥生がサイレンのようにわめき散らす。
「驚かせてすみません、でもお願いします、その娘をこれ以上怯えさせないであげて下さい」

落ち葉の上を音もなく歩き、少女をかばうように間に立つ、片手には黒いスーツケースを持っている。
「いちいち、色々な事に驚くんじゃねえ！　アホ！」
乱丸はしかめっ面で弥生に言い、耳に指を突っ込んだまま夏見の顔を見た。
「よう、早かったなあ」
そんな乱丸に、夏見は礼儀正しく頭を下げる。
「乱丸さん、ありがとうございました。まさかこんな短時間で彼女を見つけ出していただけるとは……失礼ながら私、あなたの能力を過小評価していたようですね。このとおり、お詫びします」
そう言って、深く頭を下げる。
対照的に、乱丸は後ろへふんぞり返っていった。
「いやあ、このオレ様の巨大な実力にかかれば、人探しなんぞ軽いもんよ、わっはっはっ」
極めて偶然に近かったこの待ち伏せを、乱丸は恥ずかしげもなく『実力』と言ってのけた。
夏見は木のうろに置いてある箱を、ちらりと見て、
「なるほど、あの箱を使ったのですか……すると、中にはもしかして」
うっとりと、何かの香りでも楽しむように夏見は目を閉じる。
「……いい思い出です。お嬢さん方のものですか？　『青虫』が引き寄せられてしまったのも、よく判りますよ」
そしてこの場所も、と夏見は周囲の様子を見回した。
「ああ、しかもこの『長老の木』の周りは『あちら側』との境目が薄くなってるからな、あっちの空気の匂いが、ぷんぷんするはずだぜ」

「現に、私もそこを通り抜けてきた訳ですからね。なるほど、なるほど、『こちら側』に来ている『あちら側』の住人なら、思わず引きつけられてしまう仕掛けです。いいアイディアでしたね」
そう誉められて、また乱丸は「いや、そんな、はっはっはっ」とふんぞり返る。
ほ、と夏見、ため息をつき、

「とにかくこれで、彼女も自分の使命を全うすることができます」
「じゃ、オレはもうお役御免だな？」
ちら、とスーツケースに視線を落として、
「もう、あんたが食らわす罰にびびらずに、マクラを高くして眠れるって訳だ」
さっきまで安らかに昼寝をしていたクセに、ぬけぬけとほざく。

夏見はこくりと頷き、愛しげな瞳で少女を見た。
無表情だが、大きな瞳が夏見を見返している。パートナーであるはずの夏見を前にしても、少女の表情には動きが見られなかった。
「可哀相に、変身を始めようとした所でトラブルに巻き込まれてしまったのですね。あなたのような存在が、『こちら側』でよく今までご無事で……」
夏見の目には、うっすらと涙がにじんでいた。

「おじさん、このコ口が不自由な上、記憶喪失みたいだけど」
弥生が聞く。
目をハンカチで押さえながら、夏見は振り向いた。

「ああ、多分思いがけないショックを受けたことにより、一時的に記憶が飛んでしまったのでしょう、それは『あちら側』へ帰ればすぐ治ると思います。言葉の方は……彼女には、必要がないものなんですよ」

「必要がない？」
弥生は眉をひそめた。
「『こちら側』の人の感覚では、理解しにくいでしょうか。こんなトラブルが生じなければ、彼女が一生のうちに接する他人は私だけ……しかも変身の瞬間だけちらっと顔を合わせるだけなのですよ。ですから、言葉でもって誰かに意思を伝える必要はないのです。何のために生まれ、やるべき事は何なのかといった事は本能で知っていますしね」
夏見という、異世界の住人が語る異世界の常識。
この黒服の紳士と、幻想的な雰囲気をまとってたたずむ白い服の少女。二人の姿を弥生は交互に見比べて、段々頭の中で実感が湧いてきた。
にやにやしながら、乱丸が言った。
「どうだ弥生、今目の前にある現実が、お前の期待していた『面白い事』ってヤツだぜ？」
夏見、白い少女、群れ飛ぶ青いチョウたち……。
それこそ、おとぎ話か神話の中でしか語られないようなものが、今現実のものとして、目の前に存在している。
「感想は？」
また、乱丸が聞く。
もごもごと、弥生が口の中で何かつぶやいた。
「あん？」
「……すてきよ」
目を大きく見開いて、弥生は言った。

「すてきよ、すてきだわ！　ジャーナリストとして、あたし、何て体験をしているのかしら？　私たち、本物の精霊を目の前にしているのよ！」
きゃーっ！　と叫んで、隣にいた和美の手を握る。和美の顔も、赤く上気していた。

「あたしたち、『夏』そのものに出会ってしまったんですね！」
高鳴る心臓を押さえ込むように、拳を胸の前でぎゅっと握りこんだ。きゃあきゃあと、かん高いソプラノで少女二人は騒ぎだした。
慌てて手を振って夏見が鎮める。

「しーっ！　すみません、彼女が驚いています。あまりショックを与えると、またパニックを起こしてどこかへ行ってしまうかもしれませんから、静かにして下さい、お願いします」
「あ、ごめんなさい」
弥生と和美、慌てて手で口を押さえる。
夏見は三人に、改めて深々と礼をした。

「本当にありがとうございました。後は一刻も早く、彼女を本来いるべき場所に連れていってあげたいと思いますので、これで失礼させていただきます」
「じゃ、その仕事が終わったら、また遊びに来てくださいね」
何気なく和美が別れのあいさつをすると、夏見は複雑な表情になった。
和美の肩に、乱丸が手を乗せる。
「お嬢ちゃん、こいつらは『あちら側』の存在だ。これっきり、二度と会うことはねえよ」

「え……？」
哀しげな顔になって、和美は乱丸を見上げた。

「別れを惜しむより、出会えた事を幸運と受け止めてください」
夏見が静かに微笑む。

「それじゃ」
無言の少女を優しく導いて、長老の木の向こう側の死角……『こちら側』と『あちら側』の曖昧な境へ身を滑り込ませようと、一歩足を踏み出して、夏見はちらり、とこちらを見た。

「ん？　忘れモンかよ？」
そう聞いた乱丸の目が、何かに気づいて不意につり上がった。

「弥生、相沢っ！　オレの後ろまで退がれっ！」
「え？」
「何よ、急に大声出して」
「あっ！」

弥生と和美は見た。こちらをじっと見つめる夏見の口から、一筋の血がこぼれ落ちるのを。

よく見ると、冗談のように夏見の胸から背中にかけて、細い刃物が突き抜けているのだった。

一体、何が目の前で起こったのか？

すると、夏見が足を踏み入れようとした場所……木の向こう側から、ぬっと凶々しいものが姿を現した。

「やれやれ、ようやく見つけることができたわ」
きんきん響く耳障りな声で、『それ』はつぶやいた。

「まったく、このアタシの手をあんまり煩わせないで頂戴！　ここで会ったが百年目、おとなしくコレクションの一部になりなさい」
大きく折れ曲がったワシのくちばしのような鼻、三日月を横にしたようにぱっくり割れた口、黒メガネに縦ロールのヘアスタイル、黒に近い色をした赤マント……。
きんきん声でわめく『それ』は、そういう姿をしていた。

一見、人間に近い恰好だが、身にまとっているオーラが違う。
こいつも『あちら側』の住人だ。

「何だ、てめえ！？」
乱丸が吼える。

突然現れた怪人は、うふうふと気味悪い笑い声を上げて、
「マッド・バロン……」
と、短く自己紹介をした。

胸を貫かれたままの夏見が、目を見開く。
「ばかな、いくら『貴族』でも彼女に手を出すことは許されませんよ」
唇のはしから血を流しつつ、弱々しい声で夏見は言った。
それを聞いて、うふうふと怪人は身をくねらせる。

「あら、誰が許さないっていうのかしら？　アタシたち貴族はね、それぞれ高尚な楽しみを持ってるのよ、これは社交界の常識でね、平民にそれを邪魔する権利はないわ。アタシの場合は美しいものや珍しいものを収集することが趣味ってわけ。で、今回目をつけたのが、この娘なのよ。だって惜しいと思わない？　こんなにキレイなものが、あっさり、はかなく、消えていくのを指をくわえて見てるだけなんて……」

マッドバロン……『狂男爵』と名乗った怪人は、にいい、と唇を吊り上げながら、夏見に突き刺さっているサーベルをぐりっとねじった。苦痛に、夏見が顔を歪める。

「あんたたちはそれが仕事なんだってねえ、カカシのように突っ立って、ただ見てるだけ」

「私の仕事は……彼女を見守ることです」

命を懸けている仕事を侮辱されて、夏見の目がくわっ、と見開かれる。

「あら、そう」

興味無さそうに言うと、オカマ言葉を使う怪人は、夏見の胸からサーベルを抜き去った。

ぶしゅっ、と飛び散る血を見て、和美が悲鳴を上げた。

よろよろと後ろへ下がり、夏見は少女をかばうようにして立つ。

その少女は、目の前で起こっている事が理解できないのか、無表情のままだった。

「おや、邪魔をするつもり？　アタシも荒っぽい真似はしたくないんだけどねえ、美しくないから」

うふうふと言いながら、狂男爵は指をパチンと鳴らした。すると木の影から、また何かが姿を現した。

「ひ……」

それを目にした和美が、身を硬直させた。

のそり、と出てきたのは、虎に良く似たケダモノだったのだ。

『あちら側』の野獣だろうか、血に飢えた光でぎらついた赤い目、ぞろりと伸びたサメのような牙、一本一本が生きているように蠢く

体毛、そしてトゲだらけの尾……『こちら側』では見たこともない獣であった。獲物を目の前にして、ヨダレを垂らして猛っている。
愛しげに、狂男爵はその頭を撫でた。
「おう、いい子ねえ……よくお聞き、あの黒服はアタシが欲しいものを手に入れるのを邪魔してるのさ、お前、何とかしてくれないかしら？」
低い唸り声を上げて、ケダモノはご主人の命令を理解したらしかった。じろり、と夏見を睨み上げる。
むっと、その全身から生臭い獣臭がただよって来た。
ぐう、とケダモノの唇がめくれ上がり、太い牙が覗く。その口からとてつもなく長い舌が垂れ下がり、滴るヨダレを舐め上げた。
喜んでいる。
こいつは、夏見を殺せる事がうれしくてたまらないらしかった。
文字通り血に飢えた化け物だ。
その気配が夏見にも伝わったのか、この紳士はものすごい顔つきになっていた。
「私は『夏』を守る者、その使命のためなら命など惜しくはありません」
戦うつもりのようだ。しかし、武器も持たないのに、こんな巨大な虎もどきを相手にどうするつもりか。
彼が手にしているのは、いつも離さず持ち歩いているスーツケースだけである。
「やべえ、お前らもっと離れて何かにつかまれ！」

はっとして、乱丸は弥生と和美に叫んでいた。

「な、何？」

次々と起こる異世界の出来事に、半ばパニックになりながらも、二人はとっさに近くの木にしがみついた。

ほとんど同時に、夏見がスーツケースを開く。

すると、その中からじわりと現れたのは『闇』であった。

「おう……『永遠の牢獄』ね！」

狂男爵が後退った。夏見のスーツケースから、水の中にこぼした墨汁のように黒々とした『闇』が溢れてくる。

シャアアアアアッ！

ケダモノが吠えた。両目を赤くぎらつかせ、巨体が夏見に向かって踊りかかっていく。

「きゃっ！」

「危ないっ」

二人の少女が、思わず叫ぶ。

虎もどきの巨大な前足ならば、夏見の頭ぐらい一撃で粉砕してしまうだろう。

その瞬間を想像して、彼女らは身を硬直させた。

しかし、乱丸は見た。巨獣の体が、空中で停止するのを。

鋭利な爪を振るって身をよじるその巨体をつかみとったのは、何とスーツケースから滲みだす『闇』であった。

ごおおおっ！

その得体の知れない束縛から逃れようと、虎もどきはしきりに暴れるが、何せ捕らえているのは『闇』である。いかに鋭い爪や牙でも、役に立たなかった。
じわりと、意志を持つかのように『闇』がその触手を伸ばし、虎もどきを包んでいく。
シャーッ、シャーッ、と苦しげに絶叫をあげ続けるケダモノは、そのまま『闇』にからめとられ、あっという間にスーツケースの中に飲み込まれていった。
ばちん、と音をさせて夏見はカバンを閉じた。

「すげえ」
乱丸がうめく。

狂男爵は今のを『永遠の牢獄』と言った。だとすると、ヘタをすれば、自分にかけられていた罰である。その恐ろしい威力に、ぶるぶるっと彼は身を震わせた。
虎もどきは、あのままどこか別の空間に放り込まれ、二度と帰ってくることはないのだろう。
唇のはしから血を滴らせながら、夏見はため息をついた。

「見たでしょう、男爵。私はこんな事、本当はしたくないのです。彼女を守るために仕方なくやっているだけであって……ここで争っても何のメリットもないでしょう？　どうか、このまま見逃してもらえないでしょうか？」

夏見の言葉に、狂男爵は指先で縦ロールの髪をいじりながら、
「判ったわ」
とつぶやいた。

「判っていただけて幸いです」
胸を押さえつつ、にこっ、と夏見が笑みを浮かべる。
「では、私たちは急いでますので」
少女の手を引いて歩きだそうとした夏見の背中に、
「あらやだ、カン違いしないで頂戴。たかがペットを一匹始末したからって少しも怖くなんかないのよ」
うふうふ、と狂男爵は例の気味悪い笑みを浮かべている。
「まだ、やるつもりですか」
疲れたような表情で、夏見は振り返りスーツケースを構えた。
「アタシがさっき判ったって言ったのは、その小さなブラックホールじゃ、とてもアタシを倒すことなどできないと確信したのよ。貴族であるアタシには、つよーいボディガードがいるんだ・か・ら」
そのセリフのとおり、またもやあり得ない世界から姿を現した者がいる。
黒光りする西洋の甲冑に全身を包んだ、一人の騎士であった。
右手に幅広の大剣、左手には全身がほとんど隠れてしまいそうな巨大な盾を持っている、重武装の黒騎士であった。
「よく来てくれたわね、アタシのナイト……今回もアタシを助けて頂戴、お前のそのよく切れる剣で、あのくそったれなスーツケースをぶった切るのよ！」
きんきん声で、狂男爵はわめく。
巨大な黒騎士は、無言で夏見の方へ向き直った。
「何を連れてきても同じです。このスーツケースの有るかぎり、私は彼女を守り抜きます」
夏見が再びスーツケースを開いた。

先ほどと同じ、触れたものを全て飲み込んでしまう『闇』の触手が、じわりと広がっていく。
がちゃり、と重々しい金属音をさせて、黒騎士が身構える。
前に突き出した盾といわず、身体といわず、『闇』がからみついていく。つかみどころが無いクセに、しっかり獲物を捕らえて離さない『闇』が。
虎もどきの二の舞だ、この触手からは逃れようがない。成す術もなく、すぐにまたスーツケースに引きずり込まれてしまうだろう。
そう、思われた。

しかし、今度は違った。
黒騎士が右手の剣を振るったのだ。ぶ厚い刃は、切るというよりも殴りつける武器のイメージを与えるが、何とその一振りで見事に『闇』が断ち切られていた。
するりと、黒騎士は『闇』の呪縛から逃れていた。

「ばかな！」
驚きに、夏見が叫ぶ。
その間に、黒い突風と化して黒騎士が彼に駆け寄っていた。
「うぬ」
スーツケースを振って、『闇』を撒き散らかす。バケツで墨をぶちまけたに等しかったが、その攻撃も黒騎士の剣に切り裂かれていた。
巨体からは信じがたいスピードで動き、あっと言う間に夏見の頭上に大剣を振り上げている。
夏見の目が見開かれ、自分の頭部に巨大な刃が降ってくるのを見ていた。

「危ない！」
間一髪、助けに飛び込んできた弥生の木刀が、剣を振り下ろす黒騎士の手首を下からすくい上げる。
倒れてくる電柱を受け止めたのに等しい衝撃だった。
がつん、と音をたてて木刀は弾かれてしまった。しかし、その隙に乱丸が夏見の身体を抱えて、横っ飛びに逃げだしていた。

空を切った刃が、半ばまで地面にめりこんでいる。

痺れる手首を押さえて、弥生も慌てて遠くへ飛びすさっていた。
彼女は直感した。
このヨロイ男は、今まで相手にしてきたどんな敵とも桁が違う。魔界から来た化け物なのだということを。
黒騎士は、剣を地面から抜きとり、無言で構え直した。
黒光りする甲冑に包まれた全身から伝わる、凄まじいまでのプレッシャー。
正面に立つだけで、実際に圧力を感じる程である。

「あらあら、よく逃げたわね。でもムダよ、ホラ」
うふうふ、と狂男爵が尖った爪の生えた指で夏見を指し示す。
その手に握られたスーツケースがぱっくり割れ、じわじわ『闇』が滲み出てきている。

「うわ、やべえっ！」
乱丸が青くなった。
「おい、夏見ィ！　中身がこぼれてやがるぜ、何とかしろよ！」
胸から血を流して苦しんでいる夏見を、お構いなしにがくがく揺さぶる。

「ばか、何てことするの！」

それを見て弥生が叫ぶ。

「うるせえ、さっきの虎もどきみてえに、ここいらのモン全て飲み込まれちまうぞ！」

じわじわ、アメーバのように『闇』は広がりつつある。

「困りました、ケースが壊れることなんてあり得ませんので、私にもどうしたらいいのか……」

それほどまでに、黒騎士の剣技が凄まじかったという事なのだろうが、とてもそんな事に感心している場合ではない。

足元の草や石ころを取り込み始めたので、乱丸は夏見の手から、スーツケースを蹴り飛ばした。

黒騎士を飛び越え、狂男爵の頭上へ。

いちかばちか、こぼれだした『闇』の中に、狂男爵を飲み込ませようと企んだのだ。

親玉さえなんとかすれば、こういうケンカは勝ったも同然だ。凄まじい戦闘能力を黒騎士が持っていたとしても、所詮手下にすぎない。

「くらえ！」

「ぎええっ！」

面食らって、狂男爵が悲鳴を上げる。やったか？

乱丸は牙を剥いた。

「ダメだ」

狂男爵もまた、魔界の化け物であったのだ。

ブフウ、と唇をすぼめて息を吹きつけると、それが突風になり、ケースをはじき飛ばしてしまったのだ。

ごろんと地面に落ち、また『闇』を吐き出し続ける。

「イヤねえ、荒っぽいマネは嫌いだって言ったでしょ？」

くねくねと身を揺らし、邪悪に笑った。

「それにしても手間をかけさせてくれるわねえ、もういい加減、ケリをつけましょうよ」

頼みの綱のスーツケースを無くし、歯がみする夏見と乱丸に、再度黒騎士が襲いかかる。

夏見を抱えている乱丸は、身をかわすのが精一杯だった。

「ちいいっ」

その間に、狂男爵が『夏』の首に手をかけるのを目にしても、とても助けにいく状況ではなかった。

「待ちなさい、その娘から手を放しなさい」

強引に乱丸の腕の中から脱出し、夏見は駆け寄ろうとしたので、その無防備な背中に黒騎士の大剣が振り下ろされる。

ざっくり断ち割られるその寸前、

「やめて！」

和美が叫んでいた。その髪が青い光を放ち、強力なサイコキネシスによって黒騎士の巨体をはじき飛ばす。

がしゃがしゃあんなどと、すごい音をさせて黒騎士はひっくり返っていた。

かつて、学園を襲った戦車すら叩き潰した和美の超能力である。

いくら魔界の化け物とはいえ、立ち上がれまい。

これには、狂男爵も素直に驚いたようだった。

「アタシのナイトを吹っ飛ばすなんて……『こちら側』にも、まだそんな力を使う者がいるのねえ」
面白そうに、和美の顔をじろじろながめる。
特に、ＥＳＰを使う時に輝く、彼女の青い髪の毛を。

「キレイね……」
べろり、と尖った舌で唇を舐めあげた。

「でも、まあいいわ、今回はこの娘が目的だったしね。これでまた一つ、素晴らしい品がコレクションに加わるわ」
「ま、待ってください！」
夏見が叫ぶ。すでに狂男爵は捕らえた少女とともに、輪郭が曖昧になっていた。

「安心しなさい、別に彼女を殺そうというのではないのよ。ただ、この美しさを『保存』するだけ。……素晴らしいことじゃない？朽ちる事のない、永遠の美を彼女は手に入れる事になるのだから」
うふ、うふ、うふ、という気色の悪い笑い声を残して、狂男爵の姿は消えてしまった。
『夏』はその間、遂に抵抗もせず、助けも求めず、無表情のまま人形のようにさらわれてしまったのだった。

『あちら側』へ。

「うわあああああああっ！」
その分、夏見が叫び声をあげた。

『夏』を見守るべき自分が、成す術もなく目の前でさらわれてしまったのだ。悔やんでも悔やみきれなかった。
黒騎士に向き直る。

「おのれえっ！」
なりふり構わず、素手で殴りかかっていく。
和美のＥＳＰで、まだ寝ころがっている黒騎士に対して、拳を振り上げる。
がん！　と一発殴っただけで、拳の皮がめくれ血が滲んだ。

「生きてるだけじゃ、ダメなんだ！」
かまわず殴る。殴りつづける。

「永遠に生きたって、自分の成すべき事を果たさなければ、空っぽじゃないですか。その生には価値がないじゃないですか、輝きもないじゃないですか」
素手で殴られても、黒騎士は少しも効いていない。こびりついた赤い血は、全て夏見のものだ。

「生まれたことが報われるように、命を輝かすことができるのは、自分自身の力だけなのに……ようやく手に入れたたった一度しかないチャンスを、あなた達は彼女から奪おうというのですか！」
殴り疲れて、夏見が大きく息をついた時、物凄いパワーで黒騎士は立ち上がった。

「ぐっ」
はずみで、夏見は地面に叩きつけられる。
黒縁メガネが外れて転がったので、拾おうとしたその瞬間、背中から地面まで、大剣が一気に夏見を貫いていた。
ごぼっ、と口から血を吐き、夏見は白目を剥いた。
「バカヤロウッ！」

鬼のような表情で、乱丸が逆上した。黒騎士に突進していく。
「死にやがれ！」
叫んだ乱丸の掌が、甲冑の腹の部分に吸いついた。
『神威』だ！
フン！
手加減抜きの、全身全霊を込めた必殺の一撃を放っていた。
たとえ牛であっても、この一発で即死させる力を持っている程の爆発力であった。
黒騎士の動きが、ぴたりと止まる。
「やった！」
弥生が歓声をあげた。この技のすごさは、良く知っている。
しかし――――、
黒騎士は倒れもせずに、夏見に突き刺した剣を放して、そのまま乱丸の横っツラを殴り飛ばした。
その桁外れのパワーに、乱丸の身体はトラックにでもはねられたように吹き飛び、長老の木にぶち当たって、根元に崩れ落ちた。
「乱丸！」
「乱丸さん！」
弥生たちは固まってしまった。
もう、どうにもできない。この魔界の騎士には、どんな攻撃も通用しないのだ。
黒騎士は、夏見の背中を貫いた剣を抜いて、ゆっくり弥生と和美に向き直った。

「ひ……」
蛇ににらまれたカエルのようであった。
これが、魔界の使者の力というものなのだろうか。
しかも、足元にはこぼれた『闇』が、だいぶその量を増してきているのに気づいた。
これも大問題だ。このままこぼれ続けたら、どうなってしまうのだろうか。
それを想像し、ぞっ、と身を震わせた時――――、
「二人とも、大丈夫ですか？」
落ち着いた声が、どこからか聞こえてきた。
はっとして、弥生と和美は顔を上げる。
「京平！」
美しい顔をした魔法使いが、そこに立っていた。

☆　☆　☆

端正な顔をしかめて、京平はその場を見回した。
血を流す夏見。
木の根元でのびている乱丸。
怯えた弥生と和美。
無言で、ぬうっと立つ黒騎士。
そして、こうしている間にもスーツケースからじわじわ滲み出てくる『闇』。
「ひどい有り様ですね」
「……来たのかよ、京平」
その時、うーんと呻いて、頭を振りながら乱丸が意識を取り戻し

た。

「ええ、あなた方だけで何とかできると思って、手を出すつもりは無かったのですけどね、爵位を持つ『あちら側』の住人が相手ではちょっと分が悪いでしょう」

言いながら、京平はポケットからハンカチを取り出した。

「特別に、ボクの力を貸してあげますよ」

ひら、とハンカチを振ると、何も無かった空間に忽然と白銀の光を放つ剣が現れた。

それを右手で握り、左手は腰に当てて、京平は優雅なフェンシングの構えをとった。

すっ、と鋭い切っ先を、黒騎士の喉元に向ける。

「生徒会長として、我が学園の生徒が傷つけられるのを黙って見ている訳にはいきませんしね」

細められた彼の瞳に、魔性の光が宿る。

それに反応したのか、黒騎士も金属をきしらせる音をたてながら身構えた。

「いけえ、京平！　やっちまえ」

座り込んだまま乱丸がかけ声をかける。

それを合図に、黒騎士の大剣がうなった。

でかい岩の塊も、あっさり真っ二つにできそうなパワーを秘めた一撃が、京平の真上から降ってくる。

対する京平の剣は、まるでつまようじのように頼り無く思えた。

「あっ！」

しかし、二人が交差した瞬間、弥生は思わず声をあげていた。

京平のか細い剣が、見事に大剣の攻撃をさばいたのだ。

キン！　と、耳が痛くなる程高い音がして、京平の刃は黒騎士の脇腹を切り裂いていた。
それを見て、今度は和美が声をあげる。
「あれ？　空っぽ……」
何と、黒騎士の甲冑の隙間からは、何も見えない、がらんどうだったのだ。
ぱちり、と乱丸が指を鳴らす。
「なるほど、おかしいと思ったぜ。いくら重装備してても神威が通り抜けねえはずがねえからな」
『神威』は内部に衝撃を与える技だ、しかし、肝心の中身がなければ通じるはずもない。
「愚かなマリオネット……お前の主人は家に帰ったのですよ。君も一緒に帰ったらいかがですか？」
京平が、白銀のきらめきをたたえた切っ先を黒騎士に向けると、何か感じるものがあったのか、じりじりと後退った。
「あ、待て京平、そいつを逃がすな！」
慌てて黒騎士の後を追おうとした乱丸だったが、たたらを踏んで立ち止まった。
「わわっ」
黒騎士と彼らの間に、スーツケースからこぼれた『闇』が充満しているのである。
「やべえ……手がつけられねえぞ」
青くなって乱丸は飛びすさった。大量の『闇』が、そこら中を這いずり始め、地面の草や石っころを取り込みつつあるのだ。

乱丸は弥生と和美の方を、真剣な表情で見た。

「こういう言葉を知ってるか？」

「何よ？」

“後は野となれ山となれ”」

「はったおすわよ、このバカ！」

きいっ、と弥生が目をつり上げる。

「そんな事言ってる場合じゃないですよっ、夏見さんが！」

「あっ、いけない！」

見ると、地面に倒れている夏見の全身が、『闇』に取り込まれそうだ。

「くそっ……ととっ」

夏見の側まで一足飛びに乱丸がジャンプしたが、抱え上げる寸前足の裏がずぶりと沈み込んだ。

見ると、『闇』がタールのように足首までからんできていた。

引いても、抜けない。

「うわわわわっ、京平！　助けてくれえ！」

乱丸が情けない悲鳴を上げると、京平はカッ、と目を見開いて剣を足元に突き刺した。

そして、両手の掌を胸の前で向かい合わせ、何事か異国の言葉をつぶやき始める。

「フセルニ、アルタス、ロニシュ、ダミシュ……」

低い低い声で詠唱されるそれは、魔法の呪文のようであった。

一度目を閉じ、そして再びその目が開かれた時、両目は紅に染まっていた。

「……アドニエル、バリエル！」
京平は呪文を唱え終えると、地面に刺した剣を抜き、横殴りに一振りした。
すると、
ごお！　とうなりを上げて、一陣の風が渦を巻いた。
小さく悲鳴を上げて、和美が髪とスカートを押さえる。
見よ！　その風によって、全てを飲み込む『闇』が、霧のように散り散りになり、薄れていってしまったではないか。
それを確認して、京平はハンカチを空へ投げた。
ふわり、と意志があるかのように宙を舞い、それはスーツケースに被さって、これ以上物騒な『闇』を吐き出すのを封じ込めた。
「ふええ、ヤバかったなあ」
夏見を抱えたまま、乱丸が大きくため息をつく。
「もう少しで、取り込まれちまうところだったぜ」
ジーンズの膝のところまで、黒い染みがついていた。手で払うとぱらぱらと『闇』の残りカスがはげ落ち、消えていく。
「ちょっと、あんたはどっちでもいいけど、その人は大丈夫？」
弥生が聞いた。
「何て言い方しやがる。それに、このおっさん二度も剣で刺されたんだぞ、大丈夫な訳ねえだろうが」
ぐわっ、と乱丸牙を剥く。と、腕の中の夏見が、「うーん」と唸った。まだ、生きてる！
「乱丸君、『あちら側』の住人は精神生命体です、物理的に肉体を

傷つけても、なかなか死にはしませんよ」
乱れた前髪を指で整えながら、京平が説明する。
「そうか、じゃ、このおっさん助かるんだな？」
言うなり、乱丸は夏見の身体を地面へ放り投げた。
「……ッ！」
「ばばばか！　なんて事するのよケガ人に！」
弥生が目を見開く。
「うるせえ、男なんかいつまでも抱いてられっか！　それより」
ばっ、と腰を落として周りを見回した。
「おい、ヨロイ野郎がいねえぞ！」
そういえば、今の騒ぎに紛れてあの巨体が消え去っていた。
「そうですね、多分家に帰ったのでしょう」
落ち着いた声で、京平が言う。
「そうか、じゃ一安心ね」
ほっとして、弥生は肩の力を抜いた。和美も気が抜けたのか、青い髪の色が、元に戻っていく。
とてつもない敵だった。
京平が来てくれなかったら、皆殺しになっていたかもしれない。
立ち去ってくれて、本当に助かった。
「アホか！　あいつを逃がしちまったら、『夏』を助ける手がかりがまるっきり無くなっちまうじゃねえかよ！」
かーっ、と叫んで、乱丸は頭を掻きむしった。

「あ……」
「しまった」
和美と弥生は顔を見合わせた。
ぎらり、と乱丸の目がつり上がる。
「まったく、これだけコケにされたのは初めてだぜ。ボコボコ殴られた上に、獲物まで横取りされちまった」
ぎらぎらした目で夏見を見下ろす。
その口が弱々しく動いていた。
“助けなければ……”
意識のない状態でも、まだうわごとでつぶやいているのだ。
「おっさん……」
地面に片膝をついて、乱丸は夏見に語りかける。
「安心しろ、とは言わねえ。けどな、あいつらはオレの獲物を、目の前で奪っていきやがった。オレもプロだ、泣き寝入りは絶対にしねえ。怪盗としてのプライドをかけて、あの娘を絶対に盗み出してやる」
はっきりと、乱丸はリベンジを誓う。
「よく言いました、君の口からそのセリフが出れば、もう大丈夫ですね。何であっても、盗めないものはないでしょう」
京平が笑みを浮かべる。
「でも、手がかりが無いって……」
不安そうに和美が言う。
乱丸は京平を見た。

「もう断らせねえぜ京平、何とかして、あのくそったれヤロウの居場所を“視ろ”！」
頼むというよりは脅す口調で言うので、京平は苦笑した。
「タロットでも水晶玉でも何でもいい。てめえの“魔法”ってヤツをちったあ役立ててみやがれ！」

今さっき、どうにも手に負えなかった『闇』を、京平の魔力であっさり封じ込めてもらった事など、すっかり忘れているらしい。

幼い弟を見つめるように、京平は優しい目をして、「はいはい」と答えた。
右手の人指し指をこめかみに当てて、少し考え込む。それだけしか動きは見せず、何の魔力の発動も感じられなかったが、不意に京平は伏せていた目を上げた。

和美の顔を見る。

その美しすぎる瞳で真っ直ぐ見つめられて、ついどぎまぎしてしまう。

「な、何でしょう？」
「相沢君、ポケットの中にあるものは？」
「え？」
言われて慌ててポケットを探ると、一枚の紙切れが入っていた。
美術館の入場券の半券だ、出し忘れていたらしい。
「ははあ、なるほど」
それを見て、なにやらうなずく京平に、
「何よ、なにか判ったの？」
と、弥生が尋ねる。

京平はうなずいて、乱丸の顔を見た。

「ありましたよ、手がかりが」

「おう」

思わず、乱丸は身を乗り出して京平に迫った。

「早く教えろよ！」

「手がかりは……」

京平は、和美のつまんだ紙片を指さしてつぶやいた。

「グリューネヴァルト」

と。

ACT・6『グリューネヴァルト』

ACT・6

それは、おとぎ話のようなものだった。

昔のことだ。

一人の天才的な画家がいた。彼は描くことが大好きだった。

気力の充実している時は、それこそ食事もとらず、眠ることもせずに絵を描いていた。

筆を止めるのは、作品が完成した時か力尽きて倒れてしまった時のどちらか、という異常な執念をもって、彼はキャンバスに向かっていたという。

その様子は、あたかも己の魂を削り取り、それを絵筆に乗せて一枚の絵の中に塗り込めていくような、鬼気迫るものらしかった。

「画家は、描くためにあるのだ」

それが、彼の口グセである。そして、珍しく物思いにふけっている時でさえ、

「死ぬまでに、あと何枚描けるのだろうか 」

そのような事を気にしていたという。

彼にとっては、描き続ける事こそが生きている意味であるとはっきりとらえているようだった。

もし、彼から筆を持つ右手を奪ったとしても残った左手で、それももがれたなら、今度は口にくわえて筆を走らせるに違いない。

描くことは、彼のすべてだった。

作品が世間に認められ名声を得るとか、高値で売れるようになるとか、そういった事には、彼は全く興味を覚えなかった。その証拠に、彼は作品に自分のサインを残さないのである。

「自分の名を示す必要はない。本当の芸術品とは、そのもの自体が持つ輝きに、万人が心打たれるものなのだ」

彼はそう主張して、その理想を具現化しようと、何枚も何枚も描いていったのである。

と、そうしていくうちに、やがて彼の作品の質が段々と変わっていった。

その変化を一言で言うなら、彼の目は『闇』を見つめ始めたとでもいうのだろう。

どろどろと、身の内に渦巻く情念を絵の中に塗り込めていく作風は以前からであったが、それが、より執念深くなった気がするのである。

作品の中に、暗い、影が出て来た。

折しも、当時はキリスト教会の力が絶大な勢力を誇った時代であった。彼は、その精密な画力を見込まれて、ある時、祭壇画を描くように教会からの依頼を受けた。

この場合、教会からの依頼というのは、ある意味命令である。

“無名の画家にすぎないお前を、名誉ある聖画を描く仕事に取り立ててやったのだ。ありがたく思い、全力を尽くせ”

はっきり言葉にはしなくとも、そのような不遜な調子が込められているのだ。彼は、それを教会からの挑戦と受け取った。

彼は受けて立った。

そして、画家として最高の作品を仕上げる事で、彼らの挑戦に打ち勝とうとしたのである。

己の技術に絶大なる自信と誇りを持って、制作に没頭した。

完成した聖檀画を見て彼は、我ながらいい出来ばえだと、珍しく満足した。

確かに、彼が全力を注いで描き上げたそれは、大胆で、精緻で、目を見張る迫力に満ちていた。

しかし、その一部分を担うもの、しかも教会にとって最も重要な意味を持つ部分が、司祭たちの反感を買った。

主であるイエスの姿

それが、なんとも酷たらしく表現されていたのだ。

なるほど、死体として、はりつけにされた姿を極限までリアルに描ききっているその技は素晴らしい。そう、テクニックだけに関して言えば。

しかし、『主』であるイエスをここまで無残に描く所に、神に対する不敬の念が感じられる、と解釈した者がいたのだ。

ましてやこれは聖檀画である。神聖なる教会内で、大いなる神を侮辱すること、この時代、それだけでもはや重大な罪であった。

彼の絵は、認められなかった・・・。

「・・・・・・」

くやしかった。

自分の描いた作品は、素晴らしい輝きを放っている。

ただ、その中に『闇』の、・・・魔の匂いがするからという理由

だけで、世間は認めようとはしなかった。

くやしかった。くやしくてたまらない。たまらないその気持ちをさらにキャンバスに叩きつけていく。くろぐろとしたもの。どろどろとするもの。

だがその時、生まれて初めて彼の心の中に疑問が湧いたのだ。

“認められないものを、何故描いているのか？”

それは、氷の刃のように冷たく、己の身を貫いた。

“後に何も残らない無駄な事をし続けて、やがてこの身は朽ちていくのだ。私がこの世に生を受けたのは、無意味であったのだ”

それは恐るべき想念だった。

今まで己を支えていたものが、全て崩れ落ちてしまう。どうしようもない脱力感が、彼の全身を包んでいた。

血の涙を流して慟哭した。

「誰か・・・、誰かいないのか！？」

明かりも灯さない部屋で、彼は必死で『闇』に吠えた。

「私の絵を判ってくれる者は・・・、私の人生を肯定してくれる者はいないのか！？」

冷たい『闇』が、血を吐くような彼の叫びを吸い込んでしまう。

「誰かっ！？」

返事をするものはいない。当然だ、彼はいつも一人なのだから。

ごとり、と彼は床に両膝をついた。

急に今までの疲れが出たようであった。闇雲に絵を描いている時には、感じたことなど絶対にないだるさを、全身に感じていた。
なんだか眠くて、部屋の空気はとても冷たかった。

右手に握りしめられた筆を見つめる。しかし、もう力が湧いてこないのであった。このまま、眠りについてしまおうと思う。
ことり、と糸の切れた人形のように床に倒れ込んで、彼は目を閉じた。

どのくらい、そのままでいただろう。

ふと、何かの気配を頭上で感じた。
風だ。不気味な風を頬に感じて、目が覚めたのだ。
おかしい、と気がついたのは少ししてからだった。
この部屋は閉め切ってあり、風が入る隙間などないはずなのだ。
この時になって、初めて彼は何者かが『闇』の中で自分を見つめていることに気づいた。
うふうふ、と小さい不気味な声で笑っているのである。

「・・・誰だ？」

思わず聞いていた。
部屋の外から入ってきた気配はない。それなのに、こいつは椅子に座っており、描きかけの絵を眺めてうっとりしていた。
やがて、画家の方に向き直る。
マントをはおり、黒メガネをかけた男であった。大きく曲がった鷲鼻が印象的である。

「残念でしょうねえ」

暗くて、表情までは良く見えないが、そいつが口を開く。
「あなたの絵のセンスは、人間どもには理解できないでしょうね」
「何・・・？」

ゆっくりと、彼は身を起こしていった。突然現れたこの男は、何者なのかと思っているのだ。
「でも、私ならあなたの真の力を理解し、評価する事ができるわ、どう？」
「どう、とは？」
彼はとまどった。
うふうふ、と侵入者は身をくねらせた。

「アタシのお抱え画家になってくれないかしら？」
三日月を横にした形に、男の唇がつり上がった。
その様子から、彼は邪悪な気配を感じ取っていた。

「あ、悪魔か・・・？」
ごくり、とのどが鳴る。
「悪魔が、この私に絵を描けと依頼しに来たのか？」
くしゃっ、と彼の表情が崩れた。

「あら、アナタが呼んだのよ。・・・よくお聞き、アタシについてくれれば、アナタは永遠に絵を描く事が出来るようにしてあげる。パンも要らず、年もとらず、好きなだけ時間を使えるようにね。アナタは絵の事だけ考えていればいいの、そして作品をアタシに見せて、楽しませてくれればいいわ」

「・・・何が望みだ？」
画家はかすれた声でつぶやいた。

「望み？」
男が問い返す。
「別に、アナタはアタシのために、次々と絵を描いてくれればいいのよ。アナタの描く『闇』は素晴らしいわ、それを楽しみ続けたいっていうのじゃ、ダメかしら」

かっ、と画家は目を見開いた。己の事を認めてくれる者がここにいた。
たとえそれが『闇』に住む悪魔であろうとも、彼にはかけがえのない愛しい存在に思えた。
やはり、画家である以上は理解者が必要であり、それが支えとなって新たな創作へのエネルギーになっていくのである。

「私の絵を、望んでくれるのか？」
震える声で言うと、男はうなずいた。

「永遠に描いていいのか？」
それにもうなずく。

画家は覚悟を決めた。

「ならば誓おう。永遠に、あなたのためだけに絵を描き続ける事を・・・」

ひざまずいて、彼は男の手に口づけした。忠誠の証だった。
うふうふ、と男は笑った。
「いい子ね、グリューネヴァルト。アタシの名は“狂男爵”、さあ、お前のためにアトリエを用意してあるのよ。行きましょう」

ばっ、とマントをはね上げ、ひざまずいたグリューネヴァルトの

頭の上からすっぽり被せる。
そのまま、二人の姿は静かに『闇』の中へ溶け込んでいった。
これが、魔界の“コレクター”狂男爵と、“『闇』を見つめる画家”グリューネヴァルトとの出会いだった。

画家は、悪魔に魂を売り渡してでも、描きつづける事を選んだのであった。

サンドラールは正しかったのだ。『グリューネヴァルト』は実在し、マティスは全くの別人だ。
誰が信じえよう、悪魔にさらわれたために生死不明になった画家の事など。そして、理解不能だからこそ、人は納得のいく説明が欲しかったのだ。それゆえ、『マティス・ゴートハルト・ナイトハルト』なる人物を祭り上げ、美術史の上に一般人の頭でも理解しやすいつじつま合わせをしたのだった。

こうしてグリューネヴァルトは文字通り『闇』の中へ消えていったのである。
ただ一人、狂男爵という理解者を手に入れて・・・。

狂男爵が用意したアトリエは、『闇』の中であった。
しかし、グリューネヴァルトは気にしなかった。キャンバスと、画材と、己さえあれば、描く場所などどこでもよいのだ。
そして彼は描き始めた。光の届かない、時間すらも流れるのを止めたその『闇』の中で……。

時間のないその場所では、うず高く積み上げられた作品の山が、彼の業績を証明するものであった。

『闇』の中に目を凝らせば、彼を中心に描き上げられた絵が、あるものはイーゼルに飾られ、あるものは何十枚も山のように重ねられ、物音一つ立てずに作者を取り囲んでいる。

その数は、百や二百ではない。

何万枚……いやそれ以上の数えようもない作品群が、恐ろしく広大な墓地に佇む無数の墓標のように、画家の周囲に存在していた。気の遠くなるような永い間、彼は絵を描いてきたのだ。

もはや、彼は絵筆を持った魔性のものであった。

不意に筆の動きが止まった。

キャンバスの表面を見つめるグリューネヴァルトの目。

らんらんと妄執に輝き、痩せ細った全身は幽鬼のようであった。

げっそりやつれた顔に、ニタリ、と会心の笑みが浮かぶ。また、一つの作品が仕上がったのだ。

無心で筆を走らせ、最後の絵の具の一塗り、これを済ませた瞬間は、何千万枚繰り返したとしても、たとえようも無いほどの快感であった。

「ご機嫌ね、マイハニー」

『闇』の中から声が響きわたった。

しかし、グリューネヴァルトは別に驚きもしない。このご主人はいつもこうして突然に、『闇』の中を現れるからだ。

うふうふ、と笑いながら狂男爵が姿を現した。

「また一つ、仕上がったのかしら？」

こくり、と画家はうなずき、己の主人に仕上がったばかりの作品を示した。

「おう、おう」

狂男爵が、それを見て目を細める。
「また『闇』に深みが増したわね」
狂男爵の言葉に、にいい、と物凄い笑みをグリューネヴァルトは浮かべた。
そして、ぺこりと頭を下げると、もう彼は別のキャンバスを準備し始めている。
たったそれだけのやりとりで、精根込めた作品のお披露目と、品評は終わりなのだ。
既に彼の興味は、次に描くものに移っていた。

「ハニー、ちょっと待って頂戴。次のテーマは、もう決まっているの？」
「まだだ、それはキャンバスを準備しながら決める」
ぎらりと光ったグリューネヴァルトの目に、突然、一人の少女の姿が写った。
狂男爵がマントの下に隠していたのだ。

白い帽子に白い服……『闇』の世界に突如出現したその少女は、それまで黒い世界に慣れていた画家の目を眩ませていた。

「ひいいっ！？」
と思わずグリューネヴァルトは叫んでいた。
うふうふ、と狂男爵は笑う。

「どうハニー、珍しいでしょう？　次はこれを描いてみない？」
「何だ、この娘は……」
魔物と化した画家は、その少女の持つ光溢れるイメージを直視しただけで、全身から冷や汗が流れていた。
「この娘は、光に満ちた太陽の季節……『夏』を象徴する精霊よ」

「ｄｅｒ　Ｓｏｍｍｅｒ？」

「『闇』を描く天才が、この娘が持つ光のイメージをどう表現するのか、とても興味があるわ」

クックックッ、と狂男爵は喉の奥で笑う。

まぶしげに、グリューネヴァルトは白い少女を見つめた。

――――人形のような無表情、何者も写さない虚ろな瞳……。

しかし、彼は気づいていた。空虚な見かけとは裏腹に、その少女の内部には『夏』の持つはつらつとしたエネルギーが渦巻いているのだ。　ごくり、と生つばを飲む。

『闇』の画家は、既に猛烈な勢いで考えを巡らせていた。

いかにこの娘を描くか。

激しく表現するか、落ち着いて描くか、全体はどのようなタッチで、色使いはこう……。

構想をまとめるのは、いわば闘いのようなものだった。

素材との真剣勝負である。彼は極度に集中して、少女を見つめ続けた。

ひとしきり睨み続けて、ついに彼は膝をついてしまった。

金魚のように口をぱくぱくさせ、呼吸困難になったかのように、胸を鷲掴みにして掻きむしった。

皮膚に溝がえぐられ、血が滴る。

「どうしたの！？」

突然の事に、さすがに狂男爵が声をかける。

肩で息をして、画家はうめいた。

「だめだ、今のままでは私にはこの少女を描ききることはできない……」
それは、絶望に満ちた敗北宣言であった。
「まあ」
狂男爵が目を剥いた。
血の色をした瞳で、グリューネヴァルトは男爵の顔を見上げた。
「絵の具が足りないのだ！　『夏』を表現するのに必要な、基本にして最も重要な色を作るために！」
「そんな……このアトリエで手に入らない絵の具なんてないわ」
身をくねらせて、狂男爵は悩んだ。
「普通の色ではないのだ。今までどんな画家も作れなかった色を誕生させねばならん！　すなわち『夏色』だ！　コバルトブルーではだめだ、マリンブルーではだめだ、群青色ではだめだ、水色……だめだ、だめなのだ！　もっと根源的で自然な、輝かしい青色の絵の具が必要だ！」
ぐおおっ！　と目をつり上げて、彼は咆哮した。己の腕だけで表現し得ない存在を目の前にして、地団駄を踏んで悔しがっている。
溺愛している画家の狂乱ぶりを見て、爪を噛んで狂男爵はオロオロしたが、はた、と何かを思い出す。
「そういえば、昔、人間界に住む魔女が、『ほんとうのそらいろ』という究極の青色絵の具を作りだすことに成功したと言う話を聞いたことがあるわ」
ぎょろりと落ちくぼんだ目で、グリューネヴァルトは狂男爵の顔を見た。
「それは、手に入るのか？」
しかし、狂男爵は首を振った。

「いいえ、その『そらいろ』はマヌケな弟子が全てこぼしてしまって、もう残ってないらしいの」
「では、せめて作り方は……？」
すがるように、画家はつぶやいた。

「そうね、ウワサでは、青虫の羽根を原料にしたというんだけど」
「青虫？」
「この娘が『夏』に変身する際に、そばに集まってくる妖精よ。それなら……」
ニヤリ、と狂男爵は笑った。
「……手に入るわ」

「ならば、それをすぐに手に入れて来い！　私の芸術が見たいのだろう？」
血が滲むほど強く握りしめた絵筆を、狂男爵に突きつけた。
闘争心にも似た創作意欲をかき立てられ、両目には青白い炎がちろちろ燃えているようだった。
本来主人に対してする態度ではないはずだが、その高圧的な物言いにも狂男爵は怒らなかった。
よほどこの画家の事を気に入っているらしい。
むしろ、やる気を漲らせた画家を見て、嬉しそうですらある。

「判ったわ、待っててねハニー！」
うふうふ、と身をくねらせて、べろりと唇を舐め上げた。

『闇』のアトリエで繰り広げられる、二人の魔物のやりとりの中で、ぽつん、と少女は立ち尽くす。

無表情な顔、虚ろな目……さらわれたショックが強すぎたのか、感情とか意志とかいうものが、ますます感じられなくなってしまっ

たようだった。

人形のようにただ外見を留めるだけの、中身のない存在になりつつある。そんな感じであった・・・。

長い間孤独に耐えて、ようやく『闇』の中から抜け出せたというのに、また同じ『闇』の中に連れ戻されてしまった。

彼女の瞳には、絶望という名の黒々とした『闇』が写っていた。

ＡＣＴ・７『夕刻の学園』

長い長い午後が終わり、日が暮れていった。
校舎も、校庭も、薄闇に包まれていく。

静かなたそがれを、弥生と和美は、北館と南館をつなぐ渡り廊下にある自動販売機の前で見つめていた。
夏休みも大詰めという今日になって、突拍子もない事が起こったのだ。しばらく、二人は無言でジュースを飲んでいた。

夏見の治療をすると言って、京平は保健室へ籠もった。魔法治療でも行うのであろう、何やら大昔の錬金術士が使うような、胡散臭い道具をたくさん運び込んでいた。異次元の住人を手当てするには必要なのかもしれない。
何だか薄気味悪くなって、弥生と和美はここへ逃げて来たのだった。先ほどは乱丸に思い出をすり取られたが、今度は京平に処女の生き血が必要だ、などと言い出されたらたまらない。
危ない所を助けてはもらったものの、どうしても、あの生徒会長の持つ雰囲気が怖くてたまらないのである。

乱丸はというと、森から学校へは戻らず、何か手に入れるものがあるとか言って、どこかへ出掛けていった。
そういう所は、いつもぶっきらぼうな男であった。

夕日は山の向こうへ姿を消し、東の空から、ゆっくりと夜闇が広がってきている。
紙コップのコーラをすすりながら、二人は今日起こった事を思い出していた。
とても現実離れしすぎていて、今思えば全て夢だったのではない

かと思うくらいだ。

しかし、と二人は思う。

弥生の手首には、黒騎士の一撃を受け止め損なった痺れが、まだ残っているし、和美の方は最近使えなくなっていたＥＳＰが、再び覚醒したのを自覚している。

あの、途方もない出来事は、すべて現実の事なのだ。

「あのコ、要するに夏のタマゴってことですよね」

両手で紙コップを握り、コーラの表面を見つめながら、和美がぽつり、とつぶやいた。

――――事情は京平から説明してもらっていた。

弥生も、半ば放心状態でうなずく。

「『夏』という季節は、ただ単純に、暦の上での七月から八月ごろの期間を差すものではない・・・・・・か」

すなわち、『夏』という空間エネルギーが存在するのだという。毎年七月ごろに、彼女たち『夏』候補が一人選ばれ、その身をもって、夏というエネルギー場を生み出す。

それは、核爆発よりもとてつもない力だ。それにより、『夏』という季節が生じる訳である。それが成されなければ、ただ単に気温の高いだけの時間が過ぎていく。

中身のない、からっぽの時が。

「今年は、彼女が夏を生み出せなかったから、ヘンな八月だったんですね」

「あたしゃ、まだピンと来ないわよ」

ぼそっ、とつぶやいて、弥生は髪をかきあげた。

その点、目に見えない異次元の事を理解するのは、自分自身も説明のつかない四次元的な力を振るう、エスパーである和美の方が、理解が早いらしかった。

彼女のＥＳＰが急に復活した事についても、京平が理由を説明してくれた。

つまり、『あちら側』のエネルギーが、和美の中で塞がっていたＥＳＰエネルギーの通り道を刺激して、詰まりを取り除いたのだという。

和美にとっては、逆にその事の方がちんぷんかんぷんであった。

「それにしても、『夏』が変身するにはタイムリミットがあるって言ってたけど、もしそれをオーバーしちゃったら・・・・・今年は『夏』が来なかった訳じゃない？　その場合、どうなるのかしら？」

「そうですよね」

代役は立てないらしいから、あの少女が生み出さなければ、今年は『夏』がないまま、秋へ移行していくことになる。

「会長の話じゃ、それは自然界にとってとてもバランスの悪い事だから、天変地異が起こって、そのズレを矯正しようとするらしいけどねえ・・・・・」

まだピンと来ないらしく、人ごとのように弥生は言った。

「でも、乱丸さんがちゃんと助けるって約束してたし、何とかなるんじゃないでしょうか？」

思いがけず、明るい声で和美が言うので、弥生は顔を上げた。

「和美ちゃん、言うようになったわねえ」

えへ、と和美は小首を傾げて、

「男の人が、ああいう顔で言った言葉は裏切られないって、あたし知ってますから」

弥生はどきりとした。この少女は、何といい表情をするようになったのだろう。
転入したばかりの頃の、オドオドした暗さがすっかり無くなっていた。何だか妹の成長を目にしたようで、訳もなく弥生は和美の髪を、くしゃっと掴んでいた。

「かっこつけちゃって、このお」
あははっ、と笑って、和美はさらに言った。

「それにね、あたし一ついい事を思いついたんですよ」
調子に乗って、ヘッドロックにいこうとした弥生の動きが止まった。
「え、何？」
ちび、とコーラを口に含んで、上目遣いに和美が弥生を見る。

「あの乱丸さんって、ドロボウさんだけど、人探しもすごく上手みたいですよね。だから、お願いしてみようと思うんですよ」
「まさか・・・・・・」
はっとして、弥生の眉が上がった。

「そう、どこかで生きてるはずのお兄ちゃんを、探し出してもらうんですよ！」
「！」

その手があった。
手がかりのない精霊ですら、簡単に捕らえてみせた乱丸なら、あの男を必ず見つけ出してくれるのではないか。

「なるほど、いい考えかもね」
うんうんとうなずく弥生。

しかし、その背後から、

「やなこった！」

という返事が返ってきて、ぶうっ、とコーラを吹き出した。

「なーんでオレが、男なんざ追っかけなきゃならねえんだよ。言っとくがな、オレは『怪盗』だ。人探し屋じゃねーんだよ」

「乱丸、びっくりさせないでよ」

すっかり暗くなった渡り廊下に、いつの間にか、乱丸が現れていた。しかも、何やら大きな荷物を背負っている。

「それに、オレは今忙しいしな。余計なことに気をとられる訳にはいかねえ」

ぶつぶつ言いながら、背負った荷物を足下へ下ろす。

「弥生よ、また面白いモン見せてやるぜ、楽しみにしてろよ」

「面白いモンって、あんた何持ってきたのよ？」

にやり、と乱丸が邪悪な笑みを浮かべた。

「なあに、昼間と同じ作戦さ、今度はあのくそったれ男爵がターゲットだけどな。京平が示してくれた手がかりを元に、エサを手に入れてきたんだよ」

言いざま、乱丸は荒っぽく荷物の包みをひっぺがしていった。

「これは！」

和美が目を剥く。

「あ・・・・・・あんた、どっからこんなもん・・・・・・」

弥生も、開いた口が塞がらなかった。

包みから出てきたのは、大きな油絵だった。しかも、それはより

巨大な作品の一部を、切り裂いて持ってきたようである。
『キリスト磔刑図』！
乱丸は、イーゼンハイムの聖檀画を破壊して、盗んできたのだった。
「ば、ば、ばか！」
乱丸の常識はずれな行動に、弥生はぐらぐらしてきた。
「美術館に展示中の名画に、あんた、何てことしたのよ！」
食ってかかる弥生の剣幕にも、乱丸は平気な顔だった。
「ぎゃーぎゃー騒ぐな、どーせ美術館だって保険かけてんだ。盗まれて、却って儲けてるぐらいのモンだぜ」
そう言いながら、彼は中庭に足を踏み込んで、その絵を思い切り地面に叩き落つけていた。
切り裂いて、盗んで、この上乱丸は何をするつもりなのか？
もう、問いただす気力もなく、弥生と和美はただ成り行きを見ているだけだった。
険しい表情で、乱丸はポケットからタバコを取り出し、ライターで火をつけた。
「あ、未成年のクセに」
思わず弥生が指摘したが、案の定乱丸は知らん振りした。
暗闇に包まれた中庭で、タバコの火が蛍のように明るくなったり小さくなったりする。どうやら、少し気持ちを落ち着かせようとしているらしかった。
昼間、化け物に殴られた恨みを思い出しているのだろう。

一息煙を吸い、吐き出すごとに、苛立っている表情が、少しずつ柔らかくなっていく。
ぽ、と煙で輪っかを作って見せて、乱丸はタバコをもみ消した。
「さて、おっぱじめるか」
そうつぶやいた時には、肩から余計な力が抜けていた。
「弥生、お嬢ちゃん、精霊に捧げるキャンプファイヤーだぜ」
「え？」
何のこと？　と問う前に、乱丸は何のためらいもなく、地面に落ちたキリストの絵に火をつけた。
「乱丸っ、何するのっ！」
めらめらと音をたてて名画は燃え始めた。
その炎で、乱丸の強烈な笑みが暗がりの中に浮かんでいる。
「何をしているのです？」
「生徒会長っ！」
「大変よ、乱丸のヤツおかしくなっちゃったみたい・・・・・・」
保健室から出てきた京平に、和美と弥生がおろおろしながら訴える。
「ははあ」
仁王立ちになって、燃えさかる絵をにらみ続ける乱丸の様子を見て、京平はあきれたようにため息をついた。
「昼の出来事が、よっぽど頭にきたんですね。荒っぽいメッセージを『あちら側』の狂男爵に送っているんですよ、彼は」
「絵を燃やすことが、メッセージになるんですか？」
ぱちくりと和美がたずねると、黙って京平はうなずいた。
「えい、もお、今日は何が起こってもあたしゃ驚かないわ、矢でも

鉄砲でも持ってこいっての！」
どうせ、相手は異次元の輩である。始めから理解の外の住人なのだ。弥生は開き直って声を張り上げた。

その時だった。

ずしん、と異様な音をたてて、校舎が揺れたのだ。

「きゃーっ！」
と、隣にいた和美の鼓膜を破きそうな叫び声を上げて、弥生は飛び上がった。
「地震よ、和美ちゃん、地震！」
揺れよりも、弥生の雄叫びの方にショックを受けて、和美は一瞬気が遠くなった。

「落ち着きなさい島村くん、地震ではありません。乱丸くんのメッセージが、あちらに届いたようですよ」
京平の静かな声で、弥生は我に返った。が、すぐまた目を見開く事になる。

「あ、あれ何よ・・・・・・？」
校舎の壁に、異様なものが写っていた。
「影、ですか？」
和美も、呆然としてつぶやく。

乱丸が、炎の前で高らかに笑い声を上げていた。

校舎の壁に、大きくなったり小さくなったりして、人の形をした影が、ゆらゆらと蠢いているのだ。
だが、影とは物体に光が当たった結果生じるものではないか。こ

の影には、本体というものがなかった。
それ自体が意志あるもののように、炎の明かりに照らされた外壁面をくるくる動いている。
声も出さず、音もないシュールなダンス。
それを見て、乱丸がげらげら笑う。

「あっはっはっ、ようやくオレのメッセージが届いたか。グリューネヴァルト！　大昔のネクラ画家め！　好き好んで『そっち側』に行ったくせに、まあだ『こちら側』に未練があるのかよ？」
ぴしりと指を差して、乱丸は哄笑した。

「乱丸・・・・・・そうか！」
合点がいったように、弥生はぽん、と手を打ち鳴らした。
「弥生さん、乱丸さんのやった事の意味、判ったんですか？」
和美が覗き込むと、弥生はえへん、と鼻息荒くふんぞり返った。

「要するに、あいつは昼間と同じように、『あちら側』の住人が自分から姿を現すように仕向けたのよ。しかも直接狂男爵をどうこうするんじゃなく、その溺愛しているお抱え画家を狙った搦手を使う事でね。そうでしょ、会長？」
グリューネヴァルトと狂男爵の関係は、さきほど京平から教わっている。

「ええ、その通りです。と、口で言うのは簡単ですが、驚くべきは彼の行動の早さでしょうね。今言ったことを実行するのに必要な物や条件を瞬時に判断して、短期間でお膳立てするパワーには、いつもほれぼれしますよ」
そして、最後に彼は必ず望みを果たすのです。と、京平は口の中で付け足した。

ずしん！

と、またもや校舎が揺れた。

揺れ自体は小さいのだが、その音が凄まじい。

「きゃーっ！」と悲鳴をあげ、弥生と和美は手足を突っ張って、壁にしがみついた。

ひときわ高い笑い声を、乱丸はあげた。

「ははは、どうした？　怒ってやがるのか？　そんな真似いくらしたってムダだぜ、痛くもかゆくもねえや！　ははは、って言ったって、影の世界に行っちまった貴様には、どうにもならねえよなあ、自分の力じゃ『こっち側』に帰ってくることもできねえか？」

くやしいか？　くやしいか？　と、繰り返し乱丸が壁の影に問い続ける。

くるくると影が動き回り、地団駄を踏む。

乱丸は、なおも挑発した。

「くやしかったら、オレを殺しに来てみろ。それがムリだったら、てめえのオカマ主人に助けてもらうことだな！」

叫びざま、なんと乱丸はまだ燃えさかる『キリスト磔刑図』を思い切り踏みつけた。

グリューネヴァルトが、『こちら側』で残した最後の自信作であり、トラウマにもなった因縁の絵を、彼は徹底的に汚したのであった。

ただでさえ画家は、自分の描いた絵にわが子のような愛着を持っている。

描くことに極端な執念を持っている彼なら、怒りも並であるはずがない。ここまでした乱丸をけして許すはずがないだろう。

何らかの手段をもって、必ず乱丸に報復をするはずである。

しかし・・・・・・、

その身は、影であった。

のどから血がしぶく怒声も、寝るたび悪夢に苛まれることになる呪いの言葉も、怒りにわななく振り上げた拳も、乱丸に届くことはあり得ない。

音もなく、ただ右に左に上に下にと、めまぐるしく二次元方向に動き回るだけで、その影から物理的に『こちら側』に届くものは何もないのだ。

彼は別世界の住人だった。

いくら暴れても、こちらの世界には何の影響も無い。

哀しいほど滑稽な、怒りのパントマイムを見ているようだった。

なんてシュールな・・・・・・。

いつしか、乱丸もばかにした笑いを止めていた。

京平も弥生も和美も、この寒けを覚えるような影の狂乱を見つめている。やがて、暴れ疲れたのか、ついに影もおとなしくなり、全身を小刻みに震わせた。

弥生と和美は息を飲んだ。動きを止めた影から、じわりと赤黒い血が滲んで、校舎の壁に大きく、

「Ｔｏｄｅｓ　ｕｒｔｅｉｌ」

というドイツ語が浮かび上がってきたのだ。

「とーです、うあたいる・・・・・・『死刑宣告』だと？」

乱丸は片眉を上げて、グリューネヴァルトの必死のメッセージを読み取ると、鼻で笑い飛ばし、すぐさま、

「ｔｏｉ，ｔｏｉ，ｔｏｉ！」（うまくやれよ！）
と言い返してやった。

そのふてぶてしい顔を、ごおっ、と音をたてて生臭い風が叩いていった。
渡り廊下にいる弥生たちの全身も叩きつつ、その風は走り抜けていく。

「来た・・・・・・」

京平が、静かな声でつぶやいた。

ACT・8『魔界へ・・・』

ACT・8

「あなた、なんて下劣な真似をしてくれるのかしら！」
ごうごうと、中庭の空を風が渦巻く中、どこからともなく狂男爵の声が響きわたった。

「やっと出やがったな、オカマバロン！」
してやったりと、乱丸はほくそ笑んだ。かなり乱暴な手続きだったが、まんまと引きずり出すことに成功したのだ。

怒りに震える狂男爵のきんきん声が、闇の空に響く。

「あたしのハニーが、何したっていうの？　芸術家のハートは、とってもナイーブでガラス細工のように脆く繊細なものなのよ！　それを、よくもここまで汚らわしく踏みにじってくれたわね、許さないから、キーッ！」
狂男爵の声に合わせ、壁の影もゆらゆらと動く。

それを見て、突然乱丸は頭を下げた。土下座であった。

「その通り、オレはグリューネヴァルトには何の恨みもねえ。それなのに、オレはあいつの作品を・・・・・取り返しのつかない事をしちまった。実際、それについては、オレが全面的に悪いと思う。この通り、お詫びするぜ」
地面に額をこすりつけるほど頭を下げて、彼は心から謝った。

見ている者全てが呆然とする行動であった。

「すまなかった」という一言を聞いて、影はもうくるくる暴れるのを止めた。影の世界の住人ですら、あっけにとられてしまったのかもしれない。

「・・・・・・謝るくらいなら、何であんなことそするのよ？　今更命乞いでもしようって言うのかしら？」

狂男爵の声が響く。

「乱丸」

「乱丸さん・・・・・・」

弥生と和美が、とまどったつぶやきをもらす。

京平も、黙って成り行きを見つめていた。

「何とか、お言い！」

高い声とともに、ごおっ、と風が乱丸の背中に吹きつける。

土埃が、ぶわっ、と舞い上がった。

く、く、く、く・・・・・・・

小さな含み笑いが聞こえてきた。土下座をしながら、乱丸は笑い声をあげているのだ。

「何がおかしいのよ？」

どこかにいる、狂男爵のカンに触ったらしい。

空中で、蛇が身もだえするように、吹きつける風がごうごうとうねっている。

乱丸は、ふてぶてしい表情で顔を上げた。

「命乞いなんざ、しねえよ」

狂男爵の言葉を鼻でせせら笑い、その場であぐらを組んで、空を見上げた。

「オレを殺してえんなら、今ここへ姿を現せよ。逃げも隠れもしねえぜ、首を洗って待っててやらあ」
手刀で、首を切る真似をしてみせる。不敵な宣言であった。
狂男爵たちの実力は、さきほど嫌という程思い知らされたというのに、自信たっぷりの態度であった。
「・・・・・・・・・」
狂男爵が、黙り込んだ。

「どうした？　憎ったらしいオレをぶち殺して、お抱え画家のご機嫌を直してやっちゃどうだい？」
小馬鹿にした目つきで、挑発を続ける。
「どうしても、アタシをそこへ引きずり出したいようね、ボーヤ。その手にはのらないわ」
きっぱりと狂男爵に手の内を見透かされて、乱丸は「あちゃ」と片目をつぶった。

「でもカン違いしないで頂戴、そちらへ行っても、あなたの首をちょん切るくらい訳ないわ。でもアタシ、荒っぽいことキライだし、実は、あなたの首よりも欲しいものがあるのよ・・・・・・」
意外なことを、バロンは言いだしたので、乱丸は頭をばりばりと掻く。
「それを差し出してくれるなら、アナタの命、助けてあげてもいいわよ？」

「何だ、そりゃ？」
うふうふ、と狂男爵は笑った。
「青虫を取り込んだ『マリーの箱』、それを差し出せば、あなたの命は取らないでいてあげるわ」
「・・・・・・・・・」
今度は、乱丸が黙る番であった。

「ね？　たかが呪われた箱一個で、大事な命が助かるのよ？」
きんきん響く声が、校舎と校舎の間にこだました。
その気色悪さに、思わず弥生と和美は耳を押さえてしゃがみ込んでしまう。
乱丸と京平は平気な様子で、互いの顔を見た。
「京平、あの箱は？」
「生徒会室です。机の上ですよ」
静かに京平が言った途端、上空の風が、ごう、と一筋の流れとなり、渡り廊下の入口から校舎の中へと流れ込んで行った。
「ちっ！」
舌打ちして、乱丸もその後を追いかけ始める。
へたり込んだ弥生と和美の頭上を飛び越え、校舎の中へ駆け込んでいった。

☆　☆　☆

風は、意志ある生き物のように廊下を走り、一気に生徒会室までたどり着いていた。
止め具ごと吹き飛ばす勢いでドアを開け、室内に風が流れ込む。
あった。
机の上に、ちょこん、と『マリーの箱』が置いてある。
ぐるぐる円を描くつむじ風は、すぐさまその箱を運び去ろうと襲いかかり、そして次の瞬間、目に見えない衝撃を受けて散り散りに霧散していた。
「うう！？」

どこかで、狂男爵のうめき声が聞こえる。
彼にも理解不能な力が、風を弾いたのだ。
見ると、箱の蓋が開き、中からのぞいた青白い手が天に向かって中指を突き立てていた。

「な・・・・・・」
呆然とした、狂男爵のつぶやきが響く。『手』は箱の中に消えていった。
「残念だったな」
その時には、もう乱丸が追いついて来ていた。
何百メートルも全力疾走してきたのに、息も乱していない。

「その箱にとりついているマリーってヤツは、相当気難しいヤツでな。気にいらないと思った相手には、指一本触れさせやしねえぜ」
つかつか歩く乱丸の頭上で、再び風が渦を巻き始める。
あっさりと箱を持ち上げて、乱丸は天井を見上げた。

彼の言うとおり、この箱はまさにジャジャ馬なのだ。
例えば、一人の勝気でわがままなお嬢さんを、いきなり手を引っ張って、さらおうとしたらどうなるか？　当然大暴れしてついて来てはくれないだろう。おとなしく言うことを聞かせるには、高価なプレゼントをあげたり、面白い話を聞かせて、手なずける事が必要だ、それと同じである。
乱丸は今日、この箱にいくつもキレイなプレゼントをしている。
弥生と和美の『思い出』。
輝くような青い羽根を持った『青虫』。

とにかく、何か美しいものや宝石などを与えれば、マリーはご機嫌になり、持ち主に少しのラッキーを与えてくれるのである。しか

し、一度ヘソを曲げたら、持ち主が破滅するまで不幸を招き寄せるのだ。
　そういった事から、乱丸はまだ今のところ、この箱に気に入られているらしい。逆に、急に持ち去ろうとした狂男爵には、頭にきているらしく、魔力をもって近づくことすら封じたのであった。

「こうなるとこいつは頑固だぜ、ましてや、一度中に取り込んで、彼女のコレクションに加えられた青虫を引っ張りだすなんて、あんたにゃとてもムリだな」
「では、あなたならできるとでも言うのかしら？」
　待ってましたとばかりに、乱丸の口元に会心の笑みが浮かぶ。

「オレに盗めないものなんてねえんだよ。こんな箱を攻略するのなんざ訳ねえぜ」
　自信に満ちたセリフであった。
「どうだ、てめえはこの中の青虫が欲しいんだろ？　ここは一つ、冷静に取引といこうじゃねえか」
「取引？」
「おう、お前のさらった『夏』と交換するなら、この中から青虫をうまく取り出してやるぜ」
「・・・・・・・・・・」

　この時になって、ようやく弥生、和美、京平の三人が追いついてきた。どかどかと、入口の所へ飛び込んでくる。
「あ、乱丸が箱持ってる」
「どうやら、大丈夫だったみたいですね」
　目に見えない存在と会話をしている乱丸を見て、肩で息をしながら二人はほっとした。
　それに構わず、乱丸は言葉を続けた。

「それがイヤだっていうんなら、オレはこの箱を夏見のスーツケースに放り込むぜ。誰も手の届かない、永遠の混沌の中に封じ込めちまうけど、それでもいいのかよ？」
ずい、と目の高さの空間にマリーの箱を突きつけて、乱丸は強い口調で問いかけた。
天井では、まだ小さなつむじ風がぐるぐる回転していた。
「別に、その箱の中の青虫じゃなくても、別のを見つけられればいいんだけど、そいつは精霊界でも幻の生物と言われてるくらい、どこで生まれてどこへ消えていくのか判らないヤツらなのよねえ」
狂男爵はため息まじりで、悩んだ。

『闇』のアトリエで待つお抱え画家は、一刻も早く絵の具を手に入れたいと要求しているのである。彼のご機嫌を損ねるのは、狂男爵にとって一番厄介な問題であるのだ。
「困ったわねえ、『夏』と青虫、どちらが欠けても意味がないのよね、アタシは両方欲しいのよ」
狂男爵は、乱丸の申し出には納得いかないらしかった。
『夏』を描く絵の具の原料として、青虫が必要なのだ。青虫を手に入れるために、『夏』を手放したら何にもならない。
「なら、オレを殺すがいいさ」
あっさりと、乱丸は極端な申し出をした。

「この箱は、今のところオレを所有者として認めているから、てめえを認めねえんだよ。オレが死ねば、こいつも新しい所有者を探し始める。その時が、チャンスだぜ」

「乱丸、何てことを言いだすのよ！」
「そうですよ、他に何か良い考えが・・・・・・」
血相変えて騒ぎだした二人を、乱丸は手で遮った。
ちら、と京平の顔を見る。

涼しげな瞳で、京平は見返した。まるで、心の中を全て見透かしているように、深い色をたたえた目であった。
すぐに、乱丸は視線を天井に戻す。
「どうだ！？」
すると、つむじ風がみるみるうちに消えていった。
代わりに、うふうふという狂男爵の笑い声が部屋中に響く。
「そんな簡単な方法があるなんてね、アタシもうっかりしていたわ・・・・・・」
心底嬉しそうであった。
「おう、オレの首が欲しいけりゃここへ来い！」
開き直りか、乱丸が叫ぶのを、京平は静かに見守っていた。

しばらく、何も起こらなかった。

「どうした！　オカマバロン？」
「ら、乱丸！」
うわずった弥生の声が、乱丸を振り向かせた。
すると、油絵の『扉』がわずかに開いて、向こうの世界へ続く廊下を隙間から覗かせていた。
あり得ない空間を。

「ちっ、てめえが来いって言ってんだろ、横着モンめが」
ぶつぶつ言いながら、乱丸は手に持った箱を、会長卓に置いた。
京平が、じっと見ている。
「おう京平、後は頼むぜ」
右手の人指し指と中指を立てて、にやっ、と笑ってみせ、扉のノブに手をかけた。
「ちょっと、乱丸、本当に行くの？」

青い顔をして弥生が聞いた。
「あん？　オレがいなくなると、そんなに寂しいかよ」
「茶化してる場合じゃないですよ、せめて皆で行けば・・・・・・・弥生さんは強いし、あたしも超能力者だし、少しは役に立つと思いますよ」
和美も訴える。その肩に、そっとあたたかい手が置かれた。
はっとして顔を上げると、京平の美しい顔がそこにあった。

「生徒会長さん・・・・・・」
「行かせてあげなさい、彼は天才ドロボウですからね、必ず狙った獲物を手に入れるはずですよ」
「でもね！」
まだ弥生が何か言おうとしたが、すっ、と京平の目が細まったのを見て黙り込む。
「それに、もし本当に死んでしまっても大丈夫、ボクが生き返らせてあげますから・・・・・・」
低い声で、冗談とも本気ともつかぬ事を、京平は口走った。

「そりゃ心強いや！　頼りにしてるぜ、魔法使い」
こちらも、同じ調子で乱丸が答える。
「じゃあな」
と、言い残して、乱丸はためらうこと無く扉の向こう側へ身を滑り込ませて行った。

☆　☆　☆

薄暗い空間が広がっていた。
日の当たる昼の明るさでも、月明かりの無い夜の闇でもない。言うなればその中間、明け方や夕暮れ時のぼんやりとした感じ、そん

な雰囲気の広大な空間が、目の前に広がっている。

「さて、と、どこに行けってんだよ」

乱丸は大きくため息をついた。

目を凝らせば、はるか彼方に地平線らしきものが見えるだけで、他には何もない、ただ真っ平らな地面が四方に広がっている。

これが例えば砂漠なら、砂の盛り上がりで風景に変化が見られるが、ここにはそれすらも無い。

砂漠よりも寒々しい、空虚さを持った場所であった。

ぽつん、と乱丸は一人で立ち尽くす。狂男爵も何も、彼意外の何者も存在しないのであった。

いや、と乱丸は思う。

いる。

無造作に立っていても、彼の精神はぴんと張り詰めていた。

すると、少し離れた前方の空間が、もやもやと陽炎のように揺らめくのが見えた。

周囲の空気に含まれる、『闇』の粒子の一粒一粒が、その一点に集まっていくようであった。

『闇』がやがて人の形になっていく。

黒騎士が、甲冑の表面をぬらぬらと輝かせながら、その巨体を出現させていた。

がちゃり、と金属のこすれる音をさせて、巨大な剣を構える。

それを見た乱丸は、牙を剥いて獰猛な笑みを浮かべていた。

「へっ、荒事はボディガードにお任せかよ？　ご主人様に伝えな、自分で汗を流さねえ怠け者は、どんな事でも最後に報われる事はね

えってよ」
乱丸の説教に黒騎士は答えず、無言で乱丸に襲いかかってきた。
飛燕の速さで、巨大な刃を真上から叩きつけて来る。
切れ味プラス無双の怪力が合わさっている究極の斬撃であった。
人間の身体など、あっさりと両断するに違いない。
しかし、乱丸はその攻撃に臆すること無く、一歩踏み込んで、するりと黒騎士の懐へもぐり込んでいた。
「てめえ、特別に本当の『神威』ってヤツを見せてやるよ」
そう言った乱丸は牙を剥いて、獰猛に笑っていた。
虚空のもとで、戦いが始まっていた。

☆　☆　☆

「行っちゃった」
呆然と、和美がつぶやく。
「一体、この絵はどんな仕組みになってるのよ?」
弥生が、恐る恐る『扉』の絵に手を伸ばすが、指先が触れた感じは、単なる油絵でしかなかった。
「普通の人間に、その扉を通り抜ける事はできませんよ」
のんびり京平が声をかけ、どこから準備してきたのか、冷たいアイスティを満たしたグラスを、ソファの前のテーブルに並べた。
「じゃ、何で乱丸は通れたのよ」
どうも、と言いながら、弥生はグラスに手を伸ばした。
「今言ったとおりです。彼はちょっと普通じゃないんですよ」

「確かに普通の人間は、あんなに手クセが悪くないわよねえ」
うんうんと納得する弥生に、京平は困ったように顔をしかめて、
「いや・・・・・そういう事じゃなくて、乱丸くんは、現代人では珍しく『あちら側』で暮らした事があるんですよ」
「ええ！　何よそれ？」
「彼は子供のころ、『神隠し』に逢っているんですよ。本人はあまり話したがらないですけど、ある仙人に助けられて、無事『こちら側』へ送り届けてもらったということです」

空白の十日間だったという。

怪我ひとつしないで帰ってきたが、異世界でどんな目に逢ってきたのか、すっかり性格が変わり、ちょっとした神通力を身につけていたという。
「もしかして、助けたその仙人が彼に何か教育を施したのかもしれませんね。『あちら側』に住む仙人の多くは、ありあまる時間をもてあまして、退屈しきってますから」
ふふ、と愉快そうに京平は微笑んだ。
もしその想像通りなら、今の乱丸の無茶苦茶な行動と、盗みグセは、その仙人にせいではないか。

「何て迷惑なコトをしてくれたのかしらねえ」
こめかみを指で押さえ、弥生はうーむとうなった。
「でも、彼といると楽しいでしょう」
京平の何気ない言葉を聞いて、和美の目が見開いた。
「ねえ？」

「あ・・・・・・はい」
京平の美しい顔が、気障にウインクしてみせたので、胸をどぎま

ぎさせながら、こくこくとうなずく。
鼓動を鎮めようと、手にしたアイスティをごくごく飲み干した。
「おかわり、いかがですか？」
いつの間にか右手にティーポットを持って、京平が聞く。
「あ、ありがとうございます」

「あたしにも、一杯いただけるかしら？」
不意に、部屋の奥の暗がりからきんきん声が聞こえてきて、和美と弥生は跳ね上がって驚いた。
「狂男爵！」
「あなた何でここにいるのよ！　乱丸はどうしたの？」
うふうふ、と縦ロールの髪をいじりながら、狂男爵がそこに立っていた。

「彼ならアタシのボディガードが相手をしているわ。それとも、もう首がちょん切れてる頃かしらね」
にいい、と三日月を横にしたような口の両端がつり上がる。
おぞましい、魔性の笑みだった。

「お生憎さま、あのしぶとい男がそう簡単にくたばるもんですか！逆に、ヨロイ男の方がひっくり返ってるんじゃないの？」
言いながら、弥生は背中に仕込んだ木刀を、ゆっくり抜き出していた。
「おや、そんなものを持ち出して、何をするつもり？」
殺気をみなぎらせ、中段に構えた弥生の姿を、狂男爵は馬鹿にした目つきでながめる。
「決まってるでしょ、保健室でうんうん唸ってる夏見さんの仇よ！乱丸が戻ってくるまでに、あんたをやっつけて、でかい顔してやるんだから！」

「まあ」
と、狂男爵はびっくりしたようだった。
「女のくせになんて野蛮な事を言うのかしら！　美しくないわねえ・・・・・・」
おおやだやだ、と狂男爵は首を振り、胸ポケットから一輪のバラを抜き出して口元へ持っていく。

「好きなこと言えばいいわ、いざ！」
気合を逆らせて、弥生は木刀を上段に振り上げた。
と、その瞬間、狂男爵は手首の動きだけで、バラの花を弥生の足元へ投げつけた。
すとん、と手裏剣のようにそれが床に刺さる。すると、
「ううっ！」
金縛りにかかったように、弥生は動けなくなってしまった。

「何よ・・・・・・・これ」
「まさか」
和美は見た、バラの花は弥生の影を縫い止めていることを。
「騒がしいのはキライよ」
こともなげに、狂男爵はつぶやく。

「狂男爵、ボディガードが乱丸君を殺すのを疑ってないなら、なぜ早々と姿を現したのです？　今来たとしてもまだ『マリーの箱』に触れる事もできないでしょうに」
落ち着いた声で、京平がたずねた。
うふうふ、と笑いながら、狂男爵は振り向いた。

「アタシって、結構欲張りなのよねえ」
何か邪な企みを秘めて、メガネの奥がいやらしく光っている。

「『夏』を手に入れた、青虫も目の前にある・・・・・・でもそれだけじゃ満足できないのよ」

「まだ何か、気に入った物でもあるのですか？」

「ええ、一目惚れしたわ。『マリーの箱』と一緒に、その小娘もいただいていくつもりよ」

にゅっ、とかぎ爪のついた指で指し示したのは、目を見開いて立ち尽くす和美であった。

「な・・・・・・」

突然の指名に、一瞬和美は全身が縮み上がった。

「なぜ、彼女までさらおうと言うのです？」

低く、京平は問いかけた。嬉しそうに狂男爵は身をくねらせる。

「この小娘が、とても珍しい存在だからよ、『こちら側』ではめったに見つけられない力を持っているし、何よりあの青く輝く髪が素晴らしいじゃない？　『あちら側』ならともかく、こちらの住人でそんな特徴を持っているなんて、まさに生きた宝石と呼ぶに相応しいわ。稀少価値はとんでもないことになるわね♪」

好事家特有の、収集品に対する偏執的な目つきで、べろりと舌なめずりをする。

「では、彼女も生きたまま保存しようというのですね？」

低く低くつぶやく京平の目は、糸のように細められていた。

静かな口調の中に、魔気とでもいうようなものが、滲み出てきている。

和美は、自分を巡って二人の魔人がやりとりをしている現実に怯えた。膝が、いつの間にかがくがく震え出している。

「それは、とても名誉な事だと思わない？　この世の全てのものは『永遠』に憧れるわ、変わらない自分、老いない自分、消え行く命

や、滅んでいくその身を悲しんで、誰もが不変でありたいと望んでいるのよ。私たちコレクターは、そんな彼らの叫びに応えて、望みを叶えてやる訳よ、そうすれば、彼らはもう孤独感も感じる事がなくなるわ。コレクターが愛情を込めて管理を続けるのだから・・・・・・、ねえ、喜ばしいことだと思わないかしら？」

そう言って狂男爵は高笑いした。

耳を塞ぎたくなるその笑い声を聞きながら、和美は思わず叫んでいた。

「それは、違うと思います！」

ぴたりと、狂男爵の声が止む。

「和美ちゃん・・・・・・」

固まったまま、弥生がつぶやいた。

震えながらも小柄な少女は、健気な表情で異世界からの訪問者を見つめていた。

「生は自分のものです。・・・・・・他人にモノ扱いされて、自分の運命の全てを握られながら、それで永遠を生きたとしても、その人生に何の意味があるのでしょうか」

胸元で、ぎゅっ、と拳を握りしめて、勇気を振り絞り和美が訴える。

「もし、そんなかりそめの生を自ら選んだ人は、生きながら死んでしまった人だと思います。誰も自ら保存されることを望んだ人などいなかったはずです。そうでしょう？　名誉な事とか、喜ぶべきだとか、それは貴方たちの傲慢なエゴイズムにすぎないと思います」

言葉を紡いでいくうちに、段々と勇気が湧いてきたのか、和美の瞳に、力強い光が宿っていた。

髪が、ＥＳＰを使う時のように青く輝き出す。

狂男爵ににらみつけられても、もう怯む事はない、正面から堂々と見つめ返す。

狂男爵のこめかみは、ぴくぴく痙攣していた。
「キレイだけど、生意気ねえ」
ぎりっ、と奥歯を軋らせる。
「不愉快だわ、生きたまま保存してやろうと思ったけど、二度とその口を聞けないようにしてあげる」
言いざま、その口元がすぼまった。
ブフウ、と強く吐息を和美に吹きつける。

「きゃっ！」
身の危険を感じて、彼女はとっさにＥＳＰでシールドを張りめぐらせた。しかし、驚いたことには、シールドは何の役にも立たなかった。狂男爵の吐息は、あっさりと素通りしてきたのだ。
「置物になるがいい！」
吐息を浴びた和美に、呪いの言葉を投げかける。と、本当に和美の手足が石に変化していった。

「ひ・・・・・・」
苦しむ間もなかった。
ヘリや、戦車すら叩き潰す彼女の超能力が、この魔性のものには一切通じないまま、和美は石と化してしまっていた。

「和美ちゃん！」
こちらも石のように動けない弥生が、叫び声をあげる。
狂男爵はのけぞって大笑いした。
「いい気味よ、魔界で爵位を持つ魔王のアタシに、人間風情が説教するなんて無礼にも程があるわ！」
よほど気に入らなかったのだろう、顔つきまで変化していた。
「あなた、この学園の生徒に、手を出しましたね？」

異様に静かな声で、京平が口を開いたのはその時だった。
「私の前で、この学園の生徒を傷つけましたね？」
もう一度、ゆっくり繰り返す。
狂男爵は、馬鹿にした笑いをあげた。
「だからどうしたっていうのよ、ええ？　あなたも、この魔王の中の魔王、狂男爵に逆らおうというの？　痛い目を見るだけじゃ済まないわよ！」
くわっ、と口を開く。その中に、鋭い牙がぞろりと並んでいた。
しゃふーっ！　と地獄の風のような、腐臭に満ちた瘴気が漏れ出てきて、弥生は息が出来ずに気が遠くなった。
しかし彼女は見た。
狂男爵の凄まじいプレッシャーにも、眉一つ動かさないで立っている京平の姿を。
静かにたたずむその全身に、怒りが満ちていた。
「五等爵の最低位の分際で、魔王の中の魔王とは笑わせる・・・・・・」
低いつぶやきであったが、それははっきり狂男爵の耳にも届いてきた。
「貴様・・・・・・」
狂男爵は怒りに震えながら、その時、或る事を思い出していた。
京平の美しい顔、その深い色をたたえた瞳・・・・・・。
「っ！？」
何かに気づいて、目に見えて、狂男爵は全身を硬直させた。
「ま、ま、まさか・・・・・・」

京平を指さすが、その手がぶるぶる震えている。

「私は、斎木学園の生徒会長です。この学園に仇なすものに、容赦するつもりはありませんよ」

目を閉じて、京平は何かをつぶやき始めた。

「アグロン、ニータグラム、ヴァイケオン、スティヒラマトン・・・・・・・」

長く長く、尾を引いて口にされたそれは、呪文の詠唱であった。

『何か』が、遠くから近づいてくるような気配がする。

「貴様・・・・・・いや、あなたは！」

何かを訴えようとした狂男爵の全身が、その瞬間動きを止めた。

『何者か』の見えない巨大な手で身体を掴まれているような・・・・・・。

その顔が、恐怖に歪む。

次の瞬間、弥生は我が目を疑った。

目を見開いた狂男爵の全身から、一斉に青い血が吹き出したのである。あたかも、目に見えない無数のピラニアが、一気に食らいつき肉を食いちぎったかのようであった。

「ヒイイイイイッ！」

今、狂男爵は激しく後悔していた。彼は京平の事を知っていたのだ、気づくのが遅すぎた。

全身を貫く地獄の責め苦に、恥も外聞もなくわめき散らし、死に物狂いの力を振り絞って、狂男爵は見えざる手の束縛から脱出していた。

血だらけで、一瞬だけ京平の顔を見る。紅に染まった目と、視線が合った。

「ギャアアアアアッ！」
獣のような叫び声を上げて、わき目もふらずに狂男爵は油絵の扉を開き、『あちら側』へ逃げ帰っていった。
閉じられた後は、普通の油絵となる『扉』の向こうで、恨みと恐れに満ちたうめき声が、いつまでも響いていた。

「せ、生徒会長・・・・・・？」
あまりの物凄さに、弥生は言葉が出てこない。
ふ、と柔らかな表情に戻った京平が、ぱちりと指を鳴らすと、全身と捕らえていた束縛が嘘のように消え去っていた。
ふと足元を見ると、バラの花が一輪、小さく萎れている。
はああ、と大きく息をつくと、和美も石化が解けて床にへたり込んでいる所だった。

しばらく無言で見つめ合う。そして、どちらからともなく、闇の力を持った生徒会長の顔を見上げた。
にこっ、と見るものを安心させる笑みを浮かべて、
「乱丸君、遅いですねえ」
と、京平は平然とささやいた。

☆　☆　☆

青黒い血にまみれた姿で、闇に包まれた広大なアトリエに狂男爵は転がり込んだ。
両目は恐怖に見開かれ、全身はがたがた震えていた。
「狂男爵よ、青虫とやらは手に入ったのか？」
キャンバスの前に『夏』を立たせ、椅子に座ったグリューネヴァ

ルトが、腕組みの姿勢で真っ直ぐ彼女を見つめている。
目だけが、ぎらぎらと異様な光を浮かべていた。
絵の具さえ手に入れば、即座に描き始めるために、全神経、思考の全てを、目の前のモデルに集中しているのである。
虫の息でのたうつ狂男爵の姿を見ても、何も感じないようであった。
乱丸に大事な作品を燃やされた事も、主人が傷ついて苦しんでいる事も、今の彼には関係ないのだ。
“描いてやる”
暴力的なまでに膨れ上がった創作のイメージが、闇の画家の内部でぱんぱんにはち切れそうな程であった。

「ダメよハニー、青虫はあきらめて頂戴・・・・・・」
弱々しく、狂男爵は言った。
くわっ、と画家の目が怒りに見開かれる。

「貴様、私の描く芸術が見たいのではなかったのかっ？」
怒声をあげた彼の周りで、黒々とした瘴気がもわっ、と渦を巻いた。

「許して頂戴、まさか、あんな所にあの化け物がいるとは思っていなかったのよ・・・・・・」
がたがたと恐怖におののき、全身を震わせるバロンに、もう一度青虫を手に入れに行ってこいというのは無理な話だった。
「ね？　何か変わりの青でいいじゃない。アナタの才能なら、充分魅力的な作品が描けるわよ？」
媚を売るように、哀れな声で狂男爵は画家のご機嫌を取る。
その態度に、グリューネヴァルトの目が、ぐり、とつり上がって凄まじい表情になっていった。

「あはははは っ！」
二人のやりとりの間に、不意に高らかな笑い声が割って入ったのはその時だった。
「“代わりの物で充分”だと？　それでよく芸術の理解者を名乗れたもんだな、オカマバロン！」
「その声は・・・・・・！？」
青い血をまき散らして、狂男爵は周りを見回した。
『闇』のアトリエの中には、誰も侵入してくるはずがなかった。しかし、モデルである白い少女の横に、あちこち傷だらけになった御咲乱丸が現れていた。

☆　☆　☆

「皆さん、どうやら乱丸さんは『夏』の所へたどり着く事に成功したようですよ」
血の気の失せた顔で、夏見が生徒会室のドアにもたれかかっていた。
「あ、あんた」
「動いて大丈夫なんですか？」
今にも力尽きてしまいそうな足取りで立っている彼に、和美が慌てて駆け寄っていく。
「そうですか、やはり『神威の乱丸』の実力は大したものですね」
京平が嬉しそうにつぶやく。
たった今、魔界の化け物を、不可思議な力で撃退したばかりとは思えないほど、冷静で落ち着いた口調であった。
「と、いうことは」
と京平はあごに指を添えた。
「夏はもう取り返したも同じですね。夏見さん、あなたも行かねば

ならない訳ですか？」
夏見は、和美に支えられながら、小さくうなずいた。
「私は、『シーズン・マネージャー』ですから」
とつぶやいた。

「でも、もう少し休んでからの方がいいんじゃない？」
弥生が言う。確かに夏見はふらふらで、まともに立つことすら、怪しい状態である。
しかし、夏見は力なく笑いながら、精一杯胸を張った。
「私は私の使命を全うしなくてはなりません。自分の受けた生が輝くものであるように、・・・・・『夏』が夏を生み出す所を見届けて、初めて私の存在は意味あるものとなるのですよ」
真っ青な顔で、なんとかウインクしてみせる事に彼は成功した。

「彼女のため、そして他ならぬ自分自身のため、一秒でも早く『夏』の誕生を促し、一秒でも長く今年の夏を見ていたい・・・・・・」
「夏見さん・・・・・」
支えている和美の手から、そっと身を離し、夏見は『扉』の絵の前に立ち、三人の方へ振り向いた。

「皆さん、本当にお世話になりました。願わくは、今年の『夏』があなた方の心の片隅に、思い出を刻みつけられるように・・・・・・」
深々とおじぎをして、黒服、黒縁メガネの『あちら側』の紳士は『扉』の向こうの、あり得ない世界へ消えていった・・・・・・。

☆　☆　☆

『闇』の中に、乱丸のゲラゲラ笑いが響いていた。

「何がおかしいのよ！」
きんきんした叫びを、狂男爵があげる。
それを聞いて、さらに乱丸はのけぞった。

「何がおかしいかだと？　てめえの程度の低さを公表してるクセにいばるんじゃねえよ。芸術の事を何にも理解してねえ俗物めが！」
そう言って、片手に持った黒い刃の大剣を、びしっ、と突きつける。
「その剣は！？・・・・・・あなたアタシのナイトを倒したの？人間にそんな真似できるはずないのに・・・・・・」
ぎょっとして、狂男爵は目を見開いた。

「うるせえ、今は芸術の話をしてるんだろうが！」
ぐわっ、と牙を剥いて、狂男爵を黙らせる。
「いいか、てめえはさっき代わりの物で済まそうとした。そんな考えは、それだけでもうダメだ。根本的に芸術を語る資格がねえよ」
ぽんぽんと、大剣の腹で肩を叩きながら、乱丸は見下す。
「てめえ、アーティストと一般人の差ってのは何だか知ってるか？例えば、絵を描くだけなら誰にでもできるだろ。じゃ、誰にでもできる事の中で、芸術として認められる作品に仕上げるには、何が必要なんだろうなあ？」
狂男爵もグリューネヴァルトも、無言で聞いていた。もちろん、少女の表情にも、変化は無い。
調子に乗って、乱丸は言葉を続けた。

「要するに、これよこれ！」
どん、と自分の胸を拳で力強く叩いて見せる。

「自分の作品に魂を込める事ができるヤツ、それがアーティストって生きモンって訳だな。少なくとも、オレはそう確信してるぜ。表

面だけの絵は、たとえそれが高級なテクニックを使って描かれた物でも、人を腹の底から感動させることはねえ。中身がねえからだ。無機物である『絵』に、生命を吹き込む事が出来たとき、はじめて人を感動させ得る芸術品になり得るのさ。ま、実際にそれを形にするのは、とんでもなく難しいことだけどな」

と、乱丸は片目をつぶる。

「そして、その境地を目指す奴らが、絶対にしちゃいけない事がある。自分なりのこだわりを捨てる事だ。結局作品ってのは、作者自身の鏡みてえなモンなんだよな。いつの間にか、自分という存在が絵の中に表現されている・・・・・だからこそ、理想の一品を仕上げるために必要だと感じたものは、全ておろそかにしちゃいけねえんだ。道具の一つ一つから描く時の姿勢など、なんでもいい、こだわり続けて突き詰めた先にしか、納得する傑作は完成しないだろうさ」

「うう・・・・・」

狂男爵は、うなるばかりであった。

「判ったか？　てめえの考えは、優れた画家の才能を潰してしまうどうしようもなく愚かな思想だってことが！」

なあ、とグリューネヴァルトに向き直る。

ずっと無言だった画家が、この時ようやく、

「ああ、その通りだ」

と言葉を発した。

その視界の隅で、うなだれた狂男爵が力なく地面にへたり込んでいった。画家は、ちら、と一瞬視線を動かし、すぐ乱丸に戻した。

「しかし、今の説には少し甘い所がある・・・・・」

ぼそりと、暗い瞳で下からにらみ上げながら、グリューネヴァルトは言った。

ぴく、と乱丸の片眉が上がる。

「行き詰まった芸術家は、時にこだわりを捨ててみるのも必要だと思うのだ。こちこちに固まり、柔軟性を欠いた自分のカラをいったんぶち壊し、新たな視点からものを見れるように・・・・・」

そう言ったグリューネヴァルトの口調は柔らかく、痩せこけた顔に浮かぶ表情は穏やかであった。

身の内を吹き抜けていく、さわやかな風を味わうかのような、うっとりとした様子で目を閉じる。

何か、乱丸の芸術論と、自分が今口にした言葉とで、彼の内部に変化が現れたようであった。

「そう、『新しい視点』だ！　思い出したぞ、あの若き日を！　祭壇画に新風を巻き起こそうと、『光』を描くために私はあえて『闇』を見つめ始めたのだ。相反するものを理解することで、より美しい『光』を表現するために！」

例えば、光を描こうとして、そのことだけを考えていたとする。すると、やがて自分の感覚がマヒしていることに気づいたのだ。

そして、ふと思いつく。

閉め切った窓を、久しぶりに開けた瞬間の、太陽のまぶしさを。それは、ずっと光を見つめていた時よりも、はるかに鮮烈で、衝撃的な一瞬であった事を。

それ故に、彼は『闇』を描き始めたのであった。

より強く、美しい『光』を求めるあまり、より暗く、おぞましい『闇』を求め続ける事になったのだ。

自分でも、何故『闇』にこだわるのか判らなくなる程に・・・・・。

グリューネヴァルトは、さっきまでとは違う光をたたえた目で、立ち尽くす白い少女を見た。
黒一色の世界に現れた、ひとすじの光明。
この娘が現れなければ、彼は永劫に『闇』をテーマにした作品を描き続けていただろう。『闇』を描くための『闇』を。
思わず叫んでしまう程、鮮烈な彼女の光のイメージが、忘却の彼方に置き去りにした本来のグリューネヴァルトを目覚めさせる事になったのであった。
みるみるうちに、彼の姿に劇的な変化が起きていく。
いや、見かけは変わらないが、その身の持つイメージががらりと一変したのだ。

『闇』を現すために『闇』を見つめる彼が、『光』を描くためにあえて『闇』を見つめる彼に。

似ているようで、全く違う。
最終的に見つめているのは、はるか至高の高みにある光の色であった。
「な・・・・・・」
呆然と、狂男爵は口を開いた。

「何を言ってるのよハニー！　あなたは『闇』を描く天才なのよ、その『闇』を見て、アタシが幸せになる・・・・・・それでいいじゃない、それでやってきたじゃない。アナタを理解するのはアタシだけよ？　だったら、アタシの望む作品だけを描いていればいいのよ！」
狂男爵のきんきん声は、すっかり裏返っていた。
パートナーの突然の心変わりが、信じきっていた彼に、相当なショックを与えたらしい。

その様子を、乱丸はニヤニヤしながら見つめていた。

「どーも、おかしな雲行きになってきたなあ。ま、痴話ケンカならいくらでもやってくれ、オレたちはお邪魔のようだから帰らせてもらうわ」

棒のように立つ『夏』の肩に手を回し、乱丸はグリューネヴァルトと狂男爵にウインクした。

そのまま、二人の姿が『闇』に滲んでいく。

「あ、待ちなさい！　ハニー、あいつらを捕まえて頂戴！　大事なモチーフを盗まれてしまったわ！」

血を流しすぎた狂男爵は、もはや乱丸を追う力が出ない。しかしそんな主人の懇願にも、お抱え画家は動こうとしなかった。

「ハニー、どうして盗まれるのを黙って見てるのよ？　さっきまであんなに描きたがってたじゃない」

か細い声で、狂男爵は画家の顔を見る。と、画家の目は真っ直ぐ自分を見つめていることに気がついた。

「あの少女なら、もういい。たっぷり目に焼き付けたからな、いつか描く日も来るだろう」

言いながら、グリューネヴァルトはべろり、と唇を舐め上げた。

「それより、ずっと私の心をくすぐる対象が、目前にあるのだよ」

「・・・・・・？」

グリューネヴァルトの指は、狂男爵を示していた。

「長いこと思っていた・・・・・・・最も上手に『闇』を表現するにはどうすればよいか・・・・・・そこへ、ヒントが飛び込んできた。即ち、『光』が人の形をして現れたのだ」

『夏』の事を言ってるらしい。

「なるほど、と思った。後は簡単だ、では『闇』も擬人化したらど

うなるのか？　すると、その答えが何と身近にいるではないか！」
にいい、と唇が耳まで裂けた笑みを、グリューネヴァルトが浮かべると、狂男爵は身を強張らせた。
「狂男爵、魔界の爵位を持つ『闇』に生まれし魔王よ！　私はこれまでに描いてきた無数の『闇』において宣言する。『闇の中の闇』というものを、貴男をモデルに見事描ききってみせるという事を」

その宣言を口にした瞬間、墓標のように放置された無数の作品たちが、「おおおおお」、と亡者のような声をあげた。
何百年もかけて、彼が一枚一枚魂を込めた作品たちである。いわば分身のようなものであった。
絵たちの歓声が、長く長く『闇』のアトリエにこだまする。

「・・・・・アタシを、描いてくれるというの？」
青い血のからんだ目で、狂男爵はグリューネヴァルトの顔を見つめる。
優しい目つきになって、グリューネヴァルトは言った。
「あの絶望の淵にあった私を、ただ一人、あなただけが理解し、必要と言ってくれた。その上、時を超越して絵に没頭できる場まで提供してくれた・・・・・・画家としての私にできる恩返しは、最高の肖像画をプレゼントすることぐらいです」
グリューネヴァルトの両目から、涙がこぼれた。
狂男爵が首を振る。

「いいえ、お礼を言うのはアタシも同じよ！　アナタの絵は、アタシの心を癒してくれた・・・・・・アナタの『闇』は、アタシの空虚な部分を埋めてくれるの、愛してるわよ、永遠に！」
「最上級のお誉めの言葉、身にあまる光栄であります」

主人に対して、敬意を払った挨拶をして、既にグリューネヴァル

トは作業に入っていた。
狂男爵の元での、最後の仕事だ。
究極の『闇』を描き終えたら、今度は彼の最終目標である、至高の『光』を描く挑戦に入るであろうから・・・・・・。
狂男爵の理想の画家、闇画家グリューネヴァルトは、主人の元を離れ永遠の別れを告げることになるのである。

「愛してるわ、ハニー」
殴りつけるように描いているグリューネヴァルトを見つめ、狂男爵はゆっくりと腰のサーベルを抜き放った。
「アナタはアタシだけのもの、どこにもやるもんですか・・・・・・」
「よし」
筆を走らすのを止め、会心の笑みを浮かべた画家の首が、宙を飛んで地面に転がった。

「『闇』だ・・・・・・」
その生首が、ぽつりと一言つぶやくと、満足そうに目を閉じた。
途端に、残った胴体の切り口から、音をたてて鮮血が溢れ出る。
しゅうしゅうと降り注ぐ生き血のシャワーの元、狂男爵はお抱え画家の最後の作品を見つめた。
そこには、吸い込まれそうな闇色が、べったりと描き出されていた。

「・・・・・・これは、アタシ・・・・・・」
最愛の者を亡くした狂男爵の胸の内には、キャンバスに表現されたのと同じ『闇』と、言いようのない孤独感が満ちていた。

ACT・9『「夏」が生まれるところ』

ACT・9

ぱちぱちぱち、と拍手が乱丸と少女を出迎えた。
「夏見？」
「乱丸さん、お見事です。素晴らしいお手並み、拝見させていただきましたよ」
血の気の失せた顔をして、夏見が立っていた。
「狂男爵から、『夏』を取り戻すだけでなく、彼の生き甲斐を奪うことで報復までしてきてしまうとは・・・・・・」

「あれが、狙ってやった事だって判ったかよ？」
乱丸が聞くと、夏見はうなずいた。
ばりばりと、頭を掻きながら乱丸、
「ま、あんだけ殴られたんだ。少しはやり返さねえとな」
にっ、といたずら小僧のような目で笑う。
すると、グリューネヴァルトが急に心変わりし、狂男爵の元を離れようとして悲劇的な結果になったのは、全て乱丸が導いた結果だというのだろうか？

「てめえのモンが奪われるくやしさってのを、思い知るだろうさ。おっさんはその上二回も刺されたんだしな、これでおあいこになったって事にしようじゃねえか」
神威の乱丸と呼ばれる少年は、通常盗みの対象にならない物まで見事に盗んでしまうようだった。人と人の絆までも。

「それよりも・・・・・・」
彼はぐるりと首を巡らせて、周囲の様子を見渡した。

ここは、『夏』候補が今年の『夏』を生み出すのに必要な、変身の場であった。

「ここで、いいんだよな？」

こくりと、夏見はうなずく。

「はい、この場所で彼女は『夏』を生み出すのです」

そこは、決して明るい場所ではなかった。むしろ薄暗く、ただ一ケ所だけスポットライトに照らされている部分があった。

柔らかな色合いのライト。

無表情のまま、少女はそのスポットライトが照らしてる場所を見ていた。

その一点に立つ。そうすることで、彼女のデビューがなされるのだ、彼女の消滅とともに。

実際には姿を変えるだけで、今すぐ死ぬという訳ではない。しかし、少女の姿をした彼女は消えてなくなり、別の存在になってしまう事は間違いない。

「さあ、怖い思いをたくさんしたね」

す、と夏見が右手を差し出し、少女をエスコートする。

「貴女は見なくていいものをたくさん見てしまった・・・・・・辛かったでしょう？　何のトラブルもなく、あの時すぐに変身してさえいれば平穏な生だったというのに・・・・・・」

軽い、羽毛のような少女の手をそっと握り、夏見は変身の場へ導いていく。

すると、この閉じられた空間のどこから湧いてきたのか、青色の羽根もつ無数のチョウが、周囲に飛び回り始めた。

ささささささ、と、静寂の中、虫たちの乾いた羽音が響く。

遅くなった『夏』の誕生を祝うかのような、幻想的な妖精のダンスであった。

その中を、ゆっくり夏見が少女をリードして歩いていく。

本来誰も目にする事のない一瞬。

今回、乱丸だけが特別に、その場に立ち会う事を許されたのだ。

「乱丸さん、このワンシーンを忘れないでいて下さい。誰も目にできない貴重なこの場面をお見せする事、それが私にできるあなたへの唯一の恩返しです」

安らかな表情になって、夏見は振り向いた。

おそらく、『夏』の誕生を見届けた後、彼も使命を終えてはかなく消えてしまうのだろう。

それ故乱丸の心に、思い出という形で、自分の存在を残しておきたいと願うのではないか。

――――もうすぐ使命が終わる。

使命を果たすことを目的とした、この生も終わる。

満ち足りた表情であった。

だが、乱丸は一言つぶやいた。

「・・・・・・つまらん」

と。

ぴく。

さすがに夏見の足が止まった。

「今・・・・・・何と？」
乱丸の方を、ゆっくり振り返る。
見ると、乱丸は不貞腐れたような顔で、二人の顔を見ていた。
「つまんねえよ、あんたら見てると、な」
また、言った。
夏見の顔が青くなった。
男が生涯をかける仕事を持つことを乱丸は認め、その気持ちを理解していたはずである。
まさかその彼が、その仕事を果たすための一番のクライマックスを、侮辱の言葉をもって汚そうというのだろうか！
怒りで、夏見は目の色が変わりつつあった。
その夏見に手を握られた少女も、無表情に振り返る。
乱丸はため息をついた。
「怒るな、『こちら側』と『あちら側』じゃ、生の概念が違うかもしれねえけどよ？　あえて聞きてえ、『生きる』って何だ？」
頭をばりばり掻きながら、乱丸は問いかけた。
「前に言ったとおりです」
即座に夏見は返答する。
「私にとっては『夏』を見守ること、彼女にとっては『夏』になること、これが私たちの生きる目的です」
きっぱりと、自信と誇りを持って夏見は言った。
「それそれ、『生きる』って事を、どーも事務的に捉えすぎてねえか、あんた？」
「しかし・・・・・・」

口ごもる夏見に対して、乱丸は無言の少女を指さす。
「見ろ、何でそいつには感情がねえ？」
「必要ないのです。また、あっても困るのです。喜怒哀楽が激しく精神のバランスが悪い状態ですと、生み出した『夏』はやはり不安定になってしまいます。それを防ぐために、彼女らにはなるべく純粋無垢な存在でいてもらう必要があるのです」
「んじゃ、それはそれでいいや。こっからはオレの主観で話をさせてもらうぜ」
まばたきもしない少女の目前まで、乱丸はずかずか近づいた。
「乱暴はやめてください！　そうでなくても、彼女は外界の汚れを身に浴びてしまったのですから」
「汚れ、ねぇ・・・・・・」
ばりばり、頭を掻きながら乱丸がぼやく。
「なんでもいいけどよ、『自分の命を輝かす』ったって、こいつは何にも自分の力でやっちゃいないんだぜ？　ただ、予定されてる人生をひたすら黙々となぞっているだけじゃねえか」
「・・・・・・・・・」
夏見は無言で乱丸を見る。
「さらわれたりしても何の抵抗もしねえし、周囲が騒いだだけで、こいつ自身は少しも動いちゃいねえ。ただ流れに身を任せているだけで、自力で自分の身を何とかしようなんて思ってねえだろ、こいつは！　どうだ？」
乱丸がそう言っている間も、少女はただぼんやり立っているだけである。
「ただ息をして生命活動を維持してるだけで、それで『生きてる』って言えるのかよ？　オレにはそれが理解できねえだけさ」
己の胸の内にある考えのもどかしさに、尚もばりばり頭を掻く。

「さっきおっさんは言ったなあ？　“見なくていいものをたくさん見てしまった、辛かっただろう”ってな・・・・・どうだ、てめえ自身はどう思っているんだよ？　こんな暗い穴ぐらの中で、どれだけ長い間暮らしてきたか知らねえが、逃げだした先で見たもの、聞いたこと、感じたことについて、お前はどう思っているんだ？」

「・・・・・・・・・」

黙ったまま、少女は乱丸の顔を見つめている。

「ダメですよ乱丸さん。彼女は感情などないのです、言葉も持ちません。彼女はただ、順番が来たら変身の場へ足を踏み出し、『夏』に変化していく。それだけの存在なのです。そしてそうする事だけが、彼女の幸せであり全てなのです！　一秒でもはやくそれを成し遂げさせてあげて下さいよ」

「そうはいかねえよ」

不満そうな口調で、乱丸は口をとがらせた。

「オレは自分の身体を張って、魔界のバケモンとやりあってきたんだぜ？　けど、せっかく助け出したお姫さまが、お礼の一言も言ってくれねえってのは、寂しすぎるじゃねえかよ。・・・・・おい！　てめえは『生きてる』んだろう？　消滅する前に、一つでいいから自分の意志で、何かしてみせろよ。『生まれた時から決まってた』事に、何の疑いもなく従ってるだけで、命を輝かす事になるわけがねえ、とオレは思うぜ？」

その時、ぴく、と少女の身体が震えた。

唇がわずかに動く。

本当にわずかな動きのため、とても言葉にはならない。しかし、無表情の少女の中で、何かが動いたようであった。

「まさか・・・・・・」
夏見が呆然とつぶやく。
乱丸は嬉しそうな顔で、その様子を見た。
「お、いい調子じゃねえか。口を開くってのも、他人に自分の意志を伝えるための第一歩さ」
言葉を知らないはずの精霊が、彼女自身無意識のうちに、口をぱくぱく小さく動かしている。
当然言語はつむぎ出されなかったが、イメージが頭の中に直接流れ込んできた。
“教エテ”と。
「あん？　何をだ？」
ぶっきらぼうに、乱丸が受け答えする。
尚も、少女の思考が届く。
“アタシ、ズットココデ一人ボッチダッタ、外ニ出ル時ハ変身ノ時ダト、ソレダケ考エテタ・・・・・・デモ、変身ノ前ニ、マブシイ所ニ行ッタ、ソコニハタクサンノ自分以外ノモノガ、イタ”
ぱくぱくと、必死で少女は口を動かす。ここまではっきり他人と会話するのは、生まれて始めての事である。
“アレハミンナ生キテルノ？”
大分、スムースに思考が届くようになってきた。意志を伝達する事に、急に適応してきたのだ。
彼女に、感情が芽生えつつあることを、夏見は驚きの表情で感じとっていた。

“何デアンナニタクサンノ人ガ生キテルノ？　ミンナ姿ガ違ウノハナゼ？”

すっかり、物事を考える事を覚えたらしい。世の中に、自分以外のものが存在する事を知り、不思議に感じる事を素直に疑問として受け止めている。

ぽん、と乱丸は少女の肩に手を乗せた。

「そいつはな、一人一人生きてる理由が違うからだ」

ぱちくり、と少女の大きな瞳がまばたきした。

“生キテル理由？”

「おっと、それまで教えてくれなんて言うんじゃねえぞ。それだけは自分で見つけ出さなきゃいけねえ。自分の生は自分のモンだ。どう生きるか決めるのは、結局自分自身って事だ、判るか？」

乱丸が言うと、少女は困ったような表情になった。

「じゃ、オレの方が聞くぜ？　お前は何をしたいんだ。ちっぽけな生の中で、何を成し遂げたい？」

「それは決まって・・・・・・」

「答えるのは、こいつだ！」

横から口を挟んできた夏見を、乱丸が一喝する。

「判ってらあ、お前がこの先なるのは一つだけだ。セミの幼虫は、チョウや鳥にはなれねえわな。だけど、だからといって他人に手を引かれて自分の人生の選択をないがしろにするんじゃねえ。たった一つしかない選択肢であっても、堂々と、自分の口で宣言するんだよ、でなきゃ、命が輝くわけねえと思うぜ？」

肩に置いた掌に、ぐっと力が籠もる。

「さ、お前は何になる？」

少女は首を巡らせ、上から照らすスポットライトの光を見た。
“私ハ・・・・・・”
乱丸の顔に向き直る。
“私ハ・・・・・・夏ニナル・・・・・・”
「おう、いい顔になったな」乱丸も、にっ、と笑った。
「そうでなくちゃ、よ」
とん、と少女の背中を押す。
「てめえで選んだ運命だ、てめえの足で歩いていけ」
少女はこく、とうなずき、歩き始める。
夏見は、不思議な気持ちでその様子を見ていた。
これまでの歴史の中で、感情を手に入れた『夏』候補などいなかった。全ての精霊は外界との接触を絶ち、汚れを知らぬ無垢な存在として純粋培養されてきた。そして、その純粋さを『夏』のエネルギーへと変換させていったのだ。
それから見れば、彼女は外界の汚れにまみれてしまったとも言える。
しかし、と夏見は思う。
変身の場の向かう彼女の、何ときれいな事か。
これまでと、違うエネルギーに満ちているではないか。
“何だ、これは？”
こんな『夏』候補は今までいなかった。この娘は、どんな『夏』を生み出すのか？
驚きの連続だった夏見は、さらに仰天する光景を次の瞬間、目に焼き付けた。
スポットライトの手前で、少女は立ち止まった。

「あん？」
乱丸の眉が、いぶかしげに上がる。
なまじ感情が出ただけに、怖じ気づいたのかと思ったのだ。
と、
彼女はくるりとUターンし、一気に乱丸の首に抱きついてきた！
スキを突かれた乱丸の目が、大きく見開かれる。

そして――――、
一瞬の、軽いキス。

すぐに少女は飛びすさり、うふふっ、と照れた笑い声を上げた。
そして、唇が動いた。

――――ア・リ・ガ・ト・ウ。

「・・・・・・・・・」

さしもの乱丸も、この攻撃は予想外だった。
硬直したまま、彼は少女がスポットライトの下に立つのを見た。
腰の後ろで両手を組んで、こちらを見て微笑んだ彼女の笑顔は、とても魅力的であった。

ざああっ。

瞬間、周りにひらひら舞っていた青いチョウたちが、一斉に渦を巻き始める。スポットライトを浴びた彼女の周囲に、青くきらめく光の竜巻が生じていた。

「・・・・・・全く、あんな『夏』候補は、初めてですよ」

下がってきたメガネをずり上げつつ、乱丸の横に夏見が立つ。
「やっぱり外界に出すものではありませんね。どこであんな事を覚えてきたのやら・・・・・・」
オホン、と咳払いする。
「でも・・・・・・職務上、こんな事を言っては不謹慎ですが・・・・・・何万年かに一度くらい、こういう季節があってもいいかも知れませんね」
ふっ、と夏見は肩をすくめた。

「彼女がどんな『夏』を生み出すのか、・・・・・・とても楽しみですよ」

「ああ」
乱丸も、こくりとうなずく。
二人の目前で、少女は『夏』に変わっていく。青い青い渦の中で・・・・・・。
夏見は、最後までしっかりそれを見届けてつぶやいた。
「やはり、美しい・・・・・・」
ひとすじの涙をこぼし、静かに夏見は目を閉じていった。

青い青い光の奔流が少しずつ収まっていくと、その場にはもう、静かにスポットライトが照らされているだけだった。

少女も、夏見も、乱丸も、すでにその場所から消えていた。

静寂が、その場所を包んでいった・・・・・・。

エピローグ

エピローグ

夜が、明けていた。

窓の外で、セミが威勢のいい鳴き声を「これでもか」と響かせている。

太陽は、まだ昇りはじめのクセに、既に灼熱の光を世の中に撒き散らかせていた。横になっているだけで、全身から汗が噴き出し、服をべったりと背中に張りつけている。

う～ん、とあまりの暑さに耐えかねて、弥生と和美は目を覚ました。

「あ・・・・・・暑うぅ」

開口一番、弥生はうなるようにつぶやいた。

「たまんないですねえ・・・・・・」

和美も目をこすりながら、ハンカチで顔の汗を拭う。

いつの間にか、二人とも生徒会室のソファで眠り込んでしまったらしい。サウナのように蒸し暑い室内に、二人は悲鳴を上げる。

窓は開けっ放しなのに、入ってくる風は熱風だ。

「わあ、弥生さん見てくださいよ。今日はすごくいい天気・・・・・・」

「ホントだ、暑いわけだわ」

ばたばたと胸元をあおぎながら、二人は窓から空を見上げる。

何日ぶり・・・・・・いや、何ヵ月ぶりかのように晴れ渡っている空であった。抜けるような青空に、ぎらぎら照りつける灼熱の太

陽が輝いている。
まぶしい、空だった。

「よお、寝ぼすけ共、ようやく起きたかよ」
ふいに、真下から声をかけられて、まだ半分眠っていた頭が、しゃきっとする。

「乱丸！　あんたいつの間に帰ってきたのよ？」
見ると、窓のすぐ下の芝生に乱丸がにやにやしながら寝そべっていた。
「・・・・・・どうしたんです、何か嬉しそうですね？」
和美が言うと、ますます乱丸の顔にしまりが無くなる。

「にひひ・・・・・・そう見えるか？　ひひひひひ」
そう言う間にも、乱丸は思い出し笑いをするので、弥生と和美は顔を見合わせた。

「何よ、気持ち悪いヤツねえ。きちんとあの化け物から、『夏』は取り戻したの？」
にやにやしながら、乱丸は空を指さした。
「見りゃ判るだろ？　オレに盗めねえモンなんてねえんだよ」
「また、えらそーに」
「でも弥生さん、ほら」
和美はまぶしげに目を細めて、青空を見上げた。

入道雲の浮かぶ空。
木もれ日でさえもまぶしい、陽射しの強さ。
熱気をはらんだ風。
目前の木で、全身を震わせてシャウトしているアブラゼミたち。
どこか、遠くからは麦わら帽子を被った子供たちの笑い声・・・・

・・・。

「感じますよね？」
和美の言葉に、弥生はうなずいた。
「・・・・・・『夏』、だわ・・・・・・」

異世界で何があったのかは知らない、しかし、途方もない冒険をしてきたであろう乱丸は、のんびり寝そべって、しまりのない表情で、にやにや空を見ている。
その顔から足の爪先まで、弥生はじろりと眺める。

「乱丸、それにしても今回は地味ね。あんたの事だから『あちら側』の珍しいモノ、片っ端から持ってきそうなものだけれど・・・・・・」
「手ぶら、みたいですね」
二人の言葉を聞くと、乱丸は大笑いして、

「いーや、ちゃんと盗んできたさ」
とウインクする。
「はあ？　何も持ってないじゃない」
「一体何を盗んだんです？」

――――珍しい貴重な宝石とかを隠していないだろうか。

好奇心で、和美の目がきょろきょろ乱丸の身の回りを見回す。
構わずに、乱丸はまっすぐ空を見つめていた。
そこにある、とてつもないもの。
それを乱丸は手に入れたのだ。

そっと右手の人差し指で、唇に軽く触れてみる。

「にひひひひ・・・・・・」
また、一人で思い出し笑いを始めたので、弥生と和美は互いに顔を見合わせて肩をすくめた。

すると、
空を見上げる乱丸の視界を、一匹の青いチョウが横切ったので、彼はぎょっ、として起き上がった。

「あ・・・・・・」
「あのチョウは！」
弥生と和美もほぼ同時に気づき、舞い飛ぶチョウを目で追った。
“まさか、あの白い帽子を被った少女が再び姿を現すのか！”

どきん、と三人の胸が高鳴った。

しかし、
木の影から姿を現したのは、黒い服に身を包んだ生徒会長、蘭堂京平だった。
「なんだよ、がっかりさせやがる」
がくっ、と肩の力を抜いて、乱丸は手元の草をぶちっと抜いた。

「何を期待していたのです、乱丸君？」
くすくす笑う彼の手には、『マリーの箱』が乗せられている。
京平は、その中に捕らえられていた青虫を、マリーに頼んで開放してやったのだ。

「別にい」
恐らくなんでもお見通しであるはずの京平に、乱丸はとぼけて見せ、青空をバックにゆっくり飛んでいくチョウを見ていた。

上へ向かって飛んでいく。

空へ、空へ、青空へ・・・・・・。

やがて、青い羽根持つ美しい虫は、大空の青さと同化して見えなくなっていった。

そして、その空のもと、

――――夏休み最後の日。

本当の『夏』が、ようやく訪れて来たのであった。

この日は今年最高に暑く、情熱的な一日となった・・・・・・。

（『斎木学園騒動記（夏騒動編）』

完）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6844e/

斎木学園騒動記（夏騒動編）

2010年10月10日01時09分発行